

李義山七律集釋稿(三)

李義山七律注釋班

* 七律のうち詩中の文字を借りて題とする作品八篇を載せる。

* 席本李商隱詩集を底本とし、とりあげまたは引用する義山の詩には底本の排列による作品番號を記す。「李義山詩各本篇目對照表」

(本學報五〇冊) 參照。

* 義山の文の引用は樊南文集詳註および樊南文集補編により、「文集」および「補編」と略稱する。

* 文獻(7)の唐詩は、絶句が萬首唐人絶句、絶句以外の詩體が(5)の叢刊本と同系のテキスト、を底本とする。文獻(9)の唐詩類苑も、叢刊本と同系のテキストを底本とする。

* 舊注をふまえるばあいも原則として注者の名を明示しない。舊注諸本の詩釋については、釋者の名を掲げ、原則として全文を載せる。

* 詩釋のうち、胡震亨の項の分類表示は、統籤の作品排列で胡氏が明確に分類項目を立てた咏古(十六首)および情詞(二十數首)の二類目のみを記す。

* 朱鶴齡の項の「補注」は文獻(1)順治刊本各卷末に附されるもの。

また何焯と紀昀の項の「評本」は(12)の沈氏輯評本をさす。

* 主要文獻一覽

一 無注本

(1) 李商隱詩集三卷 唐詩百名家全集本(席本)

(2) 李商隱詩集三卷 影印錢謙益寫校本(錢本)

(3) 李義山集三卷 唐人八家詩本(毛本)

(4) 全唐詩(三卷)

(5) 唐李義山詩集六卷 四部叢刊本

(6) 唐晉統籤(十卷)

(7) 唐詩(十一卷) 藝文印書館影印本(稿本)

(8) 李商隱詩集十卷補遺一卷 高麗刊本(懷德堂文庫藏)

(9) 唐詩類苑二百卷

二 舊注諸本

(10) 玉溪生詩箋 錢龍惕撰(靜嘉堂文庫藏)

(11) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 順治十七年序刊本

(12) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 沈厚煥輯評

(13) 西崑發微三卷 吳喬撰

(14) 義門讀書記李義山詩二卷 何焯撰

(15) 李義山詩疏二卷 徐德泓・陸鳴泉撰 (徐陸合解) (懷德堂文庫藏)

(16) 李義山詩集十六卷 姚培謙箋

(17) 玉溪生詩意八卷 屈復撰

(18) 重訂李義山詩集箋注三卷集外詩箋注一卷 朱鶴齡元本 程夢

星刪補

(19) 玉溪生詩說二卷 紀昀撰

(20) 玉溪生詩詳註三卷 馮浩撰

(21) 玉谿生年譜會箋四卷・李義山詩辨正不分卷 張采田撰

(22) 李義山詩偶評三卷 黃侃撰

三 唐詩選本注釋

(23) 註唐詩鼓吹十卷 郝天挺撰 廣文書局影印元刊本

(24) 唐詩鼓吹註解大全八卷 廖文炳撰 (內閣文庫藏)

(25) 唐詩鼓吹十卷 元好問輯 郝天挺注 廖文炳解 王清臣・陸

貽典參解

(26) 唐才子詩甲集七言律八卷 金聖嘆撰

(27) 才調集十卷 韋穀輯 馮舒・馮班評 (二馮評閱本)

(28) 才調集補註十卷 殷元勳箋註 宋邦綏補註

(29) 唐詩貫珠六十卷 胡以梅撰

四 近代注釋

(30) 李義山詩講義 森槐南

(31) 李義山の無題詩 鈴木虎雄 (中國文學報六册)

(32) 李商隱 高橋和巳 (中國詩人選集一五)

(33) The Poetry of Li Shang-yin 劉若愚

(34) 李商隱詩選 安徽師範大學中文系古代文學教研組

(35) 李商隱詩選 陳永正

* 掲載詩篇目

二月二日 100 二九四頁

即日 106 三〇一頁

富平少侯 211 三〇七頁

銀河吹笙 259 三一六頁

中元作 275 三二三頁

茂陵 300 三三一頁

宋玉 394 三四一頁

九日 503 三四八頁

二月二日 100 二月二日

二月二日 江上行 二月二日 江上を行く

東風日暖聞吹笙 東風日暖かに 吹笙聞ゆ

花鬢柳眼各無賴 花鬢柳眼 各無賴

4 紫蝶黃蜂俱有情 紫蝶黃蜂 俱有情有り

萬里憶歸元亮井 萬里歸るを憶う 元亮の井

三年從事亞夫營 三年事に従う 亞夫の營

新灘莫悟遊人意 新灘は遊人の意を悟る莫らんや

8 更作風簷雨夜聲 更に風簷雨夜の聲を作す

校

0 唐詩鼓吹七

唐詩類苑(一一六人部羈旅類)

5 井 高麗本「宅」

7 灘 唐詩鼓吹「春」 毛本「春」作「灘」 朱鶴齡本・全唐詩校注

「一作春」 稿本旁注「春」

悟 鼓吹「悞」作「怪」 唐音統籤「悞」 馮浩本校注「一作誤」

高麗本「悞？」(漫漶、判讀困難)

毛本「訝」作「悞」 朱鶴齡本・全唐詩校注「一作訝」 稿本

旁注「訝」

8 雨夜 鼓吹・高麗本「夜雨」 毛本・朱鶴齡本・全唐詩「夜雨

一作「雨夜」 稿本「雨夜」を「夜雨」に改む。

統籤「雨後」

韻(韻目は廣韻による。以下同じ)

下平十二庚(行・笙) 十四清(情・營・聲) 同用

*

何焯

〔讀書記〕兩路相形。夾寫出憶歸精神。合通首反覆咀咏之。其情

味自出。○隋宮99・籌筆驛101・重有感271・隋師東393諸篇。得老杜

之髓矣。如此篇與蜀中離席98尤是。莊子所云善者機(評本 本條

を「結構與蜀中離席一篇同」に作る)。○前半。逼出憶歸。如此

濃至。却使人不覺。所謂國風好色而不淫也。○其神似老杜處。在

作用不在氣調(評本 文頭に「此等詩」の三字あり)。

2 卽溫(庭筠)詩(旅泊新津却寄一二知己)併起別離恨。似聞歌

吹噓之意。

7・8 同一江上行也。耳目所接。萬物皆爽。不免引動歸思。及憶

歸不得。則江上灘聲。頓有淒淒風雨之意。筆墨至此。字字化工

(評本「爽」を「春」に、「免」を「覺」に、「不得」を「未得」

に、「淒淒風雨」を「風雨淒淒」に、「化工」を「俱有化工矣」に

作る)。○杜荀鶴(長安春感)詩云。此時晴景愁于雨。是處鶯聲

苦似蟬。落句。當以此意求之(評本「晴景」を「情蘭」に、「落

句「意」なし)。

〔評本〕拗體。○直寫甚老。○亦是客中思鄉。說來溫雅清逸。

7・8 老杜(送李校書二十六韻)云。回身視綠野。慘淡如荒澤

(各條讀書記なし)。

陸鳴皋

此在幕出遊詩也。魄力雄瀨。逼眞少陵遺法。

姚培謙

此義山在東川時懷歸之作。大凡人生境界無常。只心頭不樂。好境都成惡境。此詩前四句。乍讀之豈不是春遊佳況。細玩一各字。一俱字。始覺無賴者自無賴。有情者自有情。於我總無與也。蓋萬里憶歸。三年從事。誠非花柳蜂蝶所能與知。乃新灘水響。更作風雨蕭條之聲。聒入愁人之耳。猶似妒我此遊也者。然則此遊真屬可已也。

屈復

偶行江上。日暖聞笙。花柳蜂蝶。皆呈春色。獨客遊萬里。從軍數載。觀此春光。能不懷鄉。故囑令今夜新灘莫作風雨之聲。令人思家不寐也。

程夢星

詩中三年從事。以歲月考之。當從事嶺南時。本傳。三年之後。即隨鄭亞入朝矣。其所謂莫悟遊人意者。當是借灘聲以喻絢之怨亞及己。乃不解其入幕之非黨附也。

紀昀

〔詩說上〕四家評（袁彪·楊守智·何焯·田蘭芳評）曰。前半逼出憶歸。如此濃至。卻令人不覺。○元亮井。事無所出。恐是葛亮之訛。○補遺香泉（汪存寬）評曰。兩路相形。夾寫出憶歸精神。合通首反覆咀嚼之。其情味自出。〔詩說下〕問二月二日詩七句。如何下莫悟二字。灘豈有知之物耶。曰。此正滄浪所云。詩有別趣。非關理也（各條評本なし）。

〔評本〕灘。一作春。悞。一作訝。俱誤。

馮浩

6 此寓柳姓。

7·8 悟字入微。我方借此遣恨。乃新灘莫悟。而莫作風雨淒其之態。以動我愁。真令人驅愁無地矣。作誤作訝。似皆淺也。

黃侃

案詩詞。當爲東蜀作。

廖文炳

此詩言懷歸之意也。首云二月二日。江上聞吹笙。乃動鄉心。遇見江上之柳眼花鬚。各無依賴。黃蜂紫蝶。俱有春情。然歸心雖切。而久役未寧。故欲遊江上。以消思鄉之愁也。時尚事令狐楚。故借言亞夫營。其情不已。明日復來。新春不可作風簷夜雨之聲。悞我遊樂之意。反生客愁也。

王清臣·陸貽典

首云。二月二日。江上聞吹笙。所見者柳眼花鬚。紫蝶黃蜂也。乃余萬里遊遊。憶歸元亮之宅。而三年淹久。猶滯亞夫之營。庶幾乘此春明。時來遊此。以適鄉思。不可作風簷夜雨之聲。悞我遊樂之意。反生客愁也。○後漢書。班彪避地河西。從事大將軍竇融。此詩當從事軍中而作也。

金聖嘆

此二月二日。乃是偶然恰值之日。是日本是東風。却又日煖。江上閒行。忽聞吹笙。因而遽念家室。不能自裁也。花鬚柳眼。寫盡少年冶遊。紫蝶黃蜂。寫盡閨房祕戲。看他無賴有情上。加各字。俱

字。猶言物猶如此。人何以堪也（前解）。

前解。止寫春色惱人。此解。方寫乘春欲歸也。五言別去之遠。六言別來之久。七八。言趁此風晴日煖。便宜及早束裝。毋至風雨淋漓。又恨泥滑難行也（後解）。

近代注釋

〔劉若愚〕一六二頁。〔安徽師大〕一四四頁。〔陳永正〕二六頁。

* * *

0 集釋稿(二)に載せた十首のように、詩篇冒頭の二字を取って題とする作品を、かりに狹義の「借題」とすれば、詩中の任意の二字ないし四字をえらんで題とするものを廣義の借題とみなしうる。狹義のばあいは、詩の正文と題との關連性は原則としてゼロに等しいはずだが、廣義になると、關連度ゼロと百パーセントとのあいだのどこかに位置することになるう。

本篇においては詩題として冒頭の二字だけでなく、四字までがえらび取られており、しかも二月二日は三月三日や九月九日などと同様に、當時の節句の日でもあったから、關連度きわめて高く、あるいは題詠の可能性さえあるかもしれない。

1 二月二日 二月二日に踏青を行う風習が唐代半ば以後一般にあった。〔舊唐書一代宗紀〕（大曆二年）二月壬午（二日）。幸昆明池踏青。〔李紳秦中歲時記〕二月二日。曲江採菜。士民游觀極盛（說郭七四）。〔杜氏壺中賚錄〕蜀中風俗。舊以二月二日爲踏青節。都人士女。絡繹遊賞。緹幕歌酒。散在四郊（歲時廣記一春・

李義山七律集釋稿（三）

遊蜀江條）。〔文昌雜錄三〕唐歲時節物。元日則有屠蘇酒。…二月二日則有迎富貴果子。…今歲時遺問略同。

〔白樂天二月二日詩〕二月二日新雨晴。草芽菜甲一時生。輕衫細馬春年少。十字津頭一字行。〔又二月一日作贈韋七庶子詩〕明朝二月二。疾平齋復畢。應須挈一壺。尋花覓韋七。〔韓琮二月二日遊洛源詩〕舊苑新晴草似苔。人還香在踏青迴。〔黃滔二月二日宴中貽同年封先輩渭詩〕桂苑五更聽榜後。蓬山二月看花開。

二月二日で始まる義山のこの詩も白樂天の詩も、杜甫麗人行の起句を意識しているか——三月三日天氣新、長安水邊多麗人。

江上 〔文選四左思蜀都賦〕巴姬彈弦。漢女擊節。起西音於促柱。歌江上之颯厲。〔又二〇謝朓新亭渚別范零陵詩〕心事俱已矣。江上徒離憂。〔杜甫江畔獨步尋花七絕句之二〕江上被花惱不徹。無處告訴只顛狂。

2 東風 〔禮記月令〕孟春之月：東風解凍。〔江淹詠美人春遊詩〕江南二月春。東風轉綠蘋。〔范雲送別詩〕東風柳線長。送郎上河梁。

日暖 〔岑參山房春事二首之一〕風恬日煖蕩春光。戲蝶遊蜂亂入房。〔李嘉祐與鄭錫遊春詩〕日暖臨芳草。天晴憶故鄉。〔李賀感春詩〕日暖自蕭條。花悲北郭驛。

吹笙 〔詩小雅鹿鳴〕我有嘉賓。鼓瑟吹笙。〔文選四左思蜀都賦〕彈箏吹笙。更爲新聲。〔杜甫成都府詩〕喧然名都會。吹簫聞笙簧。信美無與適。側身望川梁。

二九七

3・4 「玉臺新詠九簡文帝雜句春情詩」 蝶黃花紫燕相追。楊低柳合路塵飛。〔春日103〕 蝶銜花蕊蜂銜粉。共助青樓一日忙。〔閨情205〕 紅露花房白蜜脾。黃蜂紫蝶兩參差。

3 花鬢 「文選四左思蜀都賦（敷藥葳蕤）劉涓子注」 藥者或謂之華。或謂之實。一曰花鬢頭點也。〔六十華嚴經三六〕 一一蓮華。各有不可說不可說妙寶華鬢。一一華鬢。各有寶師子座。〔杜甫陪

李金吾花下飲詩〕 見輕吹鳥毳。隨意數花鬢。

柳眼 「元稹生春二十章之九」 何處生春草。春生柳眼中。〔又寄樂天詩〕 冰銷田地蘆錐短。春入枝條柳眼低。〔白樂天楊柳枝詞八首之七〕 葉含濃露如啼眼。枝裊輕風似舞腰。柳の若葉をいうようだが、元稹の次の詩では柳の花をさすかもしれない。〔遣春三首之二〕 柳眼開渾盡。梅心動已闌。なお朱鶴齡注に引く白詩は、葉含を花合に作る。

無頼 憎くて又はいとしくて、たまらない。〔杜甫奉陪鄭駙馬韋曲二首之一〕 韋曲花無頼。家家惱殺人（趙汭注 起用俗語。豪縱跌宕。杜臆 此詩全是反言以形容其佳勝。曰無頼。正見其有趣）。〔又送路六侍御入朝詩〕 不分桃花紅勝錦。生憎柳絮白於綿。劍南春色還無頼。觸忤愁人到酒邊（九家注 趙云。桃花之深紅。柳色之嫩白。正是春色放蕩。無所藉頼者。翻是觸忤愁人斷送。令到於酒邊。以散其愁）。〔段成式楊柳詞〕 長恨早梅無頼極。先將春色出前林。なお王鏊は、本作品をも例證として、無頼に「無意、無心」の語義を立てるが（語辭例釋一二二頁）、少くともここに

はあてはまらぬのではないか。

4 蝶・蜂はしばしば艶情の表現に用いられる。たとえば〔當句有對390〕 但覺遊蜂饒舞蝶。豈知孤鳳憶離鸞。

紫蝶 「王勃上巳浮江宴序」 丹鸞紫蝶。候芳晷而騰姿。早燕歸鴻。俟迅風而弄影。

黃蜂 「李賀殘絲曲」 垂楊葉老鶯哺兒。殘絲欲斷黃蜂歸。〔又南園十三首之八〕 春水初生乳燕飛。黃蜂小尾撲花歸。足長蜂のたぐいである。〔大觀本草二〇蜂子條〕 圖經曰。蜂。本經有蜂子。黃蜂。：蜂子即蜜蜂子也。：黃蜂子即人家屋上作房。

有情 草木ならばともかく、蝶蜂などの有情をいう例はあまり見かけぬようだが、杜甫にやや近い表現がある。〔白絲行〕 春天衣著爲君舞。蝶飛來黃鸝語。落絮遊絲亦有情。隨風照日宜輕舉。

5・6 「梁武帝冬歌」 一年漏將盡。萬里人未歸。〔白樂天楊柳枝八首之二〕 陶令門前四五樹。亞夫營裏百千條。〔雲谿友議下溫裴黜條〕 楊柳枝詞。作者雖多。鮮覩其妙。……：賸（邁）郎中又云。陶令門前實接籬。亞夫營裏拂朱旗。但不言楊柳二字。最爲妙也（ただし李紳の集にも〔柳二首之一〕の初二句として見える）。

5 義山〔無題57〕 萬里風波一葉舟。憶歸初罷更夷猶（集釋稿）（本學報五三册六六二頁）。

萬里 「文選四一李陵答蘇武書」 相去萬里。人絕路殊。生爲別

世之人。死爲異域之鬼。〔又三〇陸機擬行行重行行詩〕佇立想萬里。沈憂萃我心。

憶歸 〔白樂天小池二首之二〕每一臨此坐。憶歸青溪居。〔雍陶送蜀客詩〕莫怪送君行較遠。自緣身是憶歸人。

憶は思よりも重い。〔釋名釋言語〕憶。意也。恒在意中也。〔高適封丘作〕夢想舊山安在哉。爲銜君命且遲回。乃知梅福徒爲爾。轉憶陶潛歸去來。

元亮井 〔陶淵明歸園田居五首之四〕久去山澤遊。浪莽林野娛。徘徊邱隴間。依依昔人居。井竈有遺處。桑竹殘朽株。〔李白贈崔秋浦三首之一〕吾愛崔秋浦。宛然陶令風。門前五楊柳。井上二梧桐。〔又留別龔處士詩〕柳深陶令宅。竹暗辟疆園。淵明の居處といえは大概柳が連想される。

6 劍南東川節度使たる柳仲郢の幕僚を勤めてきたことをいう。同じような表現が次の詩にも見える。〔梓州罷吟寄同舍365〕不揀花朝與雪朝。五年從事霍嫫媯。

從事 上句の憶歸と對しているから、ひとまず事ニ従ウとよむ。〔詩小雅北山〕偕偕士子。朝夕從事。〔文選九班彪北征賦〕達人從事。有儀則令。が、この語はひろく幕僚の通稱である。〔通典三二職官總論州佐條〕州之佐吏。漢有別駕・治中・主簿・功曹・書佐・簿曹（原注 簿曹從事史。主錢穀簿書）・兵曹（原注 兵曹從事史。有軍事則置之。以主兵馬）・部郡國從事史・典郡書佐等官。〔文選五七潘岳馬汧督誅〕雍州從事。忌敢勳效。極推小疵。

〔杜甫相從歌（原注 贈嚴二別駕）〕梓中豪俊大者誰。本州從事知名久（影宋本杜工部集）。

亞夫營 〔漢書四〇周亞父傳〕文帝後六年。匈奴大入邊。以宗正劉禮爲將軍軍霸上。祝茲侯徐厲爲將軍軍棘門。以河內守亞夫爲將軍軍細柳。以備胡。上自勞軍。至霸上及棘門軍。直馳入。將以下騎出入送迎。已而之細柳軍。軍士吏被甲。銳兵刃。彀弓弩。持滿。至中營。將軍亞夫揖。曰。介冑之士不拜。請以軍禮見。既出軍門。羣臣皆驚。文帝曰。嗟乎。此眞將軍矣。鄉者霸上棘門如兒戲耳。〔杜甫春遠詩〕故鄉歸不得。地入亞夫營（黃鶴注 此是永泰元年春。在浣花溪作）。

義山は大中五年から六年にかけて梓州から成都へ公務出張したとき、劍南西川節度使杜悰の幕府に對して同様にいう。〔五言述德抒情詩54〕芙蓉王儉府。楊柳亞夫營。

7 **新灘** 義山以前の用例未見。類似の語としては白居易の詩題に「新小灘」あり。

莫 ここは助字辨略五に見える「疑辭」として解する。〔朱子語類三四論語述而篇〕文莫吾猶人也。莫是疑辭。猶今人云莫是如此否。詩語解卷下では、莫を豈非・豈無と釋する。

遊人意 〔李白送友人詩〕浮雲遊子意。落日故人情。遊人は（a）遊子におなじ。〔玉臺新詠五柳憚擣衣詩〕行役滯風波。遊人淹不歸。〔杜牧邊上聞胡笳三首之一〕遊人一聽頭堪白。蘇武爭禁十九年。（b）また遊樂の人をいうこともある。〔梁簡文帝遊人詩〕遊戲

長楊花。携手雲臺間。歡樂未窮已。白日下西山。〔韋應物遊龍門香山泉詩〕山水本自佳。遊人已忘慮。

8 風簷

〔杜甫陪章留後侍御宴南樓詩〕野雲低渡水。簷雨細隨風。〔張祐揚州法雲寺雙檜詩〕高臨月殿秋雲影。靜入風簷夜雨聲。

雨夜

〔元稹寺院新竹詩〕風朝竿籟過。雨夜鬼神恐。〔白樂天和裴常侍齋薇架詩〕風朝舞飛燕。雨夜泣蕭娘。〔雍陶和河南白尹西池北新葺水齋招賞詩〕雨夜思巫峽。秋朝想洞庭。

* * *

程夢星をのぞき、諸説大筋において一致する。義山の晩年、蜀中梓州の任地で「憶歸」の心境を歌った、かれとしては比較的平明の作。なお、何焯の指摘どおり拗體であり、1句「二日」の日は本來ならば平聲のはずだ。

1・2 二月二日——各地で踏青の行事のおこなわれる日、春の野外に多くの士女入りみだれて華やかな宴が開かれる。江邊を行けば東風に日ざし暖かく、どこからか笙を吹いている音も聞える。作者もそうした宴に加わりうとしているのであろうか。しかし、浮き立つような雰囲気の中、ひとり心はずまず、あるいは郷愁がひきおこされる。

3・4 江邊の佳景。咲きほこる花々、黄金色にもえる柳の若葉、それぞれに憎くてたまらぬほど魅惑的なのだ。紫の蝶、黄色の蜂ども、みなみないかにも氣のありげなそぶりでおどり狂う。花柳蜂蝶は眼前の景であり、同時に金聖嘆のいうように年少の男女冶

遊の暗喩である。2句の間吹笙ですでに「家室」を念じたとするなら、かれらの無頼有情にことに鋭敏に反應せざるをえないわけだ。

5・6 さて、こうした佳景に直線的に觸發され（屈復）、またはむしろ反撥し（姚培謙）た結果、懷郷の歌がはじまる。遙か萬里のふるさと、五柳先生陶淵明にあやかり、かの舊宅に歸りたいと常に思いつづけつつ、もう三年ものあいだ、周亞夫になぞらうべき名將柳闥下の軍營に御奉公してきたことではあった。義山は柳仲郢に悪感情を抱いたわけではないが、従事の生活に倦んでいる。元亮井は元亮宅としてよむ。麗本は意を以て改めたのかもしれないが、その要はない。

6句だけでなく、5句も「柳」に掛ける。白樂天の楊柳枝詞のばあいのように、同じ柳でも、出句は隱遁・隱者のそれ、對句は武將のそれ、とレヴェルが異なる。この一連は義山のいわば原點還歸の願望の表明。

7・8 全體としてまた部分的にも比較的易讀のこの詩、説の分れるのは7句「莫悟」の莫の字の解釋で、「悟ル莫レ」では意味が通じないからである。(1)廖文炳・金聖嘆・屈復らは莫を二句にかけ、「聲ヲ作ス莫レ」とよみ、(2)馮浩および劉若愚以下の近代注釋は莫をただの否定詞によむが、前者は句作りからして、後者は語義的にみて、みな無理かと考えられ、(3)姚培謙の意を汲んで「疑辭」として解する。またそれが表現として最も陰影に富む。江邊

を行くうちに出會した見慣れぬ早瀬、流れが變化して出來たばかりの早瀬は、旅の空にある行樂の客たる者の心を見すかしたのではなからうか。いじわるくわざと一際高く水音を立て、それはあたかも風吹きつゝの軒端、雨ふりしぶく夜の思い、人を耐えきれなくさせるのだ。「風簷夜雨聲」は單なる「思家蕭條」に止まらず、過去の何らかの記憶に連るのかもしれない。毛本や鼓吹のように「灘」を「春」に作るのは明らかにおかしく、「悟」を「悞」「訝」に作るのも「皆淺也。」(馮浩) また「雨フル夜」は「風バメル簷」と對しているからこれも底本のままでよい。

6句の「三年」が基準となるが、梓州への轉出を大中六年とみる馮浩は同九年に、轉出を大中五年とみる張采田は同七年に、それぞれ本詩を係ける。安徽師大は張におなじ。

(荒井 健)

即日106

即日

一歳林花即日休 一歳の林花 即日休まらん
江間亭下悵淹留 江間亭下 悵として淹留す
重吟細把眞無奈 重吟細把 眞に奈する無し
4 已落猶開未放愁 已に落ち猶開く 未だ愁を放せず

春色正來銜小苑 春色正に來りて 小苑を銜み
春陰只欲傍高樓 春陰只だ高樓に傍わんと欲す
金鞍忽散銀壺滴 金鞍忽ち散じ 銀壺滴る

李義山七律集釋稿(三)

8 更醉誰家白玉鉤 更に誰が家の白玉鉤に醉わん

校

0 唐詩類苑一二二(人部雜興類)

2 間 毛本・朱鶴齡本・全唐詩校注「一作門」 錢本「間・門」

讀解不能なるも眉批に「間」

3 眞 高麗本「終」

7 滴 毛本・金聖嘆本「漏」 朱鶴齡本・全唐詩「漏一作滴」

韻

下平十八尤(休・留・愁) 十九侯(樓・鉤) 同用

*

何焯

〔讀書記〕一歳之花遽休。一日之光遽暮。眞所謂刻意傷春者也。

金鞍忽散。悵悵獨歸。泥醉無從。排悶不得。其強裁此詩。眞有

歌與泣俱者矣。觀江間之文。疑亦在東川時所作(評本「光」を

「景」に作る)。〇五六。言并不使我稍得淹留也。落句。言風光易

過。不醉無以遣懷。然使我更醉誰家乎。無聊之甚也(評本「五

六」を「春色一聯」に、「并」を「並」に、「忽」を「忽」に作る)。

〔評本〕學一片飛花減却春。

徐德泓

此惜春殘而寓行藏之感也。花落人淹。焉得不悵。落者既無可奈何矣。猶開者亦總杼未放之愁耳。二句有去留兩難意。腰聯寫黯然景色。亦有人事蹉跎意。末言景殘時盡。何處更尋樂地。隱然有瞻鳥

爰止之思焉。

姚培謙

此歎恩情之不可恃也。花開花謝。榮悴關頭。頃刻分判。然不待花謝之時也。最難爲是將謝未謝時。淹留光景。蓋就施恩者而言。重吟細把。猶覺舊情無奈。就受恩者而言。已落猶開。尙思百計取憐。當斯時也。山色春陰。巴不得從容留待一日。而無如金鞍之忽散何也。恩情中道絕。豈待到別家簾幙時耶。

屈復

江亭花發。春光已晚。山色春陰。日亦將暮。乃金鞍忽散。銀壺下漏。更醉誰家。以遣此情乎。

紀昀

〔詩說上〕純以情致勝。筆筆唱嘆。意境自深。曲池詩132亦是此調。則近乎靡矣（評本「乎」を「於」に作る）。〔又下〕問即日詩。

更醉誰家白玉鉤。朱注（丁仙芝詩。簾垂白玉鉤）如何。曰。非也。此玉鉤即隔座送鉤之鉤。緣此戲起于鉤弋夫人之白玉鉤。故云爾耳（評本本條なし）。

馮浩

何曰。一歲之花邊休。一日之景遽暮。金鞍忽散。惆悵獨歸。泥醉無從。排悶不得。其強裁詩。歌與泣俱矣。

4 田（蘭芳）曰。謂未全愁。按。如曰未盡愁。錢（良擇）曰。閒冷處偏搜得到。宋人之工全在此。

6 何曰。言并使我不得稍淹留也。

8 見無題11112二首。何曰。風光易過。不醉無以遣愁。然使我更醉誰家乎。無聊之甚也。

張采田

〔會箋〕首言一歲林花即日休。義山在桂。首尾僅及一年。此將去時作。自歎府貶職罷。失路無依也。大有留連不忍遽別之意。江間指桂江。馮編甚誤。

〔辨正〕江間指桂江也。轉韻詩562亦云。謝遊橋下澄江館。義山桂幕只年餘。故曰一歲林花即日休。桂州府罷。在大中二年三月。正春間。故曰春陰。點時令也。結言失路無依之感。亦惟此時有此情況。何氏謂東川時作。疎矣。○此與曲池詩。各有妙處。此首因唱嘆得神。而曲池一篇。亦非靡靡之音也。揚此抑彼。未爲公允。

黃侃

放猶散也。

金聖嘆

言三春花事。是一歲大觀。若此事一休。卽了無餘事。蓋入夏徂秋。如風疾捲。特地開春。便成往事也。江間取長逝義。亭下取暫住義。悵淹留者。長逝無法教停。故不覺其悵然。然暫住且如不逝。故遂漫作淹留也。三四。重吟細把妙。已不必吟。而又重吟。已不足把。而又細把。此無奈。乃所謂真無奈也。已落猶開又妙。親見已落。何止萬片。便報猶開。豈能數朶。此欲放。將如何可放也。前解。寫一春已盡。

後解。寫一日又盡也。山色銜苑。暮光自遠而至也。春陰傍樓。日

影只剩觚稜也。倏忽馬嘶人去。漏動更傳。則不知後會之在何家也。
哀哉哀哉。純是工部詩。

胡以梅（花木類）

因落花而悵恨。留連于江間亭下。把玩重吟。眞出無奈。落者落。開者尙開。愁愈難放。此聯實寫而曲折故佳。五六。言天色已晚。陰雲黯淡。皆爲落花愁緒。銜日將落。而一半在屋也。結承晚來無可遣懷之處。第八。是商酌之辭。散散于江亭。丁仙芝詩。簾垂白玉鉤。今言垂簾而飲。

近代注釋

〔陳永正〕三一頁。

* * *

0 李義山の詩は、題においても稀見難解が多く、即日などという詩題は六朝はむろん唐詩にも類例がないのではないか。ところが義山はこの奇妙な詩題を愛用し、席本ではさらに四例、小苑試春衣283（五律）・地寬樓易迴298（五排）・小鼎煎茶325（七絶）・桂林聞舊説446（五律）。しかも本作品のように詩中の語を借りて題としていたときは、詩人がことさらその語を強調したいのだとまでは理解できるのだけれども、これら四篇の詩が「即日」の題とどうつながるのかは、より一層不可解なのである。

1・2 この詩は何焯（評本）や金聖嘆がすでに指摘するように杜詩、とくに曲江を詠ずる一連の七律の影響があると思われる。「曲江二首之一」一片花飛滅却春。風飄萬點正愁人。「又之二」

李義山七律集釋稿（三）

朝廻日日典春衣。每日江頭盡醉歸。

1 〔劉禹錫和令狐相公春日尋花有懷白侍郎閣老詩〕花徑須深入。時光不少留。：晴宜連夜賞。雨便一年休。

一歲 〔淮南子天文訓〕天有四時。以成一歲。〔元稹生春二十章之十八〕又添新一歲。衰白轉成叢。

林花 〔吳均贈鮑春陵別詩〕海鴻來倏去。林花合復分。〔王績在京思故園見鄉人問詩〕院果誰先熟。林花那後開。〔杜甫曲江對雨詩〕林花著雨燕脂落。水荇牽風翠帶長。

即日 (a)當日。ある事柄のあつたその日。史傳など、時制的には過去敘述の文に用いられる場合。〔漢書二平帝紀〕元壽二年六月。哀帝崩。太皇太后詔曰。大司馬（董）賢年少。不合衆心。其上印綬。罷。賢即日自殺。猛將花敬定の段子璋反亂鎮壓をのべた次の杜詩の例もしかり。〔戲作花卿歌〕綿州副使著柘黃。我卿掃除即日平。

(b)不日。そのうちに。尺牘など、現在時制の文では近い未來をさすことがある。〔褚遂良與法師帖〕奉別倏爾。踰卅載。即日遂良鬚鬢盡白。兼復近歲之間。嬰茲草土燕雀之志。觸緒生悲。且以即日蒙恩驅使。盡生報國。塗路近止。無由束帶。西眺于邑。悲悶更深。通俗編三に「日之相近。或亦以即言之。」として陸游の詩を例に引くが、むしろ同書が「即日猶當日。」の例證に引いた上掲褚遂良の帖こそ未來の用例とさるべきであった。

休 「花休」という義山以前の用例未見。

三〇三

2 〔杜甫曲江對酒詩〕苑外江頭坐不歸。水精春殿轉霏微。

江間 〔世說文學〕其夜清風朗月。聞江渚間估客船上有詠詩聲。

甚有情致。〔謝莊舞馬賦應詔〕國稱梁岱佇蹕。史言壇場望踐。鄙

上之瑞彰。江間之禎闡。榮鏡之運既臻。會昌之曆已辨。〔杜甫石

橫閣詩〕蜀道多早花。江間饒奇石。

亭下 〔漢書五四李廣傳〕嘗夜從一騎出。從人田間飲。還至亭。

霸陵尉醉。呵止廣。：宿廣亭下。〔韋應物對新篁詩〕清晨止亭下。

獨愛此幽篁。

悵 〔文選九曹大家東征賦〕悵容與而久駐兮。忘日夕而將昏。

〔杜甫枯柏渡詩〕孤光隱顧盼。游子悵寂寥。〔韋應物贈丘員外二

首之一〕虎丘悵登眺。吳門悵躊躇。

淹留 〔廣韻二淹字注〕滯也。久留也。〔九辯〕事豐豐而覲進

兮。蹇淹留而躊躇。〔王逸注〕久處無成。率放棄也。〔杜牧寓題

詩〕把酒直須判酌。逢花莫惜暫淹留。

3 重吟 〔李白鳳笙篇〕重吟真曲和清吹。却奏仙歌響綠雲。〔白

居易魏堤有懷詩〕憶得瞿唐事。重吟行路難。

細把 用例未見。ただし把の對象がもし花とすれば、杜詩を連

想してよいか。〔九日藍田崔氏莊〕明年此會知誰健。醉把茱萸子

細看。

無奈 句末に來る例として〔孟郊秋雨聯句〕主人吟有歡。客子

歌無奈。〔陸發荆南始至商洛417〕昔去真無奈。今還豈自知。

4 已落猶開 〔杜甫上白帝城二首之一〕谷鳥鳴還過。林花落又開。

〔杜牧惜春詩〕花開又花落。時節暗中遷。

放愁 用例未見。舊説はおおむね「散愁」〔黃侃〕と解し、未

放愁を憂愁から解き放されがたい、とする。馮浩〔田蘭芳〕は

これに反し「盡愁」と解し、未放愁を憂愁の極には至らぬ、とす

る。未練がましく中途半端の心境とみなす姚培謙の説も恐らく馮

浩と同じ方向か。

5・6 〔即日283〕小苑試春衣。高樓依暮暉。

5 〔梁簡文帝秋夜詩〕綠潭倒雲氣。青山銜月眉。〔李白與夏十二

登岳陽樓詩〕雁引愁心去。山銜好月來。

山色 〔謝朓出藩曲〕眇眇蒼山色。沉沉寒水波。〔張說岳州觀

競渡詩〕低裝山色變。急棹水華浮。〔岑參初至犍爲作〕山色軒檻

內。灘聲枕席間。

小苑 御苑すなわち皇室所有の庭園。小園とは異なる。〔漢書

七八蕭望之傳〕以射策甲科爲郎。署小苑東門候。〔師古曰〕門候。

主候時而開閉也。〔王維丁寓田家有贈詩〔陰盡小苑城〕趙殿成

注〕小苑字。始見漢書蕭望之傳。昔賢不注地在何處。六朝及唐人

詩中多用之。或謂唐人所稱小苑。即宜春苑是。成按。右丞〔奉和

上巳于望春亭觀禊詩〕長樂青門外。宜春小苑東之句。則不得謂宜

春即小苑矣。當是指曲江之芙蓉園也。唐大內有西內苑。有東內苑。

有禁苑。凡三苑。芙蓉園不及三苑之闊遠。故謂之小苑。一時稱謂

如此。宜春宮雖在其地。然不得混指爲一。〔杜甫秋興八首之六〕

花萼夾城通御氣。芙蓉小苑入邊愁〔九家注〕趙云。芙蓉苑接曲

江)。義山詩の小苑の語は、席本で他に四例だが、少くとも一つは明かに曲江の御苑である。〔垂柳131〕娉婷小苑中。婀娜曲池東。

なお所在地が長安以外の場合でも、帝室王室の御苑を指すことは動かぬようである。〔南齊書二一文惠太子傳〕以晉明帝爲太子時立西池。及啓世祖引前例。求東田小苑。…(上) 見其彌亘華遠。

壯麗極目。於是大怒。〔玉臺新詠八庾肩吾送別於建興苑相逢詩〕相逢小苑北。停車問苑中。〔溫庭筠吳苑行〕小苑有門紅扇開。天

絲舞蝶俱裴回。温の詩では吳王闔閭の御苑をいう。

6 〔杜甫曲江對雨詩〕城上春雲覆苑牆。江亭晚色靜年芳。

春陰 〔梁簡文帝侍遊新亭應令詩〕沙文浪中積。春陰江上來。

〔杜甫假山詩〕慈竹春陰覆。香爐曉勢分。

傍樓 義山以前の用例未見。

高樓 杜司勳77注〔七絶集釋稿(一)本學報五一册六〇六頁〕参照。

7 金鞍忽散 〔李白猛虎行〕有策不敢犯龍鱗。竄身南國避胡塵。

寶書玉劍挂高閣。金鞍駿馬散故人。

金鞍 〔後漢書志二九輿服上〕降及戰國。奢僭益熾。削滅禮籍。

蓋惡有害己之語。競修奇麗之服。飾以輿馬。文厨玉纓。象鑣金鞍。

以相夸上。〔玉臺新詠一爲焦仲卿妻作〕躑躅青驄馬。流蘇金鑣鞍。

〔又六張率相逢行〕金鞍瑪瑙勒。聚觀路傍兒。〔杜甫嚴公仲夏枉

駕草堂詩〕竹裏行厨洗玉盤。花邊立馬簇金鞍。

銀壺滴 水時計は銅壺銀箭が正式だったようで、詩語としては

六朝以來「金壺」の方が一般的である。〔杜牧池州造刻漏記〕某

大和三年。佐沈吏部江西府。暇日。公與賓吏環城。見銅壺銀箭。律如古法。曰建中時。嗣曹王臬命處士王易簡爲之。〔文選三〇・

玉臺新詠六鮑照翫月城西門廨中詩〕肴乾酒未缺。金壺啓夕淪。

〔李白烏棲曲〕銀箭金壺漏水多。起看秋月墜江波。東方漸高奈樂

何。〔戴叔倫早春曲〕博山吹雲龍腦香。銅壺滴愁更漏長。銀壺は

初唐に一例、〔崔液夜遊詩〕玉漏銀壺且莫催。錢關金鎖徹明開。

誰家見月能閑坐。何處聞燈不看來〔初學記四〕。

8 〔杜甫曲江對雨詩〕何時詔此金錢會。暫醉佳人錦瑟傍。

誰家 〔文選二七曹植白馬篇〕借問誰家子。幽并遊俠兒。〔玉

臺新詠一日出東南隅行〕使君遣吏往。問此誰家姝。〔于鵠荆南陪

楚尙書惜落花詩〕黃昏人散東風起。吹落誰家明月中。〔白居易潯

陽春詩〕誰家綠酒歡連夜。何處紅樓睡失明。

白玉鈎 舊注はすべて三説。(1)簾鈎説。〔朱鶴齡注〕丁仙芝(長

寧公主舊山池)詩。(座卷流黃簾)簾垂白玉鈎。〔又補注〕十六國

春秋。石虎建瓊瑤樓。純用金銀裝飾。懸五色珠簾。白玉鈎帶。胡

以梅・姚培謙はもちろんだが、他にもこの説に従う注釋者がある

ように見える。元稹の詩にも、〔酬樂天八月十五夜見寄〕金鳳臺

前波漾漾。玉鈎簾下影沉沉。(2)藏鈎説。紀昀および馮浩。藏鈎

は既出。無題III注〔七律集釋稿(一)本學報五三册六一四頁〕参照。

(3)酒鈎説。〔送崔珏往西川39(好好題詩詠玉鈎)程夢星注〕漢武

故事。鈎弋夫人手攀。帝披其手。得一玉鈎。手得展。故因以爲藏

鈎之戲。後人效之。別有酒鈎。當飲者以鈎引盃。詠玉鈎。即酒鈎

也。：集中即日詩。又有更醉誰家白玉鉤之句可證。又章孝標上蜀中王尚書詩云。丁香風裏飛殘草。叩竹烟中動酒鉤。尤爲蜀中事實。(4)以上のほか、「玉鉤」といえば普通は月を指すので、ここもやはり月ではないかと考えられる。「送崔珙往西川」39（好好題詩詠玉鉤）朱鶴齡補注。陳帆曰。鮑照詩。始見西南樓。織織如玉鉤（李善注。西京雜記。公孫乘月賦曰。值圓巖而似鉤。蔽脩堞如分鏡）末映東北墀。娟娟似蛾眉。蛾眉蔽珠櫳。玉鉤隔瑣窓。「虞羲秋月詩」初生似玉鉤。裁滿如團扇。「白居易三月三月詩」指點樓南玩新月。玉鉤素手兩織織。

* * *

本詩製作の時期は、2句「江閩」の江をどの地を流れる江とするかによって説が分れ、馮浩（『何焯』）が梓州・大中八年、張采田が桂州・大中二年、安徽師大本年表および陳永正は張采田に同調する。しかし、いずれにも決定的な根拠なしとせざるをえず、既に記したとおり杜詩をふまえているとみるならば、むしろ曲江の「小苑」においての作という可能性が強いのではないか。もしそうなると、本詩の編年はさらに難しくなる。

1 陳永正の様に即日を此日、是日とすれば——今日は春三月の最後の日、花（見の時節）も今日の中にあわただしく終ってしまう。だが、即日の語にこうした用例はなく、しかもこの詩の時制は明確に、現在形だから語注(b)不日と解するのが自然である。金聖

嘆が奇妙に持って廻った説明を加えたのも、即日の扱いにこまっているせいではなからうか。張采田は、あるいは即日を近未來と理解したのかも知れない。そこで——一年かかってやっと開いた今年の春の森の美しい無数の花々も、いくらもたたぬまにもうおしまいになるのだ。劉禹錫の詩が表現としてやや近い。

2 江のみぎわ亭のほとりにたたずんで、悲しみに沈み、いつまでもいつまでもじっと留まる。もとより花を惜しむのあまりに。杜詩でいうならば、「苑外ノ江頭ニ坐シテ歸ラズ」のころである。

3 陳永正は、散りぎわの花をなお重ねて詩に詠じ、そして手に把ってはみるが……と解しており、それがこれまでの通説かと思われ、花を把ってじいっと見つめる、という杜詩の線に乗る。しかし李白や白樂天の例からすれば、「重吟」は既製の詩を今一度吟ずることだが、それが何なのか特定はできない。花の詩か、酒の詩か。たとえば對酒當歌などであれば、把は把酒、把觴。「細把」で酒杯をそうっととりあげてはみるもの、となるか。4句ではっきり花が対象になるので、ここではまだ花が出ない方がよいかもしれない。

4 已落猶開は、地上に落ちてもまだその姿を保つ花のさま、ととれぬことはないが、ここは通説どおり、「萬片どころではない」（金聖嘆）すでに散り落ちた花、なお僅かに咲きのこる「數架にもみたぬ」（同上）花、と解する。花の落ち花の開く現象に鋭敏に反應し異常に執着する義山の表現として、他に〔臨發崇讓宅紫

薇²⁵」不先搖落應爲有。已欲別離休更開。未放愁はよく分らないが、「如何可放」（金聖嘆）、「難放」（胡以梅）と、原文にないところを補わねばうまく通らない放愁²⁶散愁²⁷に比べて、馮浩などの放愁²⁸盡愁²⁹の方がまだしもであろう。眞にいかんともするなしないのに、それでも憂愁の極、絶望するまでには至らない。

5 最後の一聯との關係からしても、舊注にいうように5・6句は暮景とみるのが順當なだろう。日が西に傾き、山の影がちやうどまともにかぶさって来る「小苑」の上。ただ、山色を山の姿そのものと解すれば——春深まり緑の濃い山の色、それが「小苑」にひたひたと迫って来る。季節感が主になり一日の時間の方は後方に退く。陳永正は兩見解の折衷。

「小苑」は「小園」が普通名詞なのとちがって固有名詞だが、特にこの小苑は趙殿成のいう「曲江之芙蓉園」だとみたい。曲江のそばに山があったのか。地理的にはどうかしららないが、晩唐の詩には一二、山がある。「劉滄及第後宴曲江」露景露光明遠岸。晚空山翠墜芳洲。「李洞曲江漁父」兒孫閑弄雪霜髯。浪颭南山影入檐。

6 春陰は春の「陰雲」（胡以梅）、春がすみ・花曇（唐代長安では保證できないが）のたぐいでもあるうか。その春陰が曲江に立ちならぶ高樓にただひたすらによりそいたげに覆いかぶさる。杜甫の曲江對雨の詩と正に同様の景である。

7・8 江のほとりでの宴のあと。銀の漏壺の絶えまない滴りとと

もに時は早くも移り、馬にきらめく黄金の鞍置く客たちは忽ち散ってしまった。さてこれから一體どの館を訪れ、白玉の鉤にも見紛わんばかりの明月のもと、なかなかに拂いきれない惜春の哀しみをまぎらわすために、さらに酔いを深めたらよいのか。白玉鉤は朱鶴齡の簾鉤説が有力だが、すだれの影のだけか——女性でも連想せぬかぎり、「垂簾而飲」（胡以梅）というだけでは物足りない。「更醉」の目的物としてはやはり明月の方がよいのではないか。陳永正は結の二句を歌い手自身の思い入れとせず、貴公子たちの行爲の客観描寫とするが、全體とそぐわない。正文に異同が多少あるが、いずれも底本たる席本のままでよむ。この詩にも義山の身世の慨嘆を見ようとする（姚培謙・張采田）のは果して可能だろうか。

（西村富美子）

富平少侯²¹¹

富平少侯

七國三邊未到憂

七國三邊 未だ憂いに到らず

十三身襲富平侯

十三にして身は襲う 富平侯

不收金彈拋林外

金彈の林外に抛つを收めず

4却惜銀牀在井頭

却って銀牀の井頭に在るを惜しむ

綵樹轉燈珠錯落

綵樹 轉燈 珠錯落たり

繡檀廻枕玉雕鏤

繡檀 廻枕 玉雕鏤たり

當關不報侵晨客

當關は報せず 晨を侵す客を

8 新得佳人是莫愁 新に佳人を得たり 是れ莫愁

校

0 才調集六・瀛奎律髓四六(俠少類)・唐詩鼓吹七・唐詩品彙八

八

唐詩類苑六七(文部史類)

富平少侯 才調集「富平侯」

5 綵 律髓「綠」 高麗本校注「綵樹一作綠樹」

6 檀 才調集「檀」

鍍 毛本「搜」

7 不 高麗本・鼓吹・品彙「莫」 稿本旁注「莫」 馮浩本校注

「一作莫。非」

報 高麗本「道」

8 是 他本みな「字」 馮浩本校注「一作是」

韻

下平十八尤(憂・鍍・愁) 十九侯(侯・頭) 同用

*

胡震亨(咏古類)

吳喬

言襲封。疑是爲綯。

何焯

〔讀書記〕此詩刺敬宗。漢成帝自稱富平侯家人。三四。言多非望之濫恩。反斬不費之近澤。己蒼(馮舒)云。猶諺所謂當着不着

(評本)此刺敬宗詩。成帝自稱富平侯家人。落句。與少年篇89意同。而較蘊藉。○己蒼先生云。三四。猶諺所云當者弗著。第三。比無當橫賜。第四。則膏澤不下也。

7 不。一作莫。按作莫字。方是少侯之意。作不字。只是闖人拒客耳(評本)不。一作莫。莫字方是少侯傲長者。不字只闖人放肆耳)。

〔評本〕全首只形驕貴晏安。少字已見。

1 首句。只言無兵事。偏極隱曲。

5・6 二句皆敘宿處。

5 轉燈。猶背燈也。

8 借莫愁字。與未到憂相應言外。則所謂無愁有愁也。

陸鳴皋

通首總形容豪貴氣象。首句。是少年遊俠之心。次句。言己貴也。大抵少年豪貴。其情性輕財寶而愛溫柔。故拋棄金彈。而却惜井牀之寒冷也。五六句。極形華侈。結言貪歡晏起。極風流意。而却寫得雅渾。俗手爲之。便不可醫矣。

姚培謙

此寫貴寵之弊癡。爲荒耽者諷也。世間無享富貴而一無所憂之人。雖身爲天子。而七國三邊之慮。不可不存。世之一無所憂。如富平少侯。則有之矣。第三句。應愛惜者不知愛惜也。第四句。不必眷注者。偏勞眷注也。五六言其窮奢極侈。結句。言聲色以外。一切戶外。可以不問也。否則所處愈高。所憂者當愈大。七國三邊之患。

已到而始憂之。豈有及乎。此詩應作於武宗時。色荒禽荒之隱慮。不敢明言。而託詠於富平少侯。開口七字。足當痛哭一書。七國。喻藩鎮多逆命。三邊。喻回紇吐蕃爲西北患。語不虛下。

屈復

天下事未到其人之憂者。以其自幼封侯也。三。當惜不惜。四。不當惜而惜也。五六。奢華。七。不交賢士。八。漁色也。不下論斷。具文見意。儼然一無知責介。縱橫紙上。

紀昀

〔詩說下〕何以不取富平少侯也。曰。太尖無品。格亦卑卑（評本太尖薄）。

馮浩

田（蘭芳）曰。只形容驕貴宴安。少字已出。徐（逢源）曰。此爲敬宗作。帝好奢好獵。宴遊無度。賜與不節。尤愛纂組雕鏤之物。視朝每晏。即位之年。三月戊辰。羣臣入閣。日高猶未坐。有不立而踏者。事皆見紀傳。漢書。成帝始爲微行。從私奴出入郊野。每自稱富平侯家人。而敬宗即位。年方十六。故以富平少侯爲比。不敢顯言耳。○浩曰。徐說是矣。此異於少將108公子83157諸篇也。通鑑。帝宣索左藏金銀。悉貯內藏。以便賜與。第四句指此。蘇鶚杜陽雜編。寶曆二年。浙東貢舞女二人。曰飛鸞輕鳳。帝琢玉芙蓉爲歌舞臺。每歌舞一曲。如鸞鳳之音。百鳥莫不翔集。歌罷。令內人藏之金屋寶帳。宮中語曰。寶帳香重重。一雙紅芙蓉。結句指此。徐氏引郭妃則誤矣。○又曰。統觀李唐全代。中葉以後。河朔既不

可復。諸藩鎮屢有擅命。吐蕃迴鶻党項。先後頻入寇。蓋內外皆不寧矣。而敬宗童昏失德。朝野危疑。故連章（日高453陳後宮41843覽古387）諷刺。以志隱憂。此章首七字。最宜重看。

1

田（蘭芳）云。只言無兵事。偏說得隱曲。○按。七國喻藩鎮。三邊謂外寇。言年少未遽知憂也。

張采田

〔會箋〕此當與集中少將公子等篇參看。徐氏謂指敬宗。引漢書成帝微行。自稱富平侯家人事解之。然細玩詩意。但詠勳閥。非指帝王家也。徐說太鑿。

〔辨正〕通篇以冷語諷刺。律詩變格。何得目爲尖薄哉。

黃侃

此詩刺武宗。題曰富平少侯。詭辭也。首句櫟括漢成帝報許后書意。而注家皆不憚。武宗好游獵。又寵王才人。故以成帝比之。回枕猶繞枕也。當關謂閹人。見嵇叔夜與山巨源絕交書。

方回

〔律髓刊誤紀批〕此義山集中之下乘。（方回の批はなし）

郝天挺

1 此言若邊陲有警。富平少侯何憂哉。

廖文炳

此詩專言富平少侯富貴氣象。首言七國之反。三邊之擾。富平侯徒享富貴。何心於憂國耶。十三歲襲爲富平侯。而年最少。樂不知節。亦如韓嫣之棄金彈。好飾銀床。皆恃其富也。至於綵樹之燈。檀香

之枕。益見其富貴。末聯。言其貯蓄女娥。當門之人。不必呼門驚寢。彼蓋新得美人。如莫愁之美也。要之樂而不節。則樂極生悲而已。奚足取哉。

6 枕以檀香爲之。飾以玉。故云玉雕鏤。

王清臣・陸貽典

此言富平侯少年襲封。樂不知節。如韓嫣之棄金彈。淮南之飾銀牀。以至珠燈之錯落。玉枕之雕鏤。皆倚其富貴也。末言新得佳人如莫愁之美。而當關不敢報客。是又極形淫樂以諷之耳。

胡以梅（貴倖類）

起句。言侯之興豪。別無所憂。惟事遨遊。以不當憂而憂之。有一種少年紈袴態致在言外。第二。雖直寫其侯號。而亦兼用張放之國戚耳。三四。言既不收金彈。却肯惜銀床乎。四是反語。五六。舉室中珍玩。珠燈之富麗。玉枕之精巧。枕下即承新寵。血脉相通。以言少侯之無愁有餘味。妙在雙借莫愁以結之。收拾通篇。此是高手作法異人處。七國。漢景帝時山東七國。若用戰國。則秦在長安。非是。：床者。或檻欄。或作汲水之轆轤架。然樂府雙桐生空井行曰。銀床繫轆轤。是架也。：轉。旋轉。錯落。歷亂。雕搜。玲瓏也。迴亦有圓轉意。蓋似檀香鑲玉枕。而以繡爲衣者歟。句法之變。以借（當作錯）落雕搜虛字爲重。則不板實。故妙。：莫愁。美人名。：今取其名爲不愁耳。

近代注釋

〔森槐南〕上卷八六頁。〔劉若愚〕一八二頁。〔安徽師大〕一七八

頁。〔陳永正〕五二頁。

* *

0 2句の富平侯を借りて詩題とし、それがほぼ事實上の主題ともなる。後出の茂陵・宋玉が似たかたちである。ただし底本はじめほとんどすべてのテキストでは「少」の字が付け加えられているが、才調集本のようにそうでなければ、より純粹の借題に近く。

少侯 用例未見だが、小侯と同義であろう。〔顏氏家訓書證〕

漢明帝紀。爲四姓小侯立學。按桓帝加元服。又賜四姓及梁鄧小侯帛。是知皆外戚也。明帝時。外戚有樊氏郭氏陰氏馬氏爲四姓。謂之小侯者。或以年小獲封。故須立學耳。

1 七國 〔朱鶴齡注〕七國謂漢景時七國。〔文選五二曹冏六代論〕

高祖封建。地過古制。大者跨州兼域。小者連城數十。上下無別。

權倖京室。故有吳楚七國之患。：至於孝景。猥用錯之計。削黜諸侯。親者怨恨。疏者震恐。吳楚唱謀。五國從風。兆發高祖。釁成

文景。由寬之過制。急之不漸故也。〔史記一一孝景本紀〕三年：

吳王濞。楚王戊。趙王遂。膠西王卬。濟南王辟光。菑川王賢。膠

東王雄渠反。發兵西鄉。〔太史公贊〕晁錯刻削諸侯。遂使七國俱

起。合從而西鄉。〔又一〇一晁錯傳〕（錯父）死十餘日。吳楚七國

果反。以誅錯爲名。〔杜甫入衡州詩〕劇孟七國長。馬卿四賦良。

三邊 七國が内憂であるのに對し、外患を指す。〔孔紹安結客

少年場行〕若使三邊定。當封萬戶侯。〔a〕〔史記二五律書〕秦二世

宿軍無用之地。連兵於邊陲。力非弱也。結怨匈奴。結禍於越。高祖有天下。三邊外畔。大國之王。雖稱蕃輔。臣節未盡。歷至孝文即位。將軍陳武等議曰。南越朝鮮。自全秦時。內屬爲臣子。後且擁兵阻隄。選孺觀望。宜及士民樂用。征討逆黨。以一封疆。(b)〔朱鶴齡補注〕小學紺珠。三邊。幽并涼三州也。後漢書。鮮卑寇三邊。〔後漢書八靈帝紀〕(熹平)六年。鮮卑寇三邊(注。謂東西與北邊)。〔又鮮卑列傳八〇〕靈帝立。幽并涼三州緣邊諸郡。無歲不被鮮卑寇抄。〔熹平〕五年。鮮卑寇幽州。六年夏。鮮卑寇三邊。秋。夏育上言。鮮卑寇邊。自春以來。三十餘發。

(a) (b) 兩説どちらをとるべきか、などというのは三江五湖の名をきちんと定めようとするのと同様おろかなことである。任二北『敦煌曲初探』にいう。「吳世昌『敦煌卷季布罵陣詞文考釋』内、釋『四人(猶四民)樂業三邊靜』句、引李商隱『富平少侯』詩『七國三邊未到憂』、謂唐人習語。唐詩有太宗之『執契靜三邊』、李嶠(刀詩)之『特擬定三邊』、崔湜(折楊柳詩)之『三邊戍不還』、顧况(從軍行)之『仗劍出門去、三邊正艱厄』、王昌齡(代扶風主人答詩)之『三邊悉如此、否泰亦須觀』、皎然(從軍行)之『三邊羽檄分』、誠屬唐人習語。」(四二三頁)

未到憂 ここは讀みにくい。およそ四説がある。(1)胡以梅および姚培謙の「未ダ到ラザルニ憂ウ」とよむ説。胡は貴公子がありもしない反亂の影にさえおびえると解し、姚は天子たるものならば當然の義務と解する。森槐南は姚のよみ方を否定する。(2)屈復

のよみでは「未ダ其ノ人ノ憂ニ到ラズ」となる。(3)馮浩さらに張相(語辭匯釋四)の「到」を「知」に置きかえる説。森・安徽師大・陳永正が同調。(4)黄侃の、内外ともに安定しているから「憂ウルニ足ラズ」とよむ説。〔漢書九七下許皇后傳〕(成帝)於是采劉向谷永之言以報曰。諸侯拘迫漢制。牧相執持之也。又安獲齊趙七國之難。匈奴夷狄。非有冒頓郅支之倫也。方外内郷。百蠻賓服。殊俗慕義。八州懷德。雖使其懷挾邪意。猶不足憂。又況其無乎。

2 漢の昭帝のとき富平侯となった張安世の子孫で、成帝の寵臣だった張放を指すとされる。〔漢書五九張湯傳〕(張)臨向敬武公主(顔師古注 元帝妹也)。薨。子放嗣。鴻嘉中。上欲遵武帝故事。與近臣游宴。放以公主子開敏得幸。放取皇后弟平恩侯許嘉女。上爲放供張。賜甲第。充以乘輿服飾。號爲天子取婦。皇后嫁女。大官私官並供其第。兩宮使者冠蓋不絕。賞賜以千萬數。放爲侍中中郎將。監平樂屯兵。置莫府。儀比將軍。與上臥起。寵愛殊絕。丞相(薛)宣御史大夫(翟)方進奏。放驕蹇縱恣。奢淫不制。驕逸悖理。與背畔無異。臣子之惡。莫大於是。不宜宿衛在位。成帝崩。放思慕哭泣而死。〔贊曰〕漢興以來。侯者百數。保國持寵。未有若富平者也。

何焯その他のように時の皇帝を暗示するとみる立場をとれば、さらに〔漢書二七中之上五行志〕成帝時童謠曰。燕燕尾涎涎。張公子。時相見。木門倉琅根。燕飛來。啄皇孫。皇孫死。燕啄矢。

其後帝爲微行出遊。常與富平侯張放俱。稱富平侯家人。過陽阿主作樂。見舞者趙飛燕而幸之。故曰燕燕尾涎涎。美好貌也。張公子謂富平侯也。同じく漢書九七下趙后傳および玉臺新詠九にもこの歌謠の記載あり。

十三〔馮浩注〕放之嗣爵。漢書不書其年。此云十三何據。家語〔冠頌篇〕周成王年十有三而嗣立。疑其影用之。

身襲〔文選四四陳琳爲袁紹檄豫州〕〔曹操〕身處三公之位。而行桀虜之態。汙國虐民。毒施人鬼。〔又四五東方朔答客難〕〔蘇秦張儀〕身處尊位。珍寶充內。外有倉廩。〔又四六任昉王文憲集序〕年六歲。襲封豫寧侯。

富平〔漢書二八上地理志〕平原郡〔原注〕高帝置。莽曰河平。屬青州。縣十九。富平〔原注〕侯國。莽曰樂安亭。

3 漢の武帝の寵臣韓嫣の故事。〔漢書九三佞幸韓嫣傳〕善騎射。聰慧。常與上共臥起。江都王入朝。從上獵上林中。天子車駕趨道未行。先使嫣乘副車。從數十百騎馳視獸。江都王望見。以爲天子。辟從者。伏謁道旁。嫣驅不見。既過。江都王怒〔史記の佞幸列傳も同文〕。〔西京雜記四〕韓嫣好彈。常以金爲丸。所失者日有十餘。長安爲之語曰。苦饑寒。逐彈丸。京師兒童。每聞嫣出彈。輒隨之。望丸之所落輒拾焉。

金彈〔駱賓王疇昔篇〕且知無玉饌。誰肯逐金丸。金丸玉饌盛繁華。自言輕侮季倫家。〔王建宮詞〕鴛鴦瓦上瞥然聲。晝寢官娥夢裏驚。元是我王金彈子。海棠花下打流鶯。〔柳中庸春思贈人〕

落雁驚金彈。拋杯瀉玉缸。

林外〔詩魯頌駟〕駟駟牡馬。在坰之野〔傳〕坰。遠野也。邑外曰郊。郊外曰野。野外曰林。林外曰坰。爾雅釋地篇も毛傳とほぼおなじ。〔王延齡秋宵讀書賦〕哀鴻磬磬兮空際遠。墜葉紛紛兮林外輕。

銀牀〔晉拂舞歌詩淮南王篇〕淮南王。自言尊。百尺高樓與天連。後園鑿井銀作牀。金瓶素綆汲寒漿〔宋書二二樂志〕。(1)より古い説では井桁。〔郝天挺注〕銀牀。井欄也。〔能改齋漫錄六銀牀條〕杜子美調玄元廟詩。風箏吹玉柱。露井凍銀牀。潘子真詩話。

以杜用晉史樂志淮南王篇。潘引此未盡也。按山海經〔海內西經〕曰。海內崑崙墟。在西北。帝之下都。高萬仞。面有九井。以玉爲榼。郭璞注曰。榼。闌也。故梁簡文雙桐生空井詩云。銀牀繫轆轤。庚肩吾九日詩云。銀牀落井桐。蘇味道井詩。澄澈瀉銀牀。

陸龜蒙井上桐詩。獨立傍銀牀。碧梧風嫋嫋。蓋銀牀者。以銀作闌。猶山海經所謂以玉爲榼耳。〔李賀後園鑿井歌〕井上轆轤牀上轉。示聲繁。絃聲淺〔王琦注〕廣韻。轆轤。圓轉木也。今井上圓木轉繩懸汲器。以取水者是。牀。井欄也。絃。即汲水之繩。(2)より新しい説では井戸の轆轤かけ。〔周祈名義考一二金井銀牀條〕銀牀亦非井欄。蓋轆轤架也。日銀者。對金而言。或其色白也。朱鶴齡〔姚培謙・程夢星も〕は漫録および名義考兩説を並舉、いずれともいわない。胡以梅・徐陸合解・屈復・馮浩は新説。蘇味道の井詩は第二句で、起句は玲瓏映玉榼〔初學記七〕。簡文帝や李

賀の用例などからしても、ろくろかけと考える方が理にかなうようではある。近代諸注もおおむね新説。

井頭 用例未見。

5・6 貴人の寢所における奢侈逸樂の調度の描寫にちがいないが、それらの實體はいまひとつさだかでない。

5 「燈輪」ないしは「百枝燈樹」に形狀の類似した燈燭か。〔朝

野僉載〕唐睿宗先天二年正月十四十五十六夜。于京師安福門外。

作燈輪高二十丈。被以錦綺。飾以金銀。燃五萬盞燈。俱豎之如花

樹〔廣記二二六唐睿宗條〕。〔張說十五日夜御前口號踏歌詞二首之

二〕西域燈輪千影合。東華金闕萬重開。〔鼓吹郝天挺注〕開元遣

事。楊國忠姊妹。上元夜。置百枝燈樹。輪轉無休。ただし顧氏文

房小説本ではやや字句が異なる。〔開元天寶遺事下百枝燈樹條〕

韓國夫人置百枝燈樹。高八十尺。豎之高山。上元夜點之。百里皆

見。光明奪月色也。それとも「走馬燈」のようなものか。

綵樹 〔王冷然蘇合山賦〕縱天台揭起而陵霞。太華削成而侵

漢。雖萬仞之奇特。非四座之榮觀。豈若茲山俎豆之間。裝綵樹而

形綺。雜紅花而色斑。

轉燈 用例未見。迴燈ならば、〔玉臺新詠一〇戴嵩詠欲眠詩〕

拂枕熏紅氍。迴燈復解衣。〔白居易酬微之開拆新樓初畢相報末聯

見戲之作〕報我樓成秋望月。把君詩讀夜迴燈。

錯落 〔文選一班固西都賦〕昭陽特盛。隆乎孝成。屋不呈材。

牆不露形。裏以藻繡。絡以綸連。隨侯明月。錯落其間。金釘銜壁。

是爲列錢。翡翠火齊。流耀含英〔李善注 漢書曰。孝成趙皇后弟

絕幸。爲昭儀。居昭陽舍。其壁帶往往爲黃金釘。函藍田璧。明珠

翠羽飾之〕。〔衛恒四體書勢・隸書〕修短相副。異體同勢。奮筆輕

舉。離而不絕。織波濃點。錯落其間〔晉書三六衛瓘傳〕。〔江淹丹

砂可學賦〕既而暖碧臺之錯落。耀金宮之瓏玲。幻蓮花於繡闥。化

蒲葡於錦屏。〔李白答王十二寒夜獨酌有懷詩〕孤月滄浪河漢清。

北斗錯落長庚明。

6 5句と同様に特殊な枕なのかもしれない。〔別國洞冥記四〕東

方朔曰。臣小時。掘井陷落地下數十年。其國人皆織珠爲業。邀

臣入雲端之幕。設玄珉雕枕。刻黑玉銅。鏤爲日月雲雷之狀。亦曰

縷雲枕。〔廣德神異錄〕有海外國貢重明枕。長一尺二寸。高六寸。

潔白類於水精。中有樓臺之形。四面有十道士。持香執簡。循環無

已。謂之行道真人。其鏤木丹青。眞人之首簪帔。無不悉具。仍通

瑩焉〔廣記四〇四重明枕條〕。重明枕のことは元和八年大軫國の

貢物として杜陽雜編中にも見える。

繡檀 錦繡をカパーにした〔胡以梅・森〕のではなく、美しい彫

りのある檀木（の枕）。〔文選三一鮑照代君子有所思行〕繡臺結飛

霞。璇題納行月〔李善注 西京賦曰。雕楹玉鳥。繡栢雲楣〕。〔又

二張衡西京賦〕雕楹玉礪。繡栢雲楣〔薛綜注 栢。斗也。楣。梁

也。皆雲氣畫如繡也。善曰。王褒甘泉頌曰。采雲氣以爲楣。〔新

論適才〕繡戶洞房。則簞不如裘。被雪沐雨。則裘不及簞。〔王琚

美女篇〕桂樓閣蘭堂。繡戶雕軒文杏梁。〔洛陽伽藍記一永寧

寺條〕殫土木之功。窮造形之巧。…繡柱金鋪。駭人心目。〔權德輿相思曲〕鵲語臨妝鏡。花飛落繡牀。

〔徐陵中婦織流黃詩〕帶衫行障口。覓劍枕檀邊。

繡檀 〔釋名釋衣服〕檀衣。檀。坦也。坦然正白。無文采也。

〔說文八上〕褻。丹穀衣也。从衣聿聲〔段注〕穀。細絹也。唐風。

蹙兮蹙兮。其之展也。毛詩傳。禮有展衣者。以丹穀爲衣。馬融從

之。許說同。先後鄭注周禮。及劉氏釋名。皆云。展衣白。後鄭云。

展衣以禮見王及賓客之服。字當作檀。檀之言亶。亶。誠也。按詩

周禮作展。段借字也。玉藻襟記作檀。後鄭從之。許作褻。漢禮家

文字不同如此。從才調集本の檀に作るの誤りであろう。

迴枕 〔一〕枕の形狀とすれば、〔鼓吹郝天挺注〕枕有轆轤形。

故云迴枕也。郝注の意はおそらく「圓枕」すなわち坊主枕のたぐ

いか。〔b〕さらに何らか特殊な構造を持つものか。〔二〕枕に對しての

行爲とすれば、〔a〕「轉枕」すなわち枕をころがして向きを變える

ことか。〔白居易曉寢詩〕轉枕重安寢。回頭一欠伸。〔又匪覺詩〕

轉枕頻伸書帳下。披裘箕踞火爐前。〔b〕まくらべをめぐる。〔司空

圖華下二首之一〕五更惆悵迴孤枕。猶自殘燈照落花。黃侃の「遶

枕」とはこの意味であろうか。

雕鏤 〔文選六左思魏都賦〕木無彫鏤。土無綈錦〔劉涓子注

晏子春秋曰。明堂之制。下之濕潤。不能及也。上之寒暑。不能入

也。土事不文。木事不鏤。示民知節也。…爾雅曰。鏤。鏤也。

〔爾雅釋器〕鏤。鏤也〔郭注〕刻鏤物爲鏤。

7 類例が義山にいまひとつ〔留贈畏之三首之一146〕清時無事奏明光。不遣當關報早霜。

當關 〔文選四三嵇康與山巨源絕交書〕臥喜晚起。而當關呼之

不置。一不堪也〔李善注〕東觀漢記曰。汝郁再徵。載病詣公車。

尙書勅郁自力受拜。郁乘華白衣詣止車門。臺遣兩當關扶郁。入拜

郎中〔文選集注八八〕鈔曰。東觀漢記云。當關。卒名也。古者。

臣欲朝時。當關卒呼之。今言呼我不肯置也。音決。嘉憲當作許意反。

下同。張銑曰。漢置當關之職。欲曉即至門呼人使起。言康曉起爲

吏呼之不放也。置。放也。陸善經曰。當關。主關閑者。諸門平

〔卒？〕置。上へ止る也。呼之不止也。〔劉禹錫酬令狐相公

寄賀遷拜之什〕迴迴二紀重爲郎。洛下遙分列宿光。不見當關呼早

起。曾無侍史與焚香。

侵晨 〔元稹古決絕詞〕虹橋薄夜成。龍駕侵晨列。

8 佳人 〔漢書九七上外戚李夫人傳〕〔李延年〕歌曰。北方有佳

人。絕世而獨立。一顧傾人城。再顧傾人國。寧不知傾城與傾國。

佳人難再得。玉臺新詠一にも「李延年歌詩」として載せる。

莫愁 玉臺新詠九冒頭の「歌辭」に「河中之水向東流。洛陽女

兒名莫愁」と歌われる盧家の莫愁。石城の莫愁とは異なる。前者

が貴女なのに對し後者は港町の女といったところ。集釋稿〔無題

〔重幃深下〕367注〔本學報五三册六五七頁〕參照。

唐詩鼓吹の注釋者が漢の富平侯張放のことをとりあげた味古の

作としているほかは、諸説ほぼ一致して當代の諷刺をよみこむ。

諷刺の對象は、

A₁ 貴公子 屈復・張采田・安徽師大・陳永正

A₂ 令狐綯 吳喬

B₁ 敬宗 何焯・馮浩・森槐南・劉若愚

B₂ 武宗 姚培謙・黃侃

張および安徽師大は不編年だが、馮浩は寶曆元年（八二五）義山十三歳に係ける。しかし何焯||馮浩の敬宗説の危うさは以下の二點によつて明らかである。(1)正面から對立する武宗説の存在。も

とより武宗説自體も敬宗説と相討ちで、雙方とも主觀性が強い。

(2)十七歳以前の義山は師の堂叔の蕭陶を受けて古文古詩主義者であつたはずで（補編一一「請盧尚書撰故處士姑藏李某誌文狀」文集七「樊南甲集序」參照）、少年期にこのような華麗で技巧的な律詩を書いていたとは到底考えられない。ともかく對象の特定はきわめて困難であり、A₁説がまだしも妥當のようだけれども、さらにいえば諷刺よりも貴公子の生活の豪奢の嘆賞に描寫の力點があるように見え、「豪貴ノ氣象ヲ形容シ」「寫シ得テ雅渾」という陸鳴泉（および胡以梅）のよみ方がむしろ當っているのではないか。

1・2 内には七つの叛國を抱え、外には三方から夷狄の侵攻、わが王朝の顛覆せんばかりの危機も御當人の眼中にはとんと入らぬまま、おん年わづか十三の身で、由緒ある富平侯の爵位を襲名さ

れたのである。

未到憂は、比較的無難と思われる屈復の解釋に従う。馮浩は2

句の十三の典據を周の成王に求めるが、三が數字のなかで唯一の平字だから、韻律の關係で用いただけのことであろう。

3・4 さてこの富平侯國の若殿は獵がお好きで、まぢの郊外さらにはるかな森のかなたまで毎日のように出かけては、黃金づくりの彈丸を石弓で打ち散らしたまま回収しようともせぬ。ところが、お館の井戸端にある釣瓶の轆轤うけが白銀しろがねなのをふと目にする、むだなことけしからぬと惜しがるのである。

4 句、胡以梅は「反語」。却ッテ惜シマンヤ、とよむ。だが、別あつたえの金彈は惜しまず、先祖代々の館の造作は勿體ながら、というちぐはぐの方がもっとおもしろい。張相（語辭匯釋一）はこの個所を例證として却に「豈也」と訓を與えるが納得できない。却を豈と置きかえずとも、この句を反語によむことは可能。

5・6 ここにいう燈と枕が一體どのようなものなのか分らぬまま、強いて解釋するならば——色とりどりの花の咲きみだれる樹木にまがう回轉燈、まるで無數の眞珠がきらきらきらめくようだ。まるで玉の彫刻かと思わせるほど細密美麗にほりこまれた檀木製のぐるぐるまわる枕。

5 句の珠ノ錯落タルのが燈の形容ならば、6 句の玉雕鏤も當然枕の形容で、玉が枕の材質ではないはず。廖文炳・胡以梅の解はおかしく、劉若愚説 (elaborate carvings like jade) がよい。な

お律髓が綵を緑に、毛本が鍔を搜に作るのはいずれもあやまりであらう。

7・8 贅を盡した寢所におたのしみの若殿には、門番も心得たもので朝っぱらからの客は取りつきもいたさぬ。なにせその、手に入れられたばかりの美人、これぞ莫愁——世の憂愁はなべて無し——なのだから。

當關は字義どおりには御所の門衛のようなので、皇帝諷刺説には有利な材料。しかしここは明かに私人の使用人だ。7句の不を鼓吹その他は莫に作り、何焯は後者をよしとするがどうか。また高麗本が報を道に作るの非。8句の是はあえて底本のままとする。

(横山 弘)

銀河吹笙 259

悵望銀河吹玉笙 銀河を悵望して 玉笙を吹く
樓寒院冷接平明 樓は寒く院は冷かにして 平明に接す

重衾幽夢他年斷 重衾の幽夢 他年斷え

4 別樹羈雌昨夜驚 別樹の羈雌 昨夜驚く

月樹故香因雨發 月樹の故香 雨に因りて發し

風簾殘燭隔霜清 風簾の殘燭 霜を隔てて清し

不須浪作緜山意 浪りに緜山の意を作すを須いず

8 湘瑟奏簫自有情 湘瑟奏簫 自ずと情有り

校

0 才調集六

唐詩類苑六六(樂部笙類)

2 寒 徐陸合解「高」

5 樹 高麗本「桂」

發 高麗本「盡」

韻

下平十二庚(笙・明・驚)十四清(清・情) 同用

*

馮班(二馮評閱才調集)

鈍吟云。未解。

吳喬

此必悼亡王氏之作。

朱彝尊

疑此詩是咏吹笙。銀河二字。乃因笙而誤入耳。○吹笙者爲王子。

簫瑟則皆仙姬。意自可想。

1 吹笙人之態。

2 地。○時。

3・4 方夢他年事。因笙驚斷。而嘆易曉。

5・6 此聯從第二句來。

何焯

〔讀書記〕未詳(評本 本條なし)。

〔評本〕自嘆有仙才而其遇不如人也。猶言王好等而君致瑟耳。○接平明。言徒然徹夜不寐也。○悼亡。○領聯。承悵望。腹聯。承寒冷。○第四。言不唯難于感動。并已預遠也。第五。未解。

徐德泓

此假吹笙以寫悼亡之意。第二句。言時將曉。故接以斷夢驚禽兩句。他年字開。昨夜字合也。第五六句。寫蕭瑟之景。而出句虛寫。亦是開。對句實寫。亦是合。結聯收轉首句。言遊仙虛寂。豈若舜妃之瑟。秦樓之簫。自有夫婦之情乎。此與促漏篇195意可相混。報章句。亦可影附七裏。但玩其香換夕熏。及南塘蒲結語氣。則非矣。〔集釋稿〕本學報五四册四二三頁參照。又與當句有對篇390可混。但彼起承句意。則又不合矣。惟此當作悼亡解。而詞氣渾雅。非俗調所能爲也。

姚培謙

此悼亡之詞。故以銀河吹笙託意。樓高院冷。悵望銀河。斷幽夢於他年。驚羈雌於昨夜。吹笙亦聊以寄愁耳。乃幽夢雖斷。而月樹之故香如在。羈雌已散。而風簾之殘燭猶明。倘精靈之相感。吾知湘瑟秦簫。自當應和。豈必以綠山跨鶴爲樂哉。

屈復

一二。悵望至曉。三四。相思。五六。樓寒院冷景況。七八。決絕之詞。卽子不我思。豈無他人意。

程夢星

此亦爲女冠而作。銀河爲織女聚會之期。吹笙爲子晉得仙之事。故

以銀河吹笙命題。起句。揣其情也。次句。思其地也。三四。承起句。敘其悵望之事也。五六。承次句。敘其寒冷之景也。七八。謂其入道不如適人。浪作綠山駕鶴之想。何似湘靈之爲虞妃。秦樓之嫁蕭史耶。

紀昀

〔詩說補錄〕何以不取銀河吹笙也。曰。題小家氣。若仿製此題以爲韻致。則下劣詩魔矣。中二聯平頭〔評本 題太纖俗。通首亦浮聲多而切響少。從此一路入手。最害事。○中二聯平頭〕。

馮浩

上四句。言重衾幽夢。徒隔他年。羈緒離情。難禁昨夜。是以未及平明。而起望銀河。吹笙遺悶也。總因不肯直敘。易令人迷。綠山。專言仙境。湘瑟秦簫。則兼有夫妻之緣者。與銀河應。此必咏女冠非悼亡矣。

○ 取首四字爲題。非有誤。

張采田

〔會箋〕此在京聞女冠吹笙而根觸黃門之感也。首句。破題。次句。點在京中。二聯。正意。兼寫徹夜無眠之景。結言伉儷情深。不須浪作仙情艷想也。取首句標題。亦無題之類。紀氏譏其纖俗。太苛。〔辨正〕此種詩語淺意深。全在神味。皆義山獨創之體。自來無人學步。西崑不必論也。卽有中毒戕命者。此乃效法之不善。與義山無關。紀氏因此一路害事。便欲抹倒古人。多見其不自量矣。中聯平頭。是唐人舊法。○樓寒院冷。似指在京宮觀。蓋女冠多寓京師

也。此詩悼亡後作。當在大中十年隨仲郢由梓還朝時也。○此篇蓋義山悼亡後聞女冠吹笙而悵觸黃門之感也。首句。破題。次句。寫徹夜不眠之景。中二聯。正意與錦瑟篇¹此情追憶相同。結二句。則謂伉儷情深。不欲浪作仙情艷想也。如此解之。通篇融洽矣。銀河吹笙。祇取首句四字標目。亦無題之類。原無深意。何關雅俗。紀氏不味通篇命意。坐以浮聲二字之評。豈不謬哉。

黃侃

取首句中四字爲題。實無題之體也。程以爲亦刺女冠。未諦。細審其意。蓋千求不遂而自慰之詞。首二句言自處岑寂。雖遙聞笙響。惟有悵望而已。三句言往好不可復尋。四句言旅況益爲無俚。五句言舊游依稀可記。六句言它夜淒獨堪悲。七八句言攀援不得。則亦別求所以自慰之道。湘瑟奏簫。動心娛耳。不必嵩高仙樂。始可樂魂也。

胡以梅（器物類）

銀河是兩星隔河難相接之謂。徒聞其吹笙而悵望。以致樓寒院冷。直至天明。重衾之夢。昔年久斷。別樹之雌。昨夜聞驚。雨發故香。動舊日之思。霜前殘燭。歎今宵之寂。爾吹笙者。不須猛浪作意登仙。遠離憐愛。如湘靈之瑟。弄玉之簫。皆成匹偶。另有一種情思。笙豈獨無心乎。此詩全似艷情。謂所歡之辭。然曰重衾。曰羈雌。曰湘瑟奏簫。其意太洩。反是托言。謂當路者不接引。空羨其聲聞耳。幽夢他年。言從前原有交契。羈雌自比謙辭。發故香。欲仍全舊好。隔清霜。言冷淡相阻。緜山言莫爲仙凡之遠。湘瑟奏簫。求

其好合也。

近代注釋

〔劉若愚〕二〇七頁。

* *

0 詩題がやや奇抜に見え、朱彝尊はあやまりかと疑うが、馮・張および黄侃の指摘するとおり、首句から四字を選びとった借題である。従って題の意義を穿鑿しても始まらないのだが、義山には他に同型の句があり、「七月二十八日夜與王鄭二秀才聽雨後夢作68」逡巡又過瀟湘雨。雨打湘靈五十絃。これらとともに李賀の詩の二つの表現をふまえているとみられる。「天上謠」天河夜轉漂迴星。銀浦流雲學水聲。「秦王飲酒」金槽琵琶夜悵悵。洞庭雨脚來吹笙。とすれば、義山はおそらくいささかウイットをきかせて「銀河 笙ヲ吹ク」とよませるつもりなので、劉若愚が詩題まで「Playing the Pan-pipes under the Silver River」と譯してしまったのはまずいのではないか。

1 悵望 文選の語。唐詩でも常語。碧城三首之二152注（集釋稿）本學報五四册四〇三頁）參照。「錢起送征雁詩」悵望遙天外。鄉

愁滿目生。「李遠失鶴詩」碧落有情應悵望。青天無路可追尋。義山詩に頻用、十例。

銀河 〔纂要〕天河謂之天漢。亦曰雲漢。星漢。河漢。清漢。銀漢。天津。漢津。淺河。銀河。絳河。「初學記」一天部天。馬國翰は本書を顏延之撰とする。「江總內殿賦新詩」織女今夕渡銀河。當見新秋停玉

梭。〔戴叔倫織女詞〕難得相逢容易別。銀河爭似妾愁深。兩者をへだてるものとしての天河は義山詩で他に〔辛未七夕160〕恐是仙家好別離。故教迢遞作佳期。由來碧落銀河畔。可要金風玉露時。〔代應222〕本來銀漢是紅牆。隔得盧家白玉堂。

吹玉笙

(1) 直接王子喬の話(7句緜山の注参照)に結ぶ例。〔劉孝威奉和簡文帝太子應令詩〕園綺隨金輅。浮丘侍玉笙。〔宋之問王子喬詩〕白虎搖瑟鳳吹笙。乘騎雲氣吸日精。〔陳子昂送中嶽二三真人序〕玉笙吟鳳。瑤衣駐鶴。方且迷軒轅之駕。期汗漫之遊。(2) 一般的に仙人の行爲を連想させる例。〔郎士元聽鄰家吹笙詩〕鳳吹聲如隔綵霞。不知牆外是誰家。重門深鎖無尋處。疑有碧桃千樹花。〔杜甫八哀詩・嚴武〕堂上指圖畫。軍中吹玉笙。〔溫庭筠贈張鍊師詩〕丹谿藥盡變金骨。清洛月寒吹玉笙。(3) 女(仙)の行爲である例。〔曹植仙人篇〕湘娥拊瑟琴。秦(藝文四十二)作素女吹笙竽(曹集鈐評五)。〔梁武帝鳳笙曲〕綠羅冠碧彫瑄笙。朱唇玉指學鳳鳴。〔畢曜情人玉清歌〕洛陽有人名玉清。可憐玉清如其名。：珠爲帶。玉爲纓。臨春風。吹玉笙。〔王建宮詞〕小隨阿姊學吹笙。見好君王賜與名。

2 樓寒

〔駱賓王軍中行路難詩〕但使封侯龍額貴。詎隨中婦鳳樓寒。

院冷

用例未見。

平明

〔荀子哀公〕君味爽而櫛冠。平明而聽朝。一物不應亂之端也。〔文選三〇謝眺觀朝雨詩〕平明振衣坐。重門猶未開(李善

注 楚辭八九歎逢紛√曰。平明發合蒼梧)。〔王昌齡長信宮詞五首之三〕奉帚平明秋殿開。且將團扇暫徘徊。〔又送劉十五之郡詩〕平明江霧寒。客馬江上發。〔昨日369〕平明鐘後更何事。笑倚牆邊梅樹花(集釋稿)本學報五四册四三三頁參照)。

3 重衾

〔文選二四陸機贈尚書郎顧彥先二首之一〕朝遊忘輕羽。夕息憶重衾(李善注 輕羽。扇也)。〔玉臺新詠八劉孝威都縣遇見人織率爾寄婦詩〕獨眠眞自難。重衾猶覺寒。〔溫庭筠春日偶作〕夜間猛雨判花盡。寒戀重衾覺夢多。

幽夢

〔王維東溪翫月詩〕清燈入幽夢。破影抱空巒(唐文粹一六下では王昌齡の作とする)。〔韓愈答張徹詩〕荒餐茹獠蟲。幽夢感湘靈。〔元稹夢昔時詩〕閒窗結幽夢。此夢誰人知。義山にあと一例、〔贈從兄闓之328〕恨望人間萬事違。私書幽夢約忘機。

他年

(1) 過去を指す場合。〔杜甫從韋二明府續處竟錦竹詩〕華軒藹藹他年到。錦竹亭亭出縣高(九家注 他年則一二年前也)。〔又千秋節有感二首之二〕聖主他年貴。邊心此日勞(九家注 上句追言明皇之昔日)。義山では〔街西池館28〕白閣他年別。朱門此夜過。(2) 未來を指す場合。〔左傳成公十三年〕秋。負芻殺其大子而自立也。諸侯乃請討之。晉人以其役之勞。請俟他年。〔李白金陵歌送別范宣〕送爾長江萬里心。他年來訪南山皓。〔又贈從弟冽詩〕他年爾相訪。知我在礪溪。義山では〔高松412〕上藥終相待。他年訪伏龜。

4 別樹

〔洛陽伽藍記四城西〕(法雲)寺北有侍中尚書令臨淮王

或宅。：或性愛林泉。又重賓客。至於春風扇揚。花樹如錦。晨食南館。夜遊後園。：荊州秀才張斐裳爲五言。有清拔之句云。異林花共色。別樹鳥同聲。或以蛟龍錦賜之。

羈雌 〔文選三四枚乘七發〕龍門之桐。高百尺而無枝。：朝則鸚黃鴉鳴鳴焉。暮則羈雌迷鳥宿焉。〔玉臺新詠六王僧孺何生姬人有怨詩〕寒樹棲羈雌。月映風復吹。逐臣與棄妾。零落心可知。：同衾成楚越。異國非此離。〔韓愈歸彭城詩〕歸來戎馬間。驚顧似羈雌。義山にいま一例〔題鷺183〕那解將心憐孔翠。羈雌長共故雄分。

昨夜 〔玉臺新詠七蕭紀和湘東王夜夢應令詩〕昨夜夢君歸。賤妾下鳴機。〔庚信詠畫屏風詩二十四首之三〕昨夜鳥聲春。驚聞動四鄰〔許逸民校注 聞。類聚作啼。初學記。朱本並作鳴〕。義山のやはり艶詩とおぼしい七絶〔昨夜335〕昨夜西池涼露滿。桂花吹斷月中香。

5 月榭 〔沈約郊居賦〕脩林則表以桂樹。列草則冠以芳芝。風臺累翼。月榭重栴。〔庚信哀江南賦〕月榭風臺。池平樹古。〔李德裕詠山桂詩〕影入春潭底。香凝月榭前。義山の〔文集六祭長安楊郎中文〕尙冀他年。或陶良夜。酒筵琴席。燈闌月榭。

故香 〔徐陵春情詩〕故香分細煙。石炭擣輕紈〔類聚一八〕。〔白居易故衫詩〕殘色過梅看向盡。故香因洗嗅猶存。

6 風簾 〔文選三〇謝朓和王主簿怨情詩〕花叢亂數蝶。風簾入雙

燕。〔祖詠宿陳留李少府揆廳詩〕風簾搖燭影。秋雨帶蟲聲。
殘燭 〔白居易北亭獨宿詩〕悄悄壁下牀。紗籠耿殘燭。

7 不須 〔玉臺新詠一古樂府六首體如山上雪〕淒淒復淒淒。嫁娶不須嘆。願得一心人。白頭不相離。〔文選二二沈約遊沈道士館詩〕曰余知止足。是願不須豐。また義山の艶詩に〔鴛鴦276〕不須長結風波願。鎖向金籠始兩全。

浪作 助字辨略五に「浪 猶漫也。」というが、六朝の用例は載せない。浪をミダリとよむべき比較的早い例は〔大業中童謠〕桃李子。鴻鵠遶陽山。宛轉花林裏。莫浪語。誰道許〔隋書二二五行志上〕。や遅れて〔杜甫寄岳州賈巴州嚴兩閣老五十韻〕浪作禽填海。那將血射天。

緜山 緜氏山。〔列仙傳上〕王子喬者。周靈王太子晉也。好吹笙。作鳳凰鳴。遊伊洛之間。道士浮丘公接以上高高山。三十餘年後。求之於山上。見桓良曰。告我家七月七日待我於緜氏山巔。至時。果乘白鶴駐山頭。望之不得到。舉手謝時人。數日而去。亦立祠於緜氏山下及高高首焉。 妙哉王子。神遊氣爽。笙歌伊洛。擬音鳳響。浮丘感應。接手俱上。揮策青崖。假翰獨往〔道藏本〕。

〔宋之問緜山廟詩〕王子寶仙去。飄飄笙鶴飛。〔李白鳳笙篇〕綠雲紫氣向函關。訪道應尋緜氏山。莫學吹笙王子晉。一遇浮丘斷不還。〔許渾登洛陽城詩〕可憐緜嶺登仙子。猶自吹笙醉碧桃。

8 湘瑟 〔楚辭遠遊〕使湘靈鼓瑟兮〔王逸注 百川之神。皆謠歌也〕。令海若舞馮夷〔王逸注 河海之神。咸相和也〕。〔錢起省試

湘靈鼓瑟詩〕善鼓雲和瑟。常聞帝子靈。馮夷空自舞。楚客不堪聽。

〔孟郊泛黃河詩〕湘瑟颺颺弦。越賓鳴咽歌。なお湘靈は、王逸の注でははっきりしないが、唐人は一般に湘妃とみなしていたのである。後漢書馬融列傳五〇上に引く廣成頌の注に、「湘靈、舜妃、溺於湘水、爲湘夫人也、見楚詞」という。〔碧城三首之二152〕赤鱗狂舞撥湘絃。〔集釋稿〕本學報五四冊四〇一頁の句は、湘瑟の伴奏で狂亂の姿態を見せる女性に赤鱗のイメージを描き出す。

秦簫 秦の穆公の娘弄玉は簫の名人簫史にほれこんで夫婦になった〔列仙傳下。前出碧城152注八四〇二頁〕参照。その弄玉の吹き鳴らす簫。これも義山愛用の故事で、〔送從翁從東川弘農尙書幕559〕素女悲清瑟。秦娥弄碧簫。など、碧城のほかにも用例は一二に止まらない。

〔徐陵玉臺新詠集序〕傳鼓瑟於楊家。得吹簫於秦女。〔杜甫鄭駙馬池臺喜遇鄭廣文同飲詩〕重對秦簫發。俱過阮宅來。留連春夜舞。淚落強裴回。

自有 〔楚辭九歌少司命〕夫人自有兮美子。蘇何以兮愁苦〔王逸注 蘇謂司命也。言天下萬民。人人自有子孫。司命何爲主握其年命。而用思愁苦也〕。〔玉臺新詠一日出東南隅行〕使君自有婦。羅敷自有夫。〔又二曹植浮萍篇〕茱萸自有芳。不若桂與蘭。新人雖可愛。無若故所歡。

1 見上げる七夕の夜の銀河に、たち切れぬ哀憐のひとすじの絲の

ような、わが玉笙の音は届くだろうか、銀河を越えてあの人の心に届くだろうか。吹笙する男(または女または無性)は、銀河と地上の間、天界と地上界のはざまに在る、ものと考えた

2 ひと氣ない高殿は冷たい中庭の前に寒さむとうずくまり、いつしかあの幸せな戀人たちのきぬぎぬの別れのとき、夜明けがそこに忍びよううとしている。

3 かつては、燃えるような生命があった、ひとつふすまに深ぶかとするまれ、ひとには知られぬ夢見もした、ふたつの生命が。だがそれもはるかなむかし、絆は断たれ。

4 寄るべなくさすらうあなた。ひとり立つ木に假りの宿をもとめ、あなたはいく度となく眠りを破られる不安の夜々を過ごしてきた、ことであろう。まして、昨夜は、どこからか、哀切な笙の音が幻聴めいてきこえてきたかもしれぬのだから。

5 ある夜あなたは、月光の下、わたしたちの思い出の、あの樓臺に舞い降り、神女の化身の雨のおかげで、夢幻のようにたちのぼる過ぎた日々の残香に胸をつまらせた……ことがあったかもしれぬ。

6 またある夜、あなたは、神女の化身の霜の氣みちる空をわたり、漸くたどりついた庭木の枝に羽を休めながら、ふと、風にゆれる簾の向うに、燃えつきようとする燭の不思議に清らかな輝きを見た……ことがあったかもしれぬ。(わたしたちはいく夜二人して

語らいながら、燭をかきたてかきたてながら、夜を明かしてしま
ったことだったろう。)

7 一切の地上的絆を断ち、ひと思いに天上へ——と思わないでは
ないのだが、七月七日、緜氏山のいただきにてこの世の人びとに
別れをつけ仙界へと飛び去ったあの王子喬のところに、單純に従
おうとはせぬ。そうし切れない苦しい思いがわたしにはあるのだ。

8 その苦しみは口ではいえない。ただ、こう断言することはでき
るのである——湘妃も弄玉もそれぞれにどんなに切なる哀憐の情
をこめて瑟を弾き簫を吹きならしていたことか、それを彼女らと
同じ仙界の人のようでありながらも王子喬は、このわたしほどに
は身につまされて知ってはいなかったのだ——と。地上界を離れ
ることへの否定のかたちをとった「はざま」に在ること自體の自
己確認。「中路ニ因循スルハ我が長ズル所ナリ。」(有感234)

右に記したのは、馮班や何焯といった中國古典詩讀解の專家の
なかの專家、しかも義山詩には比較的好意的な人物でさえ匙を投
げた、この、アンビギュイティの見本のような作品の無數に分岐
するよみ方のうち、せいぜいひとつの可能性にすぎないことを、
特にお断わりしたい。舊説では、やはりちかごろの劉若愚および
山之内正彦(「李商隱表現考・斷章」東洋文化研究所紀要四八册
五八頁)兩者の解釋がより説得的だが、劉は失われた愛を描く義
山の名作とするものの、主人公が男性か女性かについて判断停止
している。いま主人公の獨白か、第三者によるナレーションかを

主軸として諸説を區分してみる。

	主人公	男	女
話法	獨白	A	B
	語り	C	D

A₁ 吳喬・徐德泓・姚培謙・張采田(悼亡)

A₂ 黃侃

B 屈復・胡以梅

A B 劉若愚

C 朱彝尊(?)・山之内

D 程夢星・馮浩

(女冠詠)

本稿原案はほぼA₂に屬するが、黃侃のように身世の嘆の寓意あり
とはみない。なおBの胡以梅も黃とおなじく眞意は寄託にありと
する。しかし、最終的にどのような見解に到着くにせよ、ほとん
どすべての解釋者が、一義的には悲哀の情を基調とする艶詩たる
ことをみとめているのだが、屈復だけは全く逆に喜劇的感覺をよ
みこむ。「浪ニ緜山ノ意ヲ作スヲ須イザレ」とすこんで見せ、あ
なたひとり男じゃなし、と開き直ったたかな女。こういう
よみ方を可能にさせるのは、恐らく全體を通じて、7・8句が最
も複雑な問題をはらむ部分なのと関連しよう。

たとえば、屈復などちがって、ひとりの男の「悼亡(あるい
は失愛)」の悲しみの描寫——すなわち語り、とこの詩を理解す
る山之内説の場合にしても、尾聯は「愛のあり方に對して李が下
す一つの判断」として、6句までのいわば純粹客觀描寫を越える、
レヴェルの微妙な差異が指摘されるのである。そのとおりなのだ
が、しかしいま一步ふみこんでいうならば、ここは作者が直接肉

聲で語りかけたのではなく（無題IIIの7句「嗟余、聽鼓應官去」はたしかに作者の聲だが）、聲は最後まで語り手の聲だ。ただし、讀者には全く存在が意識されなかった語り手がここで始めてチラと顔をのぞかせる。しかもそれが同時に、この作品をひとつの物語として成り立たせるためのワク、という重要な役割を果しているのではないか。だからもし獨白でなく語りとみなすならば、同じ艶情の作でも無題IIIの方ではなく、無題367の結び（「直道相思了無益、未妨惆悵是清狂」）と構造的に等質とみるべきだろう。馮浩、安徽師大本年表は不編年だが、張采田はこの作品をも係年する（大中十年）。正文の異同はいずれもとりあげるに足らない。

（茂木信之）

中元作275

中元の作

絳節飄飄空國來 絳節飄飄 國を空しうして來り
 中元朝拜上清廻 中元に朝拜し 上清より廻る
 羊權雖得金條脫 羊權は金の條脫を得と雖も
 4 溫嶠終虛玉鏡臺 溫嶠は終に虚し 玉の鏡臺
 曾省驚眠聞雨過 曾て省ゆ眠りを驚かせて 雨の過ぐるを聞くを
 不知迷路爲花開 知らず路に迷いしは 花の開くが爲なるを
 有娥未抵瀛洲遠 有娥未だ抵らず 瀛洲の遠きに
 8 青雀如何鳩鳥媒 青雀如何ぞ鳩鳥の媒たるや

李義山七律集釋稿（三）

校

0 古今歲時雜詠二八

唐詩類苑二一（歲時部中元類）

中元作 高麗本「中元」

1 飄飄 高麗本「飄飄」

空 歲時雜詠・錢本・毛本「宮」 叢刊本・唐詩類苑・朱鶴齡

本・稿本・全唐詩「宮一作空」 高麗本「萬」

3 雖 朱鶴齡本・全唐詩「須一作雖」 稿本旁注「須」

8 如何 高麗本「何如」

鳩 統籤「鳩」

韻

上平十六哈（來・臺・開）十五灰（廻・媒） 同用

*

胡震亨（情詞）

言瀛洲之遠。必青雀爲媒。何可如有娥之媒鳩。鳩告余不好也。通

篇皆不得親近之意。

何焯

〔讀書記〕五六。承上金條脫句。結句。承上玉鏡臺句（評本五

六。詠金條脫句。結承玉鏡臺句）。

〔評本〕有娥非遠。雖青雀可飛而至。如何二字一頓。乃商略之詞。

鳩鳥爲媒。則眞出意外也。

姚培謙

此必爲女道士作。言仙質之不可以凡侶求也。絳節飄飄。空國艷仰。正當上清朝拜而迴。容艷如此。條脫之贈。苟非仙骨如羊權。鏡臺之聘。豈易成婚如溫嶠。蓋既非塵俗之人。定不作塵俗之想。或者雨過之時。曾省驚眠。若非花開之時。豈知迷路。吾知佚女之身。縱未託灑洲之遠。乃既無青雀。而漫欲使鳩鳥爲媒。亦太不自量矣。詩蓋爲非分妄求者發歟。

屈復

中元絳節。空國朝回。三。姻事可成。四。何以爲聘。五六。恐難必也。然有娥不遠。青雀方便。如何得有鳩鳥之讒媒乎。言必可成也。○此蓋王茂元許妻以女。適當中元。喜而成詩。故題曰中元作。

程夢星

此中元悼亡之作。自道經有七月十五日地官校勾善惡之說。世俗之懺悔生前。求利冥福者。往往而然。卽如代宗。七月望日。於內道場。造盂蘭盆。設高祖以下七聖神座。各書尊號於幡上以識之。此當時薦亡之證也。義山此時因而傷逝。起二句。言舉國皆作中元。已亦朝拜上清而回。三句。言茂元之女已亡。空如萼綠華之別羊權。惟遺金條脫矣。四句。言喪偶之傷無已。不似溫嶠之聘劉氏。豈納玉鏡臺耶。五句。言其致感於孤栖。六句。言其無心於窈窕。七八。用離騷語意。以見嘉耦難逢。不復望惡鳥之爲蹇修矣。

紀昀

〔詩說下〕何以不取中元作也。曰。通首筆意渾勁。自是佳作。然求其語意。類乎有所見而求之不得之作。題曰中元作。知確有本事。

非寓言之比也。措語雖工。衡以風雅之正。固無取焉（評本 此借中元所見而借以託遇合之感。措語特沈著）。

馮浩

此亦爲入道公主作。起二句點題。三句暗有所歡。四句終無下嫁。下半言雨過而曾令眠驚。花開而偏嗟迷路。雖非遠不可卽。乃青雀不逢而鳩鳥爲媒。豈佳偶之相合歟。此種殊傷詩品。

5·6 徐（逢源）曰。暗用高唐天台二事。

張采田

〔會箋〕刺女道士之淫佚也。唐時風俗如此。不必穿鑿他解。

〔辨正〕此詩桐鄉馮氏謂爲大傷詩教。紀氏獨能賞其沈著。可稱特識。急當表而出之。以見鄙人非阿好也。若他篇皆能如此。則吾無間然也。

黃侃

程以爲中元悼亡之作。蓋誤。此詩所刺。與碧城151 152 153（刺貴主之爲女冠者）聖女249諸首同。特因中元而造端耳。三四譏諷至顯。五句言惜其兩夜之無眠。六句諷其如狂香之引路。七八言有娥雖遠。却在人間。青鳥爲媒。適同毒鳩。疾之之詞。可謂附厲矣。

胡以梅（艷情類）

此托言也。詳釋詩境。或者當日鄭亞柳仲郢輩請爲判官而作。一二。言其受節使。陸辭而行。遂有辟請之事。但幕佐偏員。非華要之職。止如羊權之得金條脫而遇仙相識。不似溫嶠之下玉鏡臺而有室有家。念世事艱難。曾省驚眠之雨。業已過去。不謂迷失之路。今日爲花

而開。茲亦可喜也。從此以進覺有娥不遠。但恐鳩鳥爲媒。終亦不能助我耳。當知以前驚眠之雨。迷失之路。皆鳩鳥爲之也。中元爲上天校勾分別善惡之期。今有此徵辟。似喻朝中之有定論。故用以為題。或事適在中元時也。有娥。依離騷指君。青雀。謂己。鳩鳥。或指令狐綯輩耶。妙在用驚眠花開。可以接條脫鏡臺。下貫有娥。氣類相通。此其法之所以精也。按此詩若作私暉。三四太露。結亦無此怒張。

近代注釋

〔鈴木虎雄〕七六頁。〔高橋和巳〕五三頁。

0 2句の中元の二字を借り、作の字を加えて詩題とする。高麗本に作の字がないのは注意すべき異同である。なお題のよみ方は或いは「中元ニ作ル」か。

歲時雜詠は義山の詩のほか十三篇の唐詩をあつめる。徳宗「七月十五日題章敬寺」 崔元翰「奉和聖製中元月題章敬寺」 嚴維等「中元日鮑端公（防）宅遇吳天師聯句」 戎昱「開元觀陪杜大夫中元日觀樂」 盧拱「中元日觀法事」 李郢「中元夜」 令狐楚「酬蘇少尹中元夜追懷思舊之作」 「中元日贈張尊師」 陸龜蒙「中元夜寄道侶二首」 羅隱「卽事中元甲子」 「中元夜看月」 「中元夜泊淮口」 いま本詩とやや關連性あるかと思われ二篇を掲げる。

今朝歡稱玉京天。況值關東俗理年。舞態疑廻紫陽女。歌聲似遏

李義山七律集釋稿（二）

綵雲仙。盤空雙鶴驚丸劍。灑砌三花度管絃。落日香街塵擁騎。好風油幕動高烟。（戎昱）

1 絳節

〔梁邵陵王綸祀魯山神文〕鳴璆撫劍。俠席徘徊。絳節陳竿。滿堂繁會。奠椒懷糈之歡。傳卮代舞之樂。（杜甫玉臺觀二首之二）

中天積翠玉臺遙。上帝高居絳節朝。（皇甫冉少室山韋鍊師昇仙歌）紅霞紫氣晝氤氳。絳節青幢迎少君。（西陽雜俎前集一〇物異）上清珠：是開元中。闕寶國所貢。光明潔白。可照一室。視之。則仙人玉女。雲鶴絳節之形。搖動於其中。

飄飄

〔詩爾風鵠弱〕予室翹翹。風雨所漂搖。〔漢武帝李夫人賦〕的容與所猗靡兮。縹飄姚悖愈莊（孟康曰。言夫人之顏色的然盛美。雖在風中縹姚。愈益端嚴也）（漢書九七上外戚傳）。〔文選二九曹植雜詩六首之二〕轉蓬離本根。飄飄隨長風。（李白遊太山六首之六）想象鸞鳳舞。飄飄龍虎衣。

空國

〔韓非子安危〕安危在是非。不在於強弱。存亡在虛實。不在於衆寡。故齊萬乘而名實不稱。上空虛於國內。不充滿於名實。故臣得奪主（陳奇猷案。或以內字屬下讀。亦通）。

2 中元

〔荆楚歲時記〕七月十五日。僧尼道俗悉營盆供諸寺。案孟蘭盆經云。有七葉功德。並幡花歌鼓果食送之。蓋由此（初學記四）。〔道經〕七月十五日。中元之日。地官校勾搜選衆人。分別善

三三五

惡。諸天聖衆。普詣宮中。簡定劫數。人鬼傳錄。餓鬼囚徒。一時俱集。以其日作玄都大獻於玉京山。採諸花果。世間所有奇異物。玩弄服飾。幡幢寶蓋。莊嚴供養之具。清膳飲食。百味芬芳。獻諸衆聖。及與道士。於其日夜。講誦是經。十方大聖。齊詠靈篇（初學記四）。〔舊唐書一一八王縉傳〕代宗七月望日。於內道場造盂蘭盆。飾以金翠。所費百萬。又設高祖已下七聖神座。備幡節龍傘衣裳之制。各書尊號于幡上以識之。昇出內。陳於寺觀。是日。排儀仗。百僚序立於光順門以俟之。幡花鼓舞。迎呼道路。歲以爲常。而識者嗤其不典。其傷教之源。始於縉也。

中元の日に道士が昇天し帝に拜謁するという信仰については〔無上祕要五二・三元齋品〕天尊言常以正月十五日。七月十五日十月十五日。平旦正中夜半三時。沐浴身形。五香自洗。五色之雲。匝遶一身。：飛仙乘騎。侍衛身形。便叩齒三十二通。呪曰。天澄氣清。五色高明。日月吐輝。灌我身形。神津內盥。香湯練精。光景洞輝。煥映上清。：今日大願。一切告盟。身受開度。昇入帝庭。〔令狐楚中元日贈張尊師〕寂寂焚香在仙觀。知師遙禮玉京山。朝拜 朝は陽平によむ。〔十洲記〕武帝欣聞至說。明年遂復從受諸眞形圖。常帶之肘後。八節常朝拜靈書。以書求度脫焉。〔陶弘景授陸敬游十齋文〕爾眞心內固。清行外彰。滌蕩紛穢。表裏雪霜。今故賚爾鑰石澡灌。手巾爲副。可以登齋朝拜。出入盥漱。

上清 道教における天界の構成は、三十六天説として北周のころ成立、唐代に確定。過去・現在・未來の三世の天尊が鎮座する

大羅天が最上、その下に位するのが三清境（三境）で、上清はその二番目中乗の境である。〔道教三洞宗元〕其三清境者。玉清上清太清。是也。亦名三天。：天寶君治在玉清境。即清微天也。其氣始青。靈寶君治在上清境。即禹餘天也。其氣元黃。神寶君治在太清境。即大赤天也。其氣玄白。：其次即至三境。境別有左右中三宮。宮別有仙王仙公仙卿仙伯仙大夫。別有一太上老君天師。太清境有九仙。上清境有九眞。玉清境有九聖。三九三十七位也。：最上一天。名曰大羅。在玄都玉京山之上。紫微金闕。七寶齋樹。麒麟師子。化生其中。三世天尊。治在其內。三界二十八天。其次四天。其次三境。最上大羅。合三十六天。總是三尊所統（雲笈七籤三道教本始部）。唐代初期の代表的教理書「道門經法相承次序」上にも同様の記述がある。以上、福永光司氏の指教による。

佛教とおなじく道教にも惹かれていた義山の詩にはしばしば道教の天界の名稱が見える。(1)大羅天は〔留贈長之三首之一146〕に、(2)三清境は〔權花二首之一74〕〔寓懷580〕に、(3)太清は〔令狐舍人説翫月因戲贈4〕に、(4)上清は〔重過聖女祠2〕に、(5)玉京は〔杏花217〕〔憶雪54〕〔五言述德抒情詩564〕に。また義山の文集を一見しても、かれが道教の世界によく通じていたことは明らかである。

右のような天界の體系とはいささかずれるようだが、上清を天上の宮殿名とする記述も別に存在するので、念のため引いておく。〔上清源統經目註序〕上清者。宮名也。明乎混沌之表。煥乎大羅

之天。靈妙虛結。神奇空生。高浮澄淨。以上清爲名。乃衆眞之所處。大聖之所經也。宮有丹青金玉字上皇寶經。皆玄古之道。自然之章（雲笈七籤四道教經法傳授部）。

唐詩ではほかに〔白居易夢仙詩〕人有夢仙者。夢身升上清。

〔王建贈太清盧道士詩〕上清道士未昇天。南岳中華作散仙。

3 〔眞誥一運象篇〕愕綠華者。自云是南山人。不知是何山也。女子。年可二十。上下青衣。顔色絕整。以升平三年十一月十日夜降羊權。自此往來。一月之中。輒六過來耳。云。本姓楊。贈權詩一篇。并致火澣布手巾一枚。金玉條脫各一枚。條脫乃太而異精好。

神女語權。君慎勿泄我。泄我則彼此獲罪。訪問此人云。是九嶷山中得道女羅郁也。宿命時。曾爲師母。毒殺乳婦玄州。以先罪未滅。故令謫降於臭濁。以償其過。與權尸解藥。今在湘東山。此女已九百歲矣（原注。權。字道輿。忱之少子。後爲管簡文黃門郎。卽羊欣祖。故欣亦修道服食也）（道藏本）。この世のひとつと思えぬ美女として、義山の他の詩にも蔓綠華は登場する。〔無題二首之二112〕聞道閨門蔓綠華。昔年相望抵天涯（集釋稿）（本學報五三册六二二頁参照）。

條脫 〔玉臺新詠一繁欽定情詩〕何以致拳拳。縮臂雙金環。何以致殷勤。約指一雙銀。…何以致契濶。繞腕雙跳脫。〔初學記四歲時部五月五日〕周處風土記曰。仲夏端午。…又有條達等織組雜物。以相贈遺（古詩云。繞臂雙條達）〔盧氏雜說〕唐文宗…又一曰。問宰臣。輕衫襯跳脫。跳脫是何物。宰臣未對。上曰。卽今之腕

釧也。眞誥言安姑有斷粟金跳脫。是臂飾（廣記一九七唐文宗條）。〔北夢瑣言四溫李齊名條〕宣宗嘗賦詩。上句有金步搖。未能對。遣末第進士對之。（溫）庭雲乃以玉條脫續也。宣宗賞焉。

4 〔世說新語假譎〕溫公喪婦。從姑劉氏。家值亂離。唯一一女。甚有姿慧。姑以屬公爲婚。公密有自婚意。答云。佳婚難得。但如嶠比云何。姑云。喪破之餘。乞得粗相存活。便足慰吾餘年。何敢希汝比。卻數日。公報姑云。已得婚處。門地粗可。婿身不減嶠。因下玉鏡臺一枚。姑大喜。卽婚。交禮。女以手披紗扇。大笑曰。我固疑是老奴。果如所卜。玉鏡臺。是公爲劉越石長史。北征劉聰所得。初唐の〔張絃行路難詩〕君不見溫家玉鏡臺。提携抱握九重來。君不見相如綠綺琴。一撫一拍鳳凰音。

溫嶠 羊權におなじく道教と直接に關係を持つ人物。〔陶弘景眞靈位業圖〕監海伯治東海溫太眞。位比大將軍。〔眞誥一五闡幽微〕溫太眞爲監海開國伯。治東海。闡幽微篇は、「鬼神官府の官司氏族」（眞誥一九翼眞檢原注）を載せる。また無上祕要八三得鬼官道人名品にも闡幽微とほぼ同様な記載あり。

鏡臺 〔魏武雜物疏〕鏡臺。出魏宮中。有純銀參帶鏡臺一。又純銀七貴人公主鏡臺四（初學記二五）。謝朓の雜詠三首に鏡臺の詩あり。

5 會省 〔周賀哭栢巖禪師詩〕此時頻下淚。會省到吾廬（撫言一〇海鏡不遇條。集本は哭閑霄上人と題し、弔來頻落淚、會憶到吾廬、に作る）。〔許渾酬和杜侍御詩〕花時會省杜陵游。聞下書帷

不學頭。

張相の語辭匯釋五にいう。「省、猶記也、憶也。…韋應物雪中詩、連山暗古郡、驚風散一川。此時騎馬出、忽省京華年。…白居易畫竹歌、西叢七莖勁而健、省向天竺寺前石上見、東叢八莖疏且寒、憶曾湘妃廟裏雨中看。此與憶字互文也。」(新版五七一頁)

驚眠〔徐陵中婦織流黃詩〕蜘蛛夜伴織。百舌曉驚眠。〔張說岳州守歲詩〕桃枝堪辟惡。爆竹好驚眠。

聞雨過 馮注に引く徐逢源がいうように雨はやはり巫山の神女を暗示するであろう。〔文選〕九宋玉高唐賦〔巫山之女〕曰。妾在巫山之陽。高丘之阻。旦爲朝雲。暮爲行雨。朝朝暮暮。陽臺之下。初唐の〔楊師道初宵看婚詩〕更笑巫山曲。空傳暮雨過(ここは平聲)。裏に艶情を秘めた雨を構成要素とする詩句として他に〔碧城三首之一51〕雨過河源隔座看(集釋稿(二)本學報五四册三九九頁)。さらに義山には文字通り夢幻的な雨のイメージを描きだした〔七月二十八日夜與王鄭二秀才聽雨後夢作68〕があることも注意すべきである。

聞雨については、義山より後になるが〔韓偓聞雨詩〕香侵蔽膝夜寒輕。聞雨傷春夢不成。

6 〔幽明錄〕漢明帝永平五年。剡縣劉晨阮肇共入天台山取穀皮。迷不得返。經十三日。糧食乏盡。飢餒殆死。遙望山上有一桃樹。大有子實。…各啖數枚。而飢止體充。…出一大溪。溪邊有二女子。姿質妙絕。…因邀還家。其家銅瓦屋。南壁及東壁下。各有一大牀。

皆施絳羅帳。銀角懸鈴。金銀交錯。牀頭各有十侍婢。敕云。劉阮二郎。經涉山阻。向雖得瓊實。猶尙虛弊。可速作食。食胡麻飯。山羊脯。牛肉。甚甘美。食畢行酒。有一羣女來。各持五三桃子。笑而言賀汝婿來。酒酣作樂。劉阮忻怖交并。至暮。令各就一帳宿。女往就之。言聲清婉。令人忘憂。十日後欲求還去。女云。君已來是。宿福所牽。何復欲還邪。遂停半年。氣候草木是春時。百鳥啼鳴。更懷悲思。求歸甚苦。女曰。罪牽君當可如何。…共送劉阮。指示還路。既出。親舊零落。邑屋改異。無復相識。問訊得七世孫。傳聞上世入山。迷不得歸(古小說鈎沈)。

〔桃花源記〕晉太元中。武陵人捕魚爲業。緣溪行。忘路之遠近。忽逢桃花林。夾岸數百步中。無雜樹。芳草鮮美。落英繽紛。漁人甚異之。…便得一山。山有小口。髣髴若有光。便捨船從口入。…豁然開朗。土地平曠。屋舍儼然。有良田美池桑竹之屬。阡陌交通。雞犬相聞。其中往來種作男女。…見漁人。乃大驚。問所從來。…各復延至其家。皆出酒食。停數日。辭去。此中人語云。不足爲外人道也。既出。得其船。便扶向路處處誌之。及郡下。詣太守說如此。太守即遣人隨其往。尋向所誌。遂迷不復得路。

類似的表現は他にも〔和孫朴韋蟾孔雀詠12〕西施因網得。秦客被花迷。〔飲席戲贈同舍47〕洞中屐響省分携。不是花迷客自迷。〔寄惱韓同年時韓住蕭洞二首之二401〕龍山晴雪鳳樓霞。洞裏迷人有幾家。いづれも洞天・仙女・魅惑のモチーフ。

迷路 〔盧綸酬金部王郎中省中春日見寄詩〕更有阮郎迷路處。

萬株紅樹一溪深。〔章八元天台道中示同行詩〕仙道多因迷路得。莫將心事問樵翁。〔韓愈遊青龍寺贈崔大補闕詩〕桃源迷路竟茫茫。裏下悲歌徒纂纂。

花開 〔費昶芳樹詩〕枝低疑欲舞。花開似含笑。〔皇甫冉山中五詠·春早詩〕草徧潁陽山。花開武陵水。

7・8 〔楚辭離騷〕覽相觀於四極兮。周流乎天余乃下。望瑤臺之偃蹇兮。見有娥之佚女。〔王逸注〕有娥。國名。佚。美也。謂帝嚳之妃。契母簡狄也。配聖帝。生賢子。以喻貞賢也。詩〔商頌長發〕曰。有娥方將。帝立子生商。呂氏春秋〔季夏紀音初〕曰。有娥氏有美女。爲之高臺而飲食之。言己望瑤臺高峻。睹有娥氏美女。思得與共事君也。吾令鳩爲媒兮。〔王逸注〕鳩。運日也。羽有毒可殺人。以喻讒佞賊害人也。鳩告余以不好。〔王逸注〕言我使鳩鳥爲媒。以求簡狄。其性讒賊。不可信用。還詐告我言不好也。雄鳩之鳴逝兮。余猶惡其佻巧。〔王逸注〕佻。輕也。巧。利也。言又使雄鳩銜命而往。其性輕佻巧利。多語言而無要實。復不可信用也。心猶豫而狐疑兮。欲自適而不可。鳳凰既受詒兮。恐高辛之先我。

7 未抵 〔白居易讀史五首·詠史詩〕乃知汨羅恨。未抵長沙深。

瀛洲 〔史記六始皇本紀〕〔二十八年〕齊人徐市等上書。言海中有三神山。名曰蓬萊。方丈。瀛洲。僊人居之。請得齋戒。與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人。入海求僊人。〔文選一五張衡思玄賦〕留瀛洲而采芝兮。聊且以乎長生。〔舊注〕瀛洲。海中

山也。善曰。列子〔湯問〕曰。勃海之東。有大壑。其山一曰岱輿。二曰員嶠。三曰方壺。四曰瀛洲。五曰蓬萊。〔玉臺新詠九傳玄擬四愁詩四首之一〕我所思兮在瀛洲。願爲雙鶴戲中流。〔明皇雜錄〕玄宗御勤政樓。大張樂。羅列百妓。時教坊有王大娘者。善戴百尺竿。竿上施木山。狀瀛洲方丈。令小兒持絳節。出入於其間。歌舞不輟。〔廣記一七五劉晏條〕。

8 青雀 〔說文〕翠。青羽雀也。出鬱林。〔洞冥記一〕改崇蘭閣爲猗蘭殿。後王夫人誕。武帝於此殿有青雀羣飛於霸城門。乃改爲青雀門。〔盧象青雀歌〕啾啾青雀兒。飛來飛去仰天池。逍遙飲啄安涯分。何暇扶搖九萬爲。

ただし義山の青雀は後の二例ともども消息を伝える使者として漢武故事などに見える「青鳥」と同義。〔漢宮詞113〕青雀西飛竟未迴。君王長在集靈臺。〔聖女祠326〕消息期青雀。逢迎異紫姑。この手の先例では、〔蔡邕琴賦〕青雀西飛。別鶴東翔。〔類聚四四〕〔玉臺新詠六吳均和蕭洗馬子顯古意六首之二〕蓮花銜青雀。寶粟鈿金蟲。〔吳兆宜注〕古樂府。何用通音信。蓮花瑋瑋簪。〔無題相見時難150〕青鳥注〔集釋稿〕本學報五三册六四六頁〕參照。

この詩の表現態度と表現対象を軸として、舊説を表示すれば次のようになる。

A 馮浩・張采田・黃侃

A' 姚培謙

		女道士	某女	王氏女
諷刺	自述	A		
		B	C	D
				E

B (||C) 鈴木「作者は女を仙人とみなす」

C 胡震亨・高橋

C' 胡以梅・紀昀

D 程夢星

E 屈復

2句の「中元」が作品の他の部分と

どう關わるのか。舊注は四つに分れる。

(1) 道教の行事であることから女冠、入道公主に結ぶもの（姚、馮ら）。(2) 死者の供養の日であることから悼亡に結びつけるもの（程）。(3) 中元の日に何らかの「本事」があったとするもの（紀）。

(4) ことが偶然、中元の日に當ただけとするもの（屈復など）。(4) は作品の文脈理解を放棄しているが、こうした説があること自體、

首二句と以下との間に絶對的な連關を求めにくい證佐である。(1) のように對象を尋常ならぬ人とするなら、3句以下に登場する女

仙たち（萼綠華・巫山神女・天台二女・有娥氏美女）ともつながる。「續玄怪錄」（杜子春）や「傳奇」（崔暉）によれば、中元は

神祕的な世界との交流を可能にする日でもあったようだ（陳元靚「歲時廣記」二九にはそうした例話を多く集録する）。この義山

獨特の曖昧模糊としたスタイルの艶情の作品も、中元を一種のハ

レの日で日常性から解放された時間とする一般的な意識の下に成立しているだろう。しかし、ここでは相手を實際に女道士とはみ

ないで、對象に接近不可能（胡震亨）の比喩として女仙を想定したもの（鈴木）、と一應解しておく。義山の詩では「重過聖女祠2」がかなり似かよった雰圍氣を持つ。

1・2 深紅ののぼりを風にひらめかせ、地上の國（中の道觀）を空っぽにするほど、一人のこらず天界へとやって来て、この中元の日に上清境にて禮拜おえてもどってゆく仙人や仙女たち。舊説はおおむね道觀を上清に見立て、一般の參詣者でにぎわう道觀のさま、とするが、なぜそのように持って廻った解釋をせねばならぬのか。鈴木説に従い、文字通りに解する。1句の空國はやや奇異なことだが、異文の「宮國」ではさらによめないし、麗本の「萬國」は意改か。2句「廻」は地上へでなく神仙本來の住み家たる天上へ歸ることか。それならば「上清二廻ル」とよむべきか。また「廻」は歸還でなく或いは終える、すませる、かもしれない。「可歎207」の起句「幸會東城宴末廻」參照。

3・4 羊權が萼綠華から黄金の腕輪をもらったように、愛のあかしは確かにうけとったのだけれども、温嶠が劉氏の娘に結納として玉の鏡臺を贈って、願いどおり結婚したようには行かず、本來上清境に住むべき女とはついに結ばれることがないのだろう。二句は男女の間の物品の贈答と、そしてともに道教に縁の深い男性同士で完全にパラレル。3句の雖の字、朱鶴齡本の系統はすべて須に作るが、たとえ須の字でも雖とよむべきこと、張相語辭滙釋の卷一須（六）に詳しい。また蔣禮鴻變文字義通釋にも説が見え

る。

5・6 巫山の神女のように暮れ方ひそかに通り雨となって束のま訪れてくれたひとと眠らぬ一夜をすごしたのをいまも忘れがたく憶えている。ふみいるはずのない、あてどない道にふみ迷ったのは、魔力あるもののように咲き亂れていた桃の花のせい——だったのであるうか。幻のような、淡い、しかしかけがえのない追憶。
5・6句は、やっと出会えたと思えば夢だったし、結局相手のものには通えなかった、と解することもできよう。

7・8 東の大海のはるかかなた最も遠いあの瀛洲、有娥の地はそこまでも行かない。だのに戀の使者たるはずの青い雀が、どうしてあのまがまがしき鳩鳥みたいな悪意をこめた仲だちとなってしまうのか。8句、屈復は反語によむ。「青雀ハ如何ゾ鳩鳥ノ媒タラン。」詩自體については、屈の理解は非と思われるが、特に7・8句あたりやや遊戯的な色合いも感じられ、完璧な絶望の歌としてしまわぬ方がよいのかもしれない。何焯は中間的なよみ方、

「青雀如何ゾヤ 鳩鳥媒トナル。」鈴木も、青雀ではなく「鳩鳥の媒を用いるしがあしかりし。」いずれにしても、女性の所在を非現實の世界に設定する點、遠いはずの地を遠くないと稱する點、仲だちに青雀（＝青鳥）を出す點など、〔無題（相見時難）150〕の「蓬山此去無多路、青鳥殷勤爲探看」と共通し、主體と對象の間に伏在する複雑な事情を暗にのぞかせるかに見える。ただ、作品全體にわたって女と愛との典故で埋めながら、肝心の女性そのものの

輪廓は、例によってついに判然とせぬままに終始するのである。なお8句で統籤が、鳩（＝雄）に作るのは明らかにあやまりだ。（川合康三）

茂陵300 茂陵

漢家天馬出蒲梢 漢家の天馬 蒲梢出ず

首蒼榴花徧近郊 首蒼榴花 近郊に徧し

内苑只知含鳳嘴 内苑只だ知る 鳳嘴を含むを

4 屬車無復挿雞翹 屬車復た雞翹を挿む無し

玉桃偷得憐方朔 玉桃偷み得て 方朔を憐み

金屋脩成貯阿嬌 金屋脩め成して 阿嬌を貯う

誰料蘇卿老歸國 誰か料らん蘇卿 老いて國に歸れば

8 茂陵松柏雨蕭蕭 茂陵の松柏 雨蕭蕭

校

0 三體詩二（四慮）・唐音一〇・瀛奎律髓二八（陵廟類）・唐詩品

彙八八

唐詩類苑二七（地部陵墓類）

1 蒲 錢本「蒲」に改む

梢 唐音・律髓「梢」 品彙「稍」

2 首 叢刊本「首」 稿本「首」を「首」に改む

花 三體詩「華」

編 高麗本・朱鶴齡本・全唐詩・三體詩・律髓・品彙「遍」

3 合 高麗本・三體詩・唐音・律髓・品彙「銜」

稿本「銜」に改む

朱鶴齡本・全唐詩校注「一作銜」

嘴 叢刊本・稿本・統籤・錢寫本・毛本・朱鶴齡本・全唐詩・

三體詩・律髓・品彙「嘴」

6 脩 三體詩・唐音・律髓・品彙「粧」

稿本「粧」に改む

高麗本「粧」作修 朱鶴齡本・全唐詩校注「一作粧」

8 蕭蕭 高麗本・唐音・律髓・品彙「瀟瀟」

韻

下平三蕭(蕭)四宵(翹・嬌)同用

下平五肴(稍・郊)獨用

胡震亨(統籤題下注)

首二句。誤出韻。

何焯

〔評本〕廣韻。五肴獨用。與三蕭四宵不通用。稍郊。皆五肴中字。

○稍字。原非韻。

紀昀

〔評本〕此及楚宮詩27。皆三蕭四宵五肴同押。唐人自程試以外。

不甚遵陸法言孫愜。當時自必有例。今不可考。似乎奸「協」ま

たは「叶」の譌か)韻耳。若四皓廟詩(五松驛199の譌)用斤字。

則唐人眞諄臻殷同用。諸家之證甚明。

馮浩

戊籤。首二句出韻。按。唐人不拘。

王力は「出韻。是近體詩的大忌。：盛唐以前、除上面所說欣韻的

情形之外、近體詩絕對不出韻、中唐(約在公元七八〇至八四〇)

以後、偶然不免有出韻的情形。」(漢語詩律學四節近體詩押韻問

題)と言い、まず本詩を例にあげるが、どちらかといえは紀昀の

考え方の方が事實に近い。松尾良樹「李義山詩韻譜」(本學報五

四册三五二頁)参照。

*

胡震亨(咏古類)

3 含鳳嘴。謂口濡膠也。此言武帝好獵。

4 天子出則鸞旗在前。屬車在後。此言武帝爲期門微行。

朱鶴齡

按史武宗好遊獵及武戲。親受道士趙歸眞法籙。又深寵王才人。欲

立爲后。此詩全是託諷。

5 楊慎曰。本是瑤池宴罷留王母。俗作玉桃偷得憐方朔。直似小兒

語耳(升菴詩話八書貴舊本條)。愚按漢武內傳。王母降承華之宮。

嚴車欲去。帝叩頭殷勤。乃留。若瑤池西宴。自是穆王事。如何可

合。徧檢宋本俱無之。不可以語出用修而不覈其實。

朱彝尊。

亦崑體也。

何焯

〔讀書記〕八句中包括貫穿。極工整而不牽率。

1 梢作梢（評本 本條なし）。○定遠（馮班）云。蒲梢馬名。已蒼（馮舒）云。首句亦有病（評本 出字有病。蒲梢。馬名。非地。

○言蒲梢。乃天馬之子。出字無病）。

2 點化工妙。○起二句指用兵（評本 「起二句指」なし）。

3 指收獵（評本 「指」なし）。

4 指微行（評本 「指」なし）。

5 指神仙（評本 「指」なし）。

6 指聲色（評本 「指」なし）。

7・8 落句。只借子卿一襯。風刺自見於言外。○此詩始不甚愛之。

後觀西崑酬唱集。求如此者絕不可得。乃嘆義山筆力之高（評本

「不可得」を「少」に作る）。

〔評本〕武帝窮兵黷武。其師出無名。賊用民命。莫甚於伐宛之役。故獨以爲刺。外勤遠略而內則不能戒慎。妄冀神仙而不能擯遠聲色。又皆卽其行事之相反者譏之也。○朱長孺曰。此篇刺武帝

（當作）。

陸鳴皋

考武宗兼好遊獵。又寵幸王才人。故此章并及之。前半俱言遊獵。

首聯。以馬引入。次聯。言但習調弓之事。而法駕亦不整也。五句。

以一憐字寫求仙。六句。以一貯字寫內嬖。結有曲終人散之意。感

諷良深。不徒咏史之工已也。

徐德泓

李義山七律集釋稿（三）

蘇卿歷盡艱辛。似不能老。不意歸國。而耽逸樂。冀長生者反不見矣。故曰誰料。落想凌空。

姚培謙

此感武宗舊事。必是升遐後作。故借茂陵名篇。按史武宗好遊獵及武戲。親受道士趙歸真法籙。又深寵王才人。欲立爲后。大抵皆少年血氣未定事。好獵必好馬。鳳鸞常舍。備絃斷也。雞翹不挿。好武扮也。既慕玉桃之延年。仍聞金屋之專寵。六年未滿。竟爾升遐。結句。深歎其不能清心寡慾養壽命之原。垂戒切矣。

屈復

唐書。武宗好遊獵。受道士趙歸真籙。深寵王才人。此詩哭武宗而以茂陵比之也。無復插雞翹。已死也。以方朔比歸真。以阿嬌比才人。蘇卿。自喻也。王茂元卒後。義山閒居太原（朱鶴齡李義山詩譜會昌四年）按。義山是時往來京師。退居太原。宣宗元年。鄭亞請爲觀察判官檢校水部員外郎。故曰誰料蘇卿老歸國茂陵松柏雨蕭蕭。

程夢星

朱長孺箋。按史武宗好遊獵及武戲。親受道士趙歸真法籙。又寵王才人。欲立爲后。此詩全是託諷。

紀昀

〔詩說上〕前六句一氣。七八折轉。集中多此格。此首尤一氣鼓盪。神力完足（評本 前六句一氣。七八掉轉作收。義山多用此格。此首尤神力完足。其言有物故也）。○蘅齋（周助瀾）評曰。此首確

是茂陵懷古詩。以爲託諷。恐失作者之意（評本 本條なし）。

馮浩

朱曰。此詩。全是託諷武宗。何曰。首二謂動遠略。三四謂好獵。

五謂好仙。六謂好內。結借蘇卿一襯。諷刺自見言外。包括貫穿。

極工整而不牽率。浩曰。武宗武功甚大。故首聯重筆寫起。不僅游

獵武戲也。推之好仙好色。而仍歸宿邊事。武之所以爲武也。亦非

專是託諷。謂借發故君之感。則合乎忠厚矣。蘇卿未必有所指。徐

氏（逢源）謂宣宗立。武宗朝貶逐五相李宗閔楊嗣復牛僧孺崔珙李

珣。同日召還。義山本牛黨。蘇卿指僧孺等。深文之論。吾無取焉。

又曰。此章的是慨武宗矣。然謂直詠漢武。以爲諷戒。意味固已深

長。詩中妙境。其趣甚博。隨人自領之耳。

4 此謂已殂落。弩絃可續。而壽命難延。五六又追述。

5 （朱鶴齡）此辨極是。不可震其名而爲所欺也。

6 漢書外戚傳。武帝卽位。陳皇后擅寵嬌貴十餘年。此舉一以該後

宮。

張采田

〔會箋〕慨武宗也。蘇卿自謂。徐氏乃謂宣宗立。武宗朝貶逐五相

李宗閔楊嗣復牛僧孺崔珙李珣。同日召還。義山本牛黨。蘇卿指僧

孺輩。不知義山自正書祕邸後。其於牛黨。所關淺矣。後又從鄭亞。

望李回。及李黨疊敗。然後始向子直告哀。無緣此時已傾心牛黨也。

徐氏臆說。殆不可從。

〔辨正〕唐人遷宦。卑官多好以賈誼蘇武借喻。此蘇卿歸國。義山

自比也。義山會昌六年服闋入京。武宗已崩。詩前六句。分寫武功

好獵求仙寵王才人事。結則以蘇卿藉發故君之慨。所謂日西春盡到

來遲也。徐氏謂指牛黨。謬矣（おなじく「年譜會箋」會昌六年。

相思 299 詩箋「日西春盡到來遲」即誰料蘇卿老歸國茂陵松柏雨蕭

蕭意。武宗崩於三月。故曰春盡也）。

方回

義山詩。織組有餘。細味之。格律亦不爲高。此詩譏諷漢武甚矣。

謂驕侈如此。終歸於盡也（律髓刊誤紀批 義山殊有氣骨。非西崑

之比。此語未是）。

顧璘（唐晉評）

此篇八句用八件故事。不過皆是武帝事。無高興。無關鍵。但起結

略稱耳。

胡以梅（古迹類）

通首譏刺漢武之意。一二。言其務遠勞民。三四五六。謂其但知苑

圃巡幸。好神仙。宮闈晏妮之私也。結獨借蘇武盡節。乃武皇不及

一見。徒調於陵寢而不勝其寂寞矣。史記。武帝伐大宛。得千里馬。

名曰蒲梢。作天馬之歌。今詩出字。出名也。：詩用鳳嘴雞翹。言

於內苑遊畋。則不復他出遊幸也。第五句。朱箋云。楊升菴曰。本

是瑤池晏罷留王母。：愚謂瑤池句。文通理順。言就好神仙晏樂之

不休。若玉桃句。則止謂好神仙。然憐字無力。苟有王母。則連類

引用瑤池。總是縹緲之談。不必拘泥也。

近代注釋

〔森槐南〕下卷一頁。〔高橋和巳〕一二四頁。〔安徽師大〕六一頁。

* * *

0 8句の首二字を借りて詩題とし、典型的な借題が一篇の首二字を機械的にとるのは明瞭に異なつて、ことばの選擇がいささか作爲的である。しかし、詩題のとおり正面から茂陵に漢武を歌うのか否かについては、議論が分れるところで、主題を隠蔽する意圖でわざと茂陵と題したとする解釋もありうる。

1 〔史記二四樂書〕後伐大宛。得千里馬。馬名蒲梢。次作以爲歌。歌詩曰。天馬來兮從西極。經萬里兮歸有德。承靈威兮降外國。涉流沙兮四夷服。〔漢書九六上西域傳〕大宛國。…宛別邑七十餘城。多善馬。馬汗血。言其先天馬子也（孟康曰。言大宛國有高山。其上有馬不可得。因取五色母馬置其下與集。生駒。皆汗血。因號曰天馬子云）。

〔文選二三阮籍詠懷詩十七首之五〕天馬出西北。由來從東道。〔李白天馬歌〕天馬來出月支窟。背爲虎文龍翼骨。

漢家 〔史記一三〇太史公自序〕天子始建漢家之封。而太子公留滯周南。不得與從事。故發憤而卒。〔文選二七石崇王明君詞〕我本漢家子。將適單于庭。〔李白贈從弟之遙詩〕漢家天子馳駟馬。赤車蜀道迎相如。〔盧綸送信州姚使君詩〕楚國上腴收賦重。漢家良牧得人難。

天馬 〔漢書二二禮樂志・郊祀歌十九章天馬十〕天馬來。開遠門。踈予身。逝昆侖（文穎曰。言武帝好仙。常庶幾天馬來。當乘

之往發昆侖也）。

〔山海經北山經〕馬成之山有獸焉。其狀如白犬而黑頭。見人則飛。其名曰天馬。其鳴自詘。

蒲梢 〔漢書九六下西域傳贊〕（孝武）聞天馬蒲陶。則通天宛安息。自是之後。明珠文甲。通犀翠羽之珍。盈於後宮。蒲梢龍文。魚目汗血之馬。充於黃門（孟康曰。四駿馬名也。師古曰。梢馬音所交反）。〔文選三張衡東京賦〕駙承華之蒲梢。飛流蘇之驪殺（薛綜注。駙。副馬也。承華。廐名也。言取華廐之蒲梢以爲副馬也）。〔元稹江邊詩〕高門受車轍。華廐稱蒲梢。〔廣韻五肴・拍字注〕蒲梢。良馬名也。

2 〔史記一二三大宛列傳〕俗嗜酒。嗜嗜蒲梢。漢使取其實來。於是天子始種苜蓿葡萄肥饒地。及天馬多。外國使來衆。則離宮別觀旁。盡種葡萄苜蓿極望（漢書九六上西域傳略同）。

苜蓿 〔西京雜記一〕樂遊苑自生玫瑰樹。樹下多苜蓿。苜蓿一名懷風。昔人或謂之光風。風在其間。常蕭蕭然。日照其花。有光采。故名苜蓿爲懷風。茂陵人謂之連枝草。〔漢書九六上西域傳顏師古注〕今北道諸州舊安定北地之境。往往有苜蓿者。皆漢時所種也。陳直「史記新證」にいう、「苜蓿現關中地區、常普遍栽植。與平茂陵一帶尤多、紫花、葉如豌豆苗。」（一九三頁）〔張正見輕薄篇〕細躑躅連錢馬。傍趨苜蓿花。〔王維送劉司直赴安西詩〕苜蓿隨天馬。葡萄逐漢臣。〔杜甫贈田九判官詩〕宛馬總肥春苜蓿。將軍只數漢嫖姚。

榴花 〔博物志〕張騫使西域還。得安石榴（御覽九七〇）。〔陸機與弟書〕張騫爲漢使外國十八年。得塗林安石榴也（御覽九七〇）。〔新修本草一七安石榴條陶弘景注〕石榴以花赤可愛。故人多植之。尤爲外國所重。〔孔紹安石榴詩〕可惜庭中樹。移根逐漢臣。只爲來時晚。開花不及春。〔李嶠甘露殿侍宴詩〕御筵陳桂醕。天酒酌榴花。〔元稹感石榴二十韻〕何年安石國。萬里貢榴花。迢遞河源道。因依漢使槎。義山に〔石榴45〕の詩がある。七絶集釋稿（本學報五一册五七八頁參照）。

偏 〔王維山居即事詩〕鶴巢松樹偏。人訪羣門稀。〔杜甫秦州雜詩二十首之五〕浮雲連陣沒。秋草徧山長。助字辨略四に、「偏猶悉也。」

近郊 〔周禮地官載師〕以宅田士田賈田。任近郊之地。以官田牛田賞田牧田。任遠郊之地（鄭注 司馬法曰。王國。百里爲郊。杜子春云。爲郊。五十里爲近郊。百里爲遠郊）。〔錢起東臯早春寄郎四校書詩〕窮達戀明主。耕桑迹近郊。

3・4 〔漢書五七下司馬相如傳〕嘗從上至長楊獵。是時天子方好自擊熊豕。馳逐羣獸。相如因上疏諫。其辭曰。今陛下好陵阻險。射猛獸。卒然遇逸材之獸。駭不存之地。犯屬車之清塵（師古曰。塵謂行而起塵也。言清者。尊貴之意也）。輿不及還轍。人不暇施巧。雖有烏獲逢蒙之技不能用。枯木朽株盡爲難矣。且夫清道而後行。中路而馳。猶時有銜槩之變。況乎涉豐草。踴丘虛。前有利獸之樂。而內無存變之意。其爲害也不難矣。夫輕萬乘之重。不

以爲安。樂出萬有一危之塗以爲娛。臣竊爲陛下不取（文選三九にも上書諫獵として載せる）。また文帝と對照的な武帝の軍事と奢侈ごのみに對する諫言がある。〔漢書六四下賈捐之傳〕對曰。至孝文皇帝。閱中國未安。偃武行文。則斷獄數百。民賦四十。丁男三年而一事。時有獻千里馬者。詔曰。鸞旗在前。屬車在後（師古曰。鸞旗。編以羽毛。列繫幢旁。載於車上。大駕出。則陳於道而先行）。吉行日五十里。師行三十里。朕乘千里之馬。獨先安之。於是還馬。與道里費。而下詔曰。朕不受獻也。其令四方毋求來獻。〔白居易八駿圖詩〕穆王八駿天馬駒。後人愛之寫爲圖。屬車軸折趁不及。黃屋草生棄若遺。文帝却之不肯乘。千里馬去漢道輿。

3 **內苑** 〔晉書一二呂光載記〕以孝武太元十四年。僭即三河王位。置百官自丞郎已下。謙其羣臣于內苑新堂。

只知 4句の無復と對しており、知も助字とみなすべきで、是とはほ同義であろう。知が動詞でなく助字となる場合については、〔促漏195〕定知の注參照（集釋稿（本學報五四册四二五頁））。

鳳嘴 〔十洲記〕鳳麟洲在北海之中央。洲上多鳳麟。數萬各爲群。亦多仙家。黃鳳喙及麟角。合煎作膠。名之爲續弦膠。或名連金泥。此膠能續弓弩已斷之弦。刀劍斷折之金。武帝天漢三年。帝幸北海祠恒山。四月。西國王使至。獻此膠四兩。吉光毛裘。武帝受以付外庫。不知膠裘二物之妙用也。以爲西國雖遠。而上貢者不奇。稽留使者未遣。又時武帝幸華林園射虎而弩弦斷。使者時

從駕。又上膠一分。使口濡以續弩弦。帝驚曰異物也。乃使武士數人共對掣引之。終日不脫。如未續時也。膠色如碧玉。この話はまた博物志二異産にも見える。

〔杜甫病後遇王倚飲贈歌〕鱗角鳳嘴世莫識。煎膠續絃奇自見。

4 屬車 雞翹

〔後漢書志二九輿服上〕乘輿大駕。公卿奉引。太僕御。大將軍參乘。屬車八十一乘。備千乘萬騎。西都行祠天郊。甘泉備之。：乘輿法駕。：屬車三十六乘。前驅有九旂雲罕〔東京賦曰。雲罕九旂。薛綜曰。旂旗名。鳳凰闔戟〔薛綜曰。闔之言函也。取四戟函車邊〕。皮軒鸞旗。皆大夫載。鸞旗者。編羽旆。列繫幢旁。民或謂之雞翹。非也。蔡邕の獨斷下の記述もほぼおなじ。

〔文選一班固東都賦〕先驅復路。屬車案節。〔又三張衡東京賦〕屬車九九。乘軒並轂〔薛綜注。副車曰屬。言相連也。屬車有藩者曰軒。皆在後。爲三行。故曰並轂。〕李善注。漢雜事曰。諸侯貳車九乘。秦滅九國。兼其車服。故大駕屬車八十一乘。班駘重旆。朱旆青屋〔李善注。徐廣車服志曰。輕車置駘於軾上。載以屬車。然置駘於駘。曰班駘〕。奉引既畢。先輅乃發〔薛綜注。奉引。謂引道者。言引道之次已定。前車乃發〕。鸞旗皮軒。通帛綉旆。帝王は狩獵に際しても鸞旗整然たるのが本來のかたちである。〔杜甫八哀詩・李璣〕忽思格猛獸。苑囿騰清塵。羽旗動若一。萬馬蕭駘駘。詔王奉射雁。拜命已挺身。

〔馮浩補注〕舊書職官志。屬車一十有二。古者。屬車八十一乘。

皇朝置十二乘也。

5

〔博物志八史補〕七月七日夜漏七刻。王母乘紫雲車而至。：王母索七桃。大如彈丸。以五枚與帝。母食二枚。：帝曰。此桃甘美。欲種之。母笑曰。此桃三千年一生實。唯帝與母對座。其從者皆不得進。時東方朔竊從殿南廂朱鳥牖中窺母。母顧之謂帝曰。此窺牖小兒。嘗三來盜吾此桃。帝乃大怪之。由此世人謂方朔神仙也。

〔漢武故事〕東郡送一短人。：召東方朔問。朔至。呼短人曰。巨靈。汝何忽叛來。阿母還未。短人不對。因指朔謂上曰。王母種桃三千年一作子。此兒不良。已三過偷之矣。遂失王母意。故被謫來此。上大驚。始知朔非世中人。〔柳宗元摘櫻桃贈元居士詩〕蓬萊羽客如相訪。不是偷桃一小兒。

玉桃 〔神農經〕玉桃。服之長生不死。若不得早服之。臨死日

服之。其尸畢天地不朽〔御覽九六七〕。〔漢武內傳〕〔王母〕又命侍女更索桃果。須臾。以玉盤盛仙桃七顆。大如鴨卵。形圓青色。以呈王母。母以四顆與帝。三顆自食。：母曰。此桃三千年一生實〔廣記三漢武帝條〕。〔抱朴子內篇二〇祛惑〕崑崙上有：玉李玉瓜玉桃。其實形如世間桃李。但爲光明洞徹而堅。須以玉井水洗之。便軟而可食。

偷得 〔元稹使東川詩・望喜驛〕滿眼文書堆案邊。眼昏偷得暫

時眠。〔溫庭筠舞衣曲〕蟬衫麟帶壓愁香。偷得鸞篋鎖金縷。

6

〔漢武故事〕〔帝〕年四歲。立爲膠東王。數歲。長公主嫖抱置膝上。問曰。兒欲得婦不。膠東王曰。欲得婦。長主指左右長御百

餘人。皆云不用。末指其女問曰。阿嬌好不。於是乃笑對曰。好。若得阿嬌作婦。當作金屋貯之也。長主大悅。乃苦要上。遂成婚焉。〔漢書九十七上外戚陳后傳〕孝武陳皇后。長公主婢女。

〔玉臺新詠五柳惲長門怨詩〕無復金屋念。豈照長門心。〔又六費昶長門后怨〕金屋貯嬌時。不言君不入。〔白居易長恨歌〕金屋粧成嬌侍夜。玉樓宴罷醉和春。〔元稹夢遊春七十韻〕卓女白頭吟。阿嬌金屋賦。

脩成 〔謝先輩記念拙詩偶有此寄204〕改成人寂寂。寄與路綿綿。〔晉昌晚歸馬上贈590〕嗅自微微白。看成沓沓殷。

7・8 〔漢書五四蘇武傳〕天漢元年。武帝遣武以中郎將使持節送匈奴使留在漢者。因厚賂單于。答其善意。武與副中郎將張勝及假吏常惠等。募士斥候百餘人俱。凡隨武還者九人。武以始元六年春至京師。詔武奉一太牢謁武帝園廟。拜爲典屬國。秩中二千石。賜錢二百萬。公田二頃。宅一區。常惠徐聖趙終根皆拜爲中郎。賜帛各二百匹。其餘六人老歸家。賜錢人十萬。復終身。武留匈奴凡十九歲。始以彊壯出。及還。須髮盡白。

誰料 〔白居易江樓月詩〕誰料江邊懷我夜。正當池畔望君時。〔又若勸酒詩〕誰料平生狂酒客。如今變作酒悲人。

蘇卿 〔李白千里思詩〕李陵沒胡沙。蘇武還漢家。〔賈島巴興作〕蘇卿持節終還漢。葛相行師自渡瀟。

歸國 〔漢書四五息夫躬傳〕上繇是惡躬等。下詔曰。其免躬〔孫〕寵官。遣就國。躬歸國。未有第宅。寄居丘亭〔張晏曰。丘

亭。野亭名。師古曰。此說非也。丘。空也。〕

8 〔劉長卿故女道士婉儀太原郭氏挽歌詞〕淮王哀不盡。松柏但蕭蕭。

茂陵 〔漢書六武帝紀〕〔建元二年〕初置茂陵邑〔應劭曰。武帝自作陵也。師古曰。本槐里縣之茂鄉。故曰茂陵。〕〔元朔二年〕徙郡國豪傑及訾三百萬以上于茂陵。〔後元二年二月〕丁卯。帝崩于五柞宮〔臣瓚曰。帝年十七即位。即位五十四年。壽七十一。入殯于未央宮前殿。三月甲申。葬茂陵〔臣瓚曰。自崩至葬。凡十八日。茂陵在長安西北八十里也。〕蘇武的歸國はその六年後である。

〔李白登高丘而望遠海樂府〕銀臺金闕如夢中。秦皇漢武空相待。君不見驪山茂陵盡灰滅。牧羊之子來焚登。〔白居易海漫漫樂府〕雲濤煙浪最深處。人傳中有三神山。山上多生不死藥。服之羽化爲天仙。秦皇漢武信此語。方士年年采藥去。君看驪山頂上茂陵頭。畢竟悲風吹蔓草。〔許渾學仙二首之二〕聞有三山未知處。茂陵松柏滿西風。義山にまた〔寄令狐郎中69〕茂陵秋雨病相如〔七絕集釋稿〕本學報五一册五九七頁參照。

松柏 〔古詩十九首之十三〕驅車上東門。遙望郭北墓。白楊何蕭蕭。松柏夾廣路〔李善注〕白虎通曰。庶人無墳。樹以楊柳。楚辭曰。風颯颯兮木蕭蕭。仲長子昌言曰。古之葬者。松柏梧桐以識其墳也。〔古詩十五從軍征〕遙望是君家。松柏冢纍纍。〔陶淵明擬古九首之四〕松柏爲人伐。高墳互低昂。

蕭蕭 前項の李善注に引く九歌山鬼篇あるいは荆軻歌以來、蕭蕭はふつう風の音だが、杜詩には雨に關するものがあり、「雨三首之二」片片水上雲。蕭蕭沙中雨。「久雨期王將軍不至」天雨蕭蕭滯茅屋。空山無以慰幽獨。また劉長卿にも「送梁侍御巡永州詩」蕭蕭江雨暮。客散野亭空。義山に他に二例、「明日46」憑欄明日意。池閣雨蕭蕭。「細雨342」帷飄白玉堂。簾卷碧牙牀。楚女當時意。蕭蕭髮彩涼。總じてざんざん降りの豪雨ではなく、むしろかそけき小糠雨の形容に用いられている。

異文の、サンズイをつけた瀟の字の場合は、「詩鄭風風雨」風雨瀟瀟。雞鳴膠膠（毛傳 瀟瀟。暴疾也）。ここにはふさわしくなさそうである。

なお西崑酬唱集上に「漢武」と題する楊億はじめ七人の七律を収めるが、李宗諤の作品は特に忠實に義山の本詩を襲う。「西母不來東朔去、茂陵松柏冷蕭蕭。」

* * *

本詩に歌われる対象について、舊解は、(A)漢の武帝、(B)義山と同時代の天子武宗、二様に分かれる。

A₁ 懷古 顧璘・胡震亨・徐德泓・紀昀

A₂ 譏諷 方回・何焯・胡以梅

B₁ 託諷 朱鶴齡・陸鳴皋・姚培謙・程夢星

B₂ 感慨 屈復・馮浩・張采田

A B それぞれにおける項目分類はもとより絶対的のものではない。

たとえば馮浩が「託諷」に借りて故君の感を發し」たとのべるように。またB₂説の屈復・張采田は7句の「蘇卿」を義山自身とし、徐逢源(馮注引)は武宗に追われた牛僧孺らとするが、馮浩は特定する要なしという。近代注釋では、森がB₂説に消極的同意、安徽師大は積極的同意(特に屈・張に)、高橋はA説(批判的詠史詩)。本詩の係年は、馮浩・張采田・安徽師大みな當然武宗の死の年すなわち會昌六年だが、高橋は不編年。

馮注本では、「茂陵」の直前に〔昭肅皇帝挽歌詞三首362 363 364〕が置かれ、馮浩の箋に「武宗大有武功、篤信仙術、絕類西漢武帝、三詩用典、大半取之」とあり、安徽師大は茂陵詩武宗影射の有力な根據にする。これは單なる主觀的臆測と質を異にし、説得力がある。この詩實は武宗を歌う、その可能性は十分にある。しかし、ほかならぬ馮浩自身が、「直ちに漢武を詠じ」るとみなしても、詩の味わいは「固已に深長」と但し書をつけざるをえなかった。森が評するように、そのまま讀んでも「非常に面白い詩」なのである。何が何でも武宗に關係づけねば正解にはならぬのかどうか。この詩にもし武宗の影を求めるならば、武宗の死に觸發された義山が、武宗をモチーフに漢の武帝を詠じたので、詩の眼目はやはり漢武にある、といった見方だつて(B説とは逆に)、できると思われる。

1・2 漢の武帝さまのお家に遙か西域大宛ウヰルグナの天馬の血すじをひく蒲梢フサ號がもたらされ、天馬とともに西域の草木であるムラサキウ

マゴヤシにザクロが長安の都の周邊いたる所に茂るようになった。こうした異國的情緒は、西へ西へと擴がりゆく光明にみちた帝國の世界を象徴する。1句がもし阮籍や李白の詩をふまえるならば、「蒲梢ヨリ出ズ」で、義山の典故誤用になるが、何焯（評本）のよみ方で通ずる。

3 皇帝さまの廣大な御苑には猛獸を放し飼いにして狩獵にあけくれ、次から次と切れる弓の弦に、獵場で係は續弦膠——これも西域傳來、鳳凰のクチバン製の不思議のニカワ——をもっぱら口にふくみっ放して待機する。なにしろこのニカワ、唾でぬらすだけでわけなく弦をつないでしまう。

4 皇帝さまの出御には、おともの車は九九八十一臺、いかめしく、とりばね飾りの旗をたてるのがきまり。それをされないのも、ひとえに狩獵にうつつをぬかさされるゆえ。4句の解釋は、(1)胡震亨の微行説、(2)屈復の崩御説、(3)胡以梅の不他出説、(4)陸鳴皋・姚培謙の武扮説、と分れるが、いま(4)をとる。武帝はなりふり構わず危険もかえりみず出歩いては、司馬相如に諫められた。屬車は後衛、雞翹は先導で、これも字義どおりではやや矛盾するが、つまり先拂いも供ぞろえもろくろくとのえず、本来あるべき莊麗嚴肅な禮文のかたちも忘れて好きな武事（＝出獵）に熱中、の意味であろう。

5 皇帝さまの御寵愛は仙術で鳴る東方朔。それはかれが西王母の、三千年に一度しか實らぬ玉桃を三度もぬすみ食ったからで。不老

長壽の指南役。

6 まだ御歳四つ五つのころから、金の御殿ができたならその中に大好きな嬌ちゃんを入れてやるといわれていた皇帝さまは、その言葉は今何倍にもして實現された。脩を「粧」とする異文は、一見長恨歌の例に合致するかに見えるが、後者は「金屋（ノ中）ニ粧成リテ」で、やはり脩の字がよい。また脩成の成は偷得の得に見合う助字と考えるべきである。ただし助字辨略二の「語助」では輕すぎ、徐仁甫廣釋詞四八二頁の「罷」の訓はここには重すぎる。動詞のあとにつく成の語義については待考。

7・8 こうした、大漢帝國の空前絶後の榮華のさなか、その演出者たる武帝さまの命を承けて匈奴へ使した蘇武殿は、囚われの辛苦を十九年なめ盡したが、すっかり年老いてようやく國に歸りついた彼を待っていたのは、思いもかけず武帝さまの眠る茂陵の松と柏とに、しとしと（或いはしょぼしょぼ）とものさびしく降る雨なのであった。

1～6は、ただ光明のみを述べる。そして突如、場面が變る。見えなかった暗さが見えてくる。しかし、それは全く新たなものの發見ではない。むしろあることを契機として始めて見えてくると言ふべきか。斷層の鋭さによって、1～6に蘇武のイメージが逆照射され、それがかけとなって明るさ華やかさがさらに増してくる、と感じられる。

（松尾良樹）

宋玉 394

宋玉

何事荆臺百萬家 何事ぞ荆臺 百萬の家

唯教宋玉擅才華 唯だ宋玉をして才華を擅にせしむ

楚詞已不饒唐勒 楚詞已に唐勒を饒さざれば

4 風賦何曾讓景差 風賦何ぞ曾ち景差に讓らんや

落日渚宮供觀閣 落日渚宮 觀閣を供し

開年雲夢送煙花 開年雲夢 煙花を送る

可憐庾信尋荒徑 憐む可し庾信 荒徑を尋ね

8 猶得三朝托後車 猶お得たり三朝 後車に托さるるを

校

0 唐詩鼓吹七

唐詩類苑一三二(人部懷賢類)

1 臺 鼓吹・高麗本「門」 稿本旁注「門」 全唐詩校注「一作門」

2 唯 鼓吹・高麗本「獨」 統籤・全唐詩校注「一作獨」 稿本

旁注「獨」

錢本「誰」を「唯」に改む

3 詞 他本みな「辭」

8 托 席本・鼓吹・高麗本を除き他本みな「託」

韻

下平九麻(家・華・差・花・車) 獨用

*

胡震亨(咏古類)

朱鶴齡

8 三朝。謂梁魏周也。

朱彝尊

5 宮供夢送。疊韻。

8 結意何所指。

何焯

〔讀書記〕此題下缺一宅字(評本「此題疑闕一宅字」)。○此作

者自謂(評本「此篇自謂」)。○落句澹澹收住。自有無窮感慨

(評本「落句以歷事文武宣三朝。皆不得志也」)。

〔評本〕

3 楚辭。疑微辭。

5・6 宮供觀閣。語近郭冠軍家。夢送烟花。又似此婢雙聲也。○

言渚宮觀閣雲夢。莫非助發才華。爲詞賦用也。

姚培謙

此歎遇合之不如前人也。自古文人。福命多薄。獨天生宋玉之才。

一時無兩。忌者既多。必遭偃蹇。乃渚宮雲夢間。侍從逍遙。主臣

相得。何其幸與。至千年下。如庾信者。偶居故宅。猶若丐其餘

庇。而得承事三朝。文人薄命之說。吾終有所未信也。蓋無聊自遣

之詞。

屈復

前半。宋玉才華。乃楚一人。後半。言渚宮雲夢。餘風猶在。故庾

信一尋荒逕。永託後車。意言己之才華。可追庾信。渚宮雲夢。亦

堪託宋玉之後車。而流落終老。其視庾也遠矣。

程夢星

文士失職。今古同情。以古準今。能無慨歎。宋玉之才華。不但荆臺百萬家之所無。卽同受屈原之指受者。唐勒景差。亦皆不及。可謂荆臺獨步矣。然考其身世。不過從遊於當時之諸侯而已。渚宮之供觀園。未嘗無情。雲夢之透烟花。未嘗不樂。無如以此窮年。有何情緒。空留故宅。庾信重來。轉不如其流離播遷之時。猶得歷事梁魏周三朝。以博貴顯也。杜子美詠懷古蹟。亦有可憐宋玉臨江宅。異代猶教庾信居之語。蓋託之古蹟以詠懷。義山亦此意也。詩中落日字。乃日復一日之義。開年字。乃年復一年之義。不可作夕陽獻歲解。若只就本字論之。落日猶可。開年無謂。豈有千載之下。推求古人之明年耶。其所以言及年月者。乃自歎歷佐藩幕之久。所以言及三朝者。亦自歎不得志於敬宗文宗武宗也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取宋玉也。曰。四家以爲失之鉤剔過明。不愜人意也。〔評本〕「四家評曰。失之鉤勒過明。又是一種不愜人意」。

馮浩

在江陵作。時將於開春還桂。五六。兼以託意。

6 開年。明年也。言無早晚無年歲。皆足遲其才藻。

7·8 按北史傳。庾信先爲東宮抄撰學士。是武帝時也。後事簡文帝元帝。則三朝矣。信奔江陵。元帝除御史中丞。故與尋荒徑合。乃舊解誤以梁魏周爲三朝。身既留北。安得尙尋南土哉。信雖遭亂

漂流。猶得以文學侍從三朝。而義山歷文武宣三朝。沉淪使府。故有羨於子山也。語曲情哀。味之無極。歸州亦有宋玉宅。此則江陵。

張采田

〔會箋〕馮氏云。在江陵作。時將於開春還桂。五六。兼以託意。〔辨正〕此詩乃玉谿使南郡時作。江陵有宋玉宅。故以自況。託寓深婉。味之無盡。至鉤勒分明。本係詩法應爾。紀氏不愜意此種。宜其妄下苛責也。○紀評有引廉衣（李仲簡）蒙泉（宋弼）四家諸說。然既爲紀氏所取。則責備有歸矣。

黃侃

此首自傷無宋玉之遇。末二句尤顯。開年卽楚辭所云開春獻歲。猶言新年新春耳。程解大謬。五六二句。正自傷無宋玉之遇也。

郝天挺

5 渚宮卽江陵也。

6 開年卽新年也。

7·8 庾信。梁元帝承制除御史中丞。聘西魏。：遷儀同三司。周孝閔踐作。遷開府。

廖文炳

此專詠宋玉事。首言荆門士家之多。何宋玉獨擅其才華也。彼作大言賦而得雲夢之田。作風賦以諷楚王之過。是其詞賦。首邁唐勒。高出景差。非獨擅才華乎。且居荆門。日落則渚宮日色。可以供吟。新年則雲夢烟花。可以送玩。是以才華日生。當時梁庾信居宋玉之宅。而挹其風流儒雅。以效宋玉之所爲。亦有才思見用。故仕梁魏

周三朝。得托君王後車。而近侍于君也。庾信雖有才而失臣節。以其仕三朝也。此庾信所以不如宋玉。益見宋玉才華矣乎。

王清臣・陸貽典

此言宋玉才華。獨擅於荆門。故唐勒景差。皆有所不及也。且玉居荆門。日落則渚宮觀閣。足供吟眺。新年則雲夢煙花。來助流連。是以當時梁之庾信。居宋玉之宅。而挹其風流。歷仕梁魏周三朝。托宋玉之後車。而近侍於君王也。則豈非才華有獨擅哉。

胡以梅（古迹類）

前四句。贊美其才華。五。從荆臺之景。言其寂寞。供字奇。猶慣用也。宮中觀閣尤高。落日每供其照耀。但有落日。則無繁華之物矣。六。切玉之賜田在雲夢。送乃流年之相送烟花過去也。同是敘景。只須供字送字。意味幽深。遂不落庸套。名家用意不同。結言所遺之宅居之。猶出文物之庾開府。而爲三朝侍從之臣。輕輕帶出譏刺戲謔。以爲餘波。精雅之妙。：開。新也。亦每年之意。北史。庾信先事梁簡文帝。後奔江陵。元帝除爲御史中丞。聘西魏。留爲開府儀同三司。至周孝閔帝。爲驃騎大將軍。故云三朝。後車。屬車。侍從所乘者。

近代注釋

〔森槐南〕下卷一二八頁。

* * *

0 詩題は2句の「宋玉」二字を借り、ないし選んだので、何焯の疑うように「宅」の字が誤脱したのではあるまい。本作品は詩題

李義山七律集釋稿（三）

と主題の關係は比較的明瞭に見える。義山には宋玉への言及が甚だ多いが、特に關連ある三篇を掲げておく。

〔過鄭廣文舊居29〕宋玉平生恨有餘。遠循三楚弔三閭。可憐留

著臨江宅。異代應教庾信居。〔楚吟239〕山上離宮宮上樓。樓前宮畔暮江流。楚天長短黃昏雨。宋玉無愁亦自愁。〔有感31〕非關宋玉有微詞。却是襄王夢覺遲。一白高唐賦成後。楚天雲雨盡堪疑。

また義山の宋玉詠には次の杜詩の影響があるう。〔詠懷古跡五首之二〕搖落深知宋玉悲。風流儒雅亦吾師。悵望千秋一灑淚。蕭條異代不同時。江山故宅空文藻。雲雨荒臺豈夢思。最是楚宮俱泯滅。舟人指點到今疑。

なお西崑酬唱集下には、楊億らの同題の七律三首を載せるが、義山詩の模倣のあととは、ここでは必ずしも顯著でない。

1 何事 〔曹植陳審舉表〕若朝司惟良。萬機內理。武將行師。方難克弭。陛下可得雍容都城。何事勞動鸞駕。暴露於邊境哉。〔陶淵明飲酒二十首之二〕善惡苟不應。何事空立言。〔嚴維宿荆溪館呈丘義興〕。先生能館我。何事五湖遊。詩語解上に「何爲也」「何故也」といい、廣釋詞一二六頁に「猶何用、疑怪之語」という。もとより詩文の常語ではあるが、何事を冒頭に用いる例は珍しい。

荆臺 〔說苑九正諫〕楚昭王欲之荆臺游。司馬子綦進諫曰。荆臺之游。左洞庭之陂。右彭蠡之水。南望獵山。下臨方淮。其樂使人遺老而忘死。人君游者。盡以亡其國。願大王勿往游焉。王曰。荆臺乃吾地也。この話は孔子家語三辯政にも見える。〔方輿勝覽

三四三

二七湖北路江陵府」荆臺 在監利縣西三十里。土洲之南。

ここでは荆州ひいては郢都、唐の江陵府を指す。〔周禮夏官職

方氏〕正南曰荆州。其山鎮曰衡山。其澤藪曰雲膏。其川江漢。

〔文選四五皇甫謐三都賦序〕蓋蜀包梁岷之資。吳荆割南之富。魏

跨中原之衍。〔通典一八三州郡古荆州〕江陵郡江陵縣 故楚之郢

地。秦分郢置江陵縣。今縣界有故郢城。：又有紀南城。楚渚宮。

漢津鄉故城。在今縣東也。

鼓吹などは荆臺を荆門に作る。〔文選一二郭璞江賦〕若乃巴東

之峽。夏后疏鑿。絕岸萬丈。壁立巖駁。虎牙嶸豎以屹峩。荆門關

竦而磬礪〔李善注 盛弘之荆州記曰。郡西泝江六十里。南岸有山。

名曰荆門。北岸有山。名曰虎牙。二山相對。楚之西塞也。：荆門

上合下開。開達山南。有門形。故因以爲名。〔杜甫詠懷古跡五首

之四〕羣山萬壑赴荆門。生長明妃尙有村。荆門といえは峻險な山

のイメージが強く、郢都ないし江陵といった大都會にはあまりそ

ぐわない。義山の〔荆門西下78〕参照。

百萬家 〔文選五九沈約齊故安陸昭王碑文〕姑蘇輿壤。任切關

河。都會殷負。提封百萬〔李善注 漢書。天子畿方千里。提封百

萬井。臣瓚案。舊説云。提。最凡。言大舉頃畝也。〔韓愈出門詩〕

長安百萬家。出門無所之。〔漢書三八高五王傳〕〔主父〕偃方幸用

事。因言齊臨淄十萬戶。市租千金。人衆殷富。鉅於長安。〔劉禹

錫白太守行〕蘇州十萬戶。盡作嬰兒啼。義山にまた〔無題73〕枉

破陽城十萬家。ただし江陵あるいは荆州を百萬家と稱する例は未

見。

2 宋玉 〔史記八四屈原列傳〕屈原既死之後。楚有宋玉唐勒景差

之徒者。皆好辭而以賦見稱。然皆祖屈原之從容辭令。終莫敢直諫。

〔王逸九辯序〕九辯者。楚大夫宋玉之所作也。〔文選五〇沈約宋

書謝靈運傳論〕周室既衰。風流彌著。屈平宋玉。導清源於前。賈

誼相如。振芳塵於後。英辭潤金石。高義薄雲天。〔玉臺新詠四吳

邁遠陽春曲〕宋玉歌陽春。巴人長歎息。

才華 〔江淹知己賦〕陳國之華者。故吏部郎殷孚其人也。：才

多深見。氣有遠度。：既含道潤。亦發才華。采耀秋月。文麗冬雪。

：擬余才令前華。比余文令後彥。余結袂於山石。君憑神於寒散。

〔杜甫寄裴施州詩〕將老已失子孫憂。後來況接才華盛。義山はま

たみずからに對して、〔安平公詩593〕丈人博陵王名家。憐我總角

稱才華。

3・4 〔宋玉大言賦〕楚襄王與唐勒景差宋玉。遊於陽雲之臺。王

曰。能爲寡人大言者上座。：玉曰。并吞四夷。飲枯河海。跋越九

州。無所容止。身大四塞。愁不可長。據地盼天。追不得仰〔古文

苑二〕。〔又小言賦〕楚襄王既登陽雲之臺。令諸大夫景差唐勒宋玉

等並造大言賦。賦畢而宋玉受賞。王曰。此賦之迂誕則極巨偉也。

抑未備也。：有能爲小言賦者。賜之雲夢之田。：宋玉曰。：二子

之言。磊磊皆不小。何如此之爲精。王曰。善。賜以雲夢之田〔古

文苑二〕。

3 楚詞 〔王逸九辯序〕宋玉者。屈原弟子也。閔惜其師。忠而放

逐。故作九辯。以述其志。至於漢興。劉向王褒之徒。咸悲其文。依而作詞。故號爲楚詞。亦采其九。以立義焉。〔漢書六四上朱買臣傳〕嚴助貴幸。薦買臣。召見。說春秋。言楚詞。帝甚說之。

已不 〔文選四二魏文帝與吳質書〕諸子但爲未及古人。自一時之雋也。今之存者。已不逮矣。後生可畏。來者難誣。然恐吾與足下不及見也。

饒 助字辨略二に「饒得爲縱任者、饒、讓也、讓而不與之校、故得轉爲縱任也。」といひ、張相語辭匯釋一には本詩3・4句をあげ、「饒與讓爲互文、饒即讓也。」とする。

唐勒 〔漢書三〇藝文志詩賦略〕屈原賦二十五篇楚懷王大夫。有列傳。唐勒賦四篇楚人。宋玉賦十六篇楚人。與唐勒並時。在屈原後也。〔宋玉賦〕楚襄王時。宋玉休歸。唐勒讓之於王〔古文苑二〕。

4 何會 義山の他の用例はおおむね「不會」と同義だが、ここは助字辨略二に載せる「何會、猶何乃。」の訓をとりたひ。辨略三にはまた「何乃、猶云何但。」という。しかし文語解一に、何乃を「イハンヤ」とよんで「コレ何況ノ義アリ」といひ、また廣釋詞一〇六頁況乃の項には「猶何乃。」とあるのを考え合わせるならば、3句の已不「：シナカッタ（カラニハ）」と呼應し、マシテ：スルトガアロウカ、と理解すべきではなからうか。「何但」ではやや軽い感がある。

景差 〔文選一三宋玉風賦〕楚襄王游於蘭臺之宮。宋玉景差侍。有風颯然而至。以下宋玉の獨演で、景差は一言もしない。前引漢

志詩賦略にも景差の名は見えない。〔王逸大招序〕大招者。屈原之所作也。或曰景差。疑不能明也。

〔何焯（評本）〕景差。古今人表作景瑳。小顔。音子何反。小司馬史記索隱云。法言及古今人表皆作瑳。今作差。是字音耳。徐裴鄒三家皆無音。是讀如字也。如字。即謂讀差。今入麻韻。不知何處。漢書二〇古今人表では「中中」に宋玉、「中下」に唐勒・景瑳を配し、顔師古の注に「瑳音子何反。即景差也。」とある。

5・6 李白宮中行樂詞八首之三 烟花宜落日。絲管醉春風。

5 落日 〔玉臺新詠一徐幹情詩〕微風起閭闔。落日照階庭。〔又七簡文帝戲作謝惠連體十三韻〕香煙出窓裏。落日斜階上。

なお「謝眺は從來ほとんど詩材にならなかつた落日を正面からとりあげた詩人」（伊藤正文・一海知義「漢・魏・六朝詩集」三二二頁）だが、唐人もその落日詠にきわめて強い印象を受けている。〔元魏古今詩人秀句序〕常與諸學士覽小謝詩。見和宋記室省中。詮其秀句。諸人咸以謝行樹澄遠陰。雲霞成異色爲最。余曰。未若落日飛鳥還。憂來不可極之妙者也。觀夫落日飛鳥還。憂來不可極。謂捫心平屬。而舉目增思。結意爲人。而緣情寄鳥。落日低照。即隨望斷。暮禽還集。則憂共飛來。美哉玄暉。何思之若是也（文鏡秘府論南卷集論）。

渚宮 〔左傳文公十年〕使（子西）爲商公。沿漢沔江。將入郢（杜氏注）沿。順流。沔。逆流。正義 渚宮當郢都之南。王在渚宮（杜氏注）小洲曰渚。下見之。〔元和郡縣圖志關卷逸文一〕

江陵縣。楚宮。梁元帝即位於楚宮。蓋取渚宮以名宮。渚宮。楚別宮。…水經注曰。今城楚船官地也。春秋之渚宮。〔齊東昏侯誅謝朓詔〕昔在渚宮。構扇蕃邸。日夜縱諛。仰窺俯畫。〔南齊書四七謝朓傳〕。

〔梁元帝玄覽賦〕臨章華而流眄。見舊楚之淒涼。試極目乎千里。何春心之可傷。其舊渚宮也。夾江帶阡。布護井田。通達交道。高門接連。人要水心之劍。家有給耕之田。既追隨而得性。寔燕處而超然。若平臺之中。觀閣相通。雄梁渡水。壯翼臨空。金堤之路。銅鞮之宮。閣寫陵霄。樓布麗譙。橫走馬而爲觀。擬牽牛而作橋。〔文苑英華一二六〕。

唐詩における渚宮の用例は、〔張說登九里臺是樊姬墓詩〕、北分陽臺陌。南識郢城阡。漠漠渚宮樹。蒼蒼雲夢田。〔武元衡酬嚴司空荆南見寄詩〕簾捲青山巫峽曉。煙開碧樹渚宮秋。〔劉禹錫荆州歌二首之一〕渚宮楊柳暗。麥城朝雉飛。〔溫庭筠渚宮晚春寄秦地友人詩〕風華已杪然。獨立思江天。

觀閣 〔文選四五石崇思歸引序〕其制宅也。却阻長堤。前臨清渠。百木幾於萬株。流水周於舍下。有觀閣池沼。多養魚鳥。〔韓愈送鄭尚書赴南海詩〕蓋海旂幢出。連天觀閣開。

6 開年 〔楚辭九章思美人〕開春發歲兮。白日出之悠悠。〔梁元帝纂要〕正月孟春。亦曰孟陽。孟陬。上春。初春。開春。發春。獻春。首春。首歲。初歲。開歲。發歲。獻歲。肇歲。芳歲。華歲。〔初學記三歲時部卷〕。

〔沈約與徐勉書〕今歲開元。禮年云至。懸車之請。事由恩養。…而開年以來。病增慮切。當由生靈有限。勞役過差。〔梁書一三本傳〕。〔庾信行雨山銘〕草綠衫同。花紅面似。開年寒盡。正月遊春。〔盧思道駕出園丘詩〕開年簡時日。上辛稱天吉。

雲夢 〔文選一九宋玉高唐賦〕昔者楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺。〔又神女賦〕楚襄王與宋玉遊於雲夢之浦。〔邊讓章華賦〕楚靈王既遊雲夢之澤。息於荆臺之上。〔李百藥郢城懷古詩〕大蒐雲夢澤。壯觀章華築。なお〔夢澤62〕七絕集釋稿〔本學報五一册五八八頁參照〕。

煙花 〔王融芳樹詩〕相思早春日。煙華雜如霧。〔沈約傷春詩〕年芳被禁籞。煙華繞層曲。

〔姜質亭山賦〕其中烟花露草。或傾或倒。霜幹風枝。半聳半垂。玉葉金莖。散滿階墀。〔洛陽伽藍記二正始寺〕。〔李白黃鶴樓送孟浩然之廣陵詩〕故人西辭黃鶴樓。煙花三月下揚州。

7・8 〔北史八三庾信傳〕侯景作亂。梁簡文帝命信率宮中文武千餘人。營於朱雀航。及景至。信以衆先退。臺城陷後。信奔於江陵。梁元帝承制。除御史中丞。及即位。轉右衛將軍。封武陵縣侯。加散騎侍郎。〔庾信哀江南賦〕我之掌庾承周。以世功而爲族。經邦佐漢。用論道而當官。…逮永嘉之艱虞。始中原之乏主。…彼凌江而建國。始播遷於吾祖。〔倪璠注〕元帝渡江。八世祖滔始徙居江陵也。…誅茅宋玉之宅。穿徑臨江之府。〔倪璠注〕庾氏本新野人。今賦所云。自滔徙居江陵。卽是宋玉舊宅。非信始居也。北史。滔

過江。家南郡江陵縣。是也。

〔杜甫送李功曹之荊州充鄭侍御判官重贈〕會聞宋玉宅。每欲到

荊州〔九家注〕杜時可補遺。按余知古渚宮故事曰。庾信因侯景之

亂。自建康遷歸江陵。居宋玉故宅。在城北三里。杜田の杜詩補

遺正謬に引く右の内容は、現行の渚宮舊事には見えず、孫星衍の

補遺にも採録されていないが、唐代には廣く流布していた話し

く、杜甫にいま一例、關係する作があり、〔送王十六判官詩〕荒

林庾信宅。爲仗主人留。そのほか唐人の詩中にしばしば言及され

る。〔張說過庾信宅詩〕蘭成追宋玉。舊宅偶詞人。筆湧江山氣。

文騎雲雨神。〔韓愈寒食日出游詩〕今朝寒食行野外。綠楊匝岸蒲

生迸。宋玉庭邊不見人。輕浪參差魚動鏡〔江陵の法曹參軍時代の

作〕。〔元稹送友封詩〕蘭成宅裏尋枯樹。宋玉亭前別故人。

7 荒徑 (1)〔鮑照秋夜二首之二〕荒徑馳野鼠。空庭聚山雀。〔沈

約八詠詩・歲暮感衰草〕感衰草。衰草無容色。憔悴荒逕中。寒荻

不可識。：逕荒寒草合。草長荒逕微。〔杜甫中丞嚴公垂寄一絕奉

答二絕之二〕只須伐竹開荒徑。倚杖穿花聽馬嘶。

(2)〔陶淵明歸去來辭〕三徑就荒。松菊猶存。〔王維晚春嚴少尹

與諸公見過詩〕松菊荒三徑。圖書共五車。

8 三朝 杜詩の例はすべて三代の帝の意。〔奉濟驛重送嚴公四韻〕

列郡謳歌惜。三朝出入榮〔九家注〕三朝。武仕明肅代也。〔吳王

彭州掄詩〕兵戈闔兩觀。寵辱事三朝〔九家注〕趙云。三朝。言王

君事明皇肅宗與當日之代宗。〔歸夢詩〕倫生惟一老。伐叛已三朝

〔仇注〕三朝。謂玄宗肅宗代宗。唐詩の他の二例もおなじ。〔劉

長卿送徐大夫赴廣州詩〕遠人來百越。元老事三朝。〔李遠贈寫御

容李長史詩〕三朝供奉無人敵。始覺僧繇浪得名。また義山にあと

一例あるがこれもしかり。〔淮陽路284〕猜貳誰先致。三朝事始平

〔朱鶴齡注〕歷德順憲三朝。始討平之。

托後車 〔文選四二魏文帝與朝歌令吳質書〕天氣和暖。衆果具

繁。時駕而遊。北遵河曲。從者鳴笳以啓路。文學託乘於後車。

〔沈約八詠詩・解佩去朝市〕充待詔于金馬。奉高宴于柏梁。：託

後車令侍華幄。遊渤海兮泛清漳。

〔詩小雅豚鬻〕道之云遠。我勞如何。飲之食之。教之誨之。命

彼後車。謂之載之〔箋云。在國依屬於卿大夫之仁者。至於爲末介。

從而行。道路遠矣。我罷勞。則卿大夫之恩宜如何乎。渴則予之飲。

飢則予之食。：車敗則命後車載之。後車。倅車也。

* * *

前代の文人、さらには前々代の文人にひきくらべて我が身をな

げくところに作者の意はあると、衆目が一致する。例によって注

文の多い紀昀は、その意が判然露骨すぎるとして斥けるほどであ

る。ただ、それに對して詠懷、遣懷などと題せず、あえて宋玉と

するところが、この詩の作者らしいといえようか。

1・2 美しすぎるほどに魅惑的な風景がなめられる荆臺、その

荆臺のある楚の國の郢都の百萬もの家の人々よ、どうして文才の

開花を宋玉ばかりに獨占させたのか——といったくなるほど、か

れはすぐれた文人であったのだが。2句の「唯」の字、「誰」ではおかしいし、「獨」ではこくがない。底本のままがいい。

3・4 屈原のあとを繼いで作った楚辭のできればでも夙に唐勅にゆずらなかつた、のであってみれば、ましてや風の賦の競作で景差ごときにひけをとったりするわけがあるうか。

5・6 落日の光の中の渚宮——みぎわの離宮は、かれの筆のために宏壯華麗な建築の數々を提供してくれ、初春の雲夢の澤は、やはりかれのためにも、やのかかった花々という風物を送りどけてくれた。このように好意的な自然と文化の環境に包まれ、持ち前の文才をより一層觸發されつつ、来る年ごとに、文學の侍従としてまことに恵まれた生涯を、宋玉は過したのだ。

5句の「供」を、胡以梅が「奇」と評し、また上下句に雙聲疊韻の對が指摘されるとおり、この一連は相當に技巧を凝らしたあとが見える。山之内正彦氏の詳密な論證によれば、唐代前期には「落日」の語が、後期には「夕陽」の語が、それぞれゆうひ、ひについての特徴的な表現となる（「落日と夕陽」東洋文化研究所紀要六三冊）。義山も全身的に感情をこめて暮景を歌うときはおのずと「夕陽」を用いたので、決して「落日」ではなかつた。ここをゆうひとよまぬほどひどい誤解をした注釋者（程夢星）さえ出たのは、技法的には見るべき點があつても、やはり表現として眞にぬきざしならぬかたちに到達しなかつたゆえであるう。

7・8 かの梁の、これもすぐれた文の人庾信は、侯景の叛亂のさ

なか、荒れはてた道をたどつて江陵——そのかみの郢都の宋玉の舊居へ難を避けたのだが、その變轉混沌たる世の中にあつて、なお梁の三代の朝廷（帝）に文を以て仕えることができたのは、まったくうらやましいかぎりだ。7句の「荒徑」は、あるいは歸去來辭をもふまえているか。8句の「三朝」は、朱鶴齡でなく馮浩の説が正しい。

定型詩の極めて微少なワクのなかで無限の時空間構造を作り出して見せるのは、義山の特技といつてよいが、この「宋玉」では、題注0にあげた（過鄭廣文舊居）の詩ほど、いれこ型ないし合わせ鏡型の造型が完璧ではなく、さほどの興行が感じられない。鄭廣文の詩を、馮注の引く田蘭芳は評していう、「即ち後人復た後人を哀しむの意。那轉婉曲、遂りて人をして迷わしむ。」

馮浩と張采田は、本詩が荆南節度使の治所江陵府において作られたものとみなし、「三朝」を義山自身にあてはめれば文宗武宗宣宗に當るとして、大中元年初頭に係年する（安徽師大本年表おなじ）。馮氏・張氏の考えどおり、實際に現地を訪れたときに製作されたのならば、この係年は正確だろう。

（松岡秀明）

九日503

九日

會共山翁把酒時 會て山翁と 酒を把りし時
霜天白菊遶堦墀 霜天白菊 堦墀を遶る

十年泉下無消息 十年泉下 消息無く

4 九日樽前有所思 九日樽前 思う所有り

不學漢臣栽苜蓿 漢臣の苜蓿を栽うるを學ばず

空教楚客詠江離 空しく楚客をして江離を詠せしむ

郎君官貴施行馬 郎君官貴く 行馬を施し

8 東閣無因再得窺 東閣再び窺うを得るに因無し

校

0 掖言一一怨怒條・北夢瑣言七李商隱草進劍表條(3478句の

み引く)・漁隱叢話後集一四・唐詩紀事五三・詩林廣記前集六

唐詩類苑二二(歲時部九月九類)

九日 高麗本・詩林廣記「九日調令狐綯不見」

錢本校注「一本下有懷令狐府主□字」馮浩本校注「錢

曰。一本下有懷令狐楚府主六字。按。果有六字。可以息

衆喙。然或後人所注。必非原注。余未之見」

稿本・全唐詩題下注「商隱爲彭陽公(全唐詩作令狐楚)從事。彭

陽之(全唐詩作楚既歿)子綯。繼有韋平之拜。惡商隱從鄭亞之辟。

以爲忘家恩(此句全唐詩無)。疎之。重陽日。商隱留此詩于廳上

(全唐詩作詩於其廳事)。綯乃補太學博士(此句全唐詩無)。覩之慙悵。乃(全

詩無乃字)肩閉此廳。終身不處。」

1 翁 掖言・叢話・詩林廣記「公」程夢星本校注「當作公」

時 掖言・叢話・唐詩紀事・廣記「扈」高麗本「扈一作時」

朱鶴齡本・全唐詩校注「一作扈」

2 邊塔墀 掖言「正離披」

高麗本校注「一作正離披」

邊 高麗本・朱鶴齡本・全唐詩「繞」

叢話「滿」

3 消息 朱鶴齡本・全唐詩「人間一作消息」稿本旁注「人間」

5 不 掖言「莫」馮浩本校注「一作莫。非」

首 叢刊本「首」稿本「首」を「首」に改む

6 空教 掖言「還同」

離 叢刊本・稿本「籬」

7 貴 北夢瑣言「重」

8 閣 瑣言・高麗本・錢本「閣」朱鶴齡本・全唐詩校注「一作

閣」稿本旁注「閣」

因 叢話「人」

再得 掖言「更重」瑣言「許再」叢話「得再」

韻

上平五支(籬・窺)六脂(墀)七之(時・思)同用

*

胡震亨

太平廣記云。義山爲令狐綯父彭陽公從事。綯繼有韋平之拜。似疎

義山。未嘗展分。重陽日。詣宅不見。於廳事題此詩。綯慙悵。命

肩閉此廳。終身不處(廣記一九九李商隱條。中華書局本校注。原闕出處。今見北夢瑣言卷七)。一說以爲綯

見詩。爲補博士。

錢龍揚

北夢瑣言。李商隱員外。依彭陽令狐楚。以賤奏獲知。相國既沒。彭陽之子綯。繼有韋平之拜。似疎隴西。未嘗展分。重陽日。義山詣宅。于廳事上。留題云々。相國觀之。慙悵而已。乃扇閉此廳。終身不處也。(項言)。若溪漁隱曰。唐史本傳。令狐楚奇其文。使與諸子遊。楚徙天平宣武。皆表署巡官。後從王茂元之辟。其子綯以爲忘家恩。放利偷合。謝不適。(當作)。綯富國。商隱歸窮。綯憾不置。則商隱此詩。必此時作也。若謂綯有韋平之拜。瘦疎商隱。其言殊無所據。余故以本傳證之。但綯父名楚。商隱又受知於楚。詩中有楚客之語。題於廳事。更不避其家諱何耶。(漁隱叢話後集一四玉谿生條)。嘗考

綯之黜義山也。鈞黨之禍也。唐自元和以後。黨勢浸盛。逮文宗時。李宗閔牛僧孺令狐楚。與李德裕大相仇怨。角立門戶。驅除異己。宗閔諸人爲尤。李太尉相武宗五年。雖未嘗忘情于太牢。然救楊嗣復李珣之死。猶有大臣之度。大中初立。贊皇被參乘之禍。令狐綯當軸。舉贊皇之客。誅翦無子遺矣。義山幼受知于彭陽。自開成登第後。相國既沒。累辟王茂元鄭亞盧弘正府。三人皆李太尉委用。故綯尤深惡之。十年輔政。抑之終于使府。史謂義山忘恩放利。而綯尤檢刻寡恩哉。

朱鶴齡

山翁。山簡也。以比彭陽公。

吳喬

故犯家諱。令不得削去耳。

6

何焯

〔評本〕

3·4·5·6 一氣鼓盪。言不爲蕃駿之計。

7 太平廣記作重。佳。

陸鳴皋

前半。言從事楚幕。撫今而思昔也。第三聯。言綯不收置門下。而使同于放逐之臣。施行馬。合阻客意。

姚培謙

此諷綯不能繼其先志也。山翁高會。白菊逸壩。見所汲引者皆同類也。十年泉下之思。正以今日樽前之不如昔耳。且公實非私厚於我一人。苜蓿。比異類。江離。義山自託。栽培不苟。氣味相投。我獨何心。輒自忘其舊恩耶。東閣之跡睽疎。實以郎君官貴故也。言外見綯之疎己。必有小人讒間之。或以此觸其忌諱。故益憾之歟。

屈復

一二昔。三結一二。四起五指綯。六自己。七結五六。八結前四。○首蓿。以秣宛馬者。喻不以祿榮才士也。漢臣。比楚。楚客。自比。

程夢星

舊人說此詩者以爲題令狐綯之廳壁。駁之者以爲楚客字不避綯之家諱。必非題壁。此論得之。況明言貴施行馬。東閣難窺。又何從題壁耶。然要爲怨綯而作無疑也。通篇訓詁。往往有不得其腹聯承接之解者。皆由誤看有所思三字。以爲承上思山公把酒之時。不知其

爲透下思郎君官貴之日也。史家行文之法。多有伏筆。然後遙接。

爲詩何獨不然。若以有所思爲思山公。則腹聯緊接。竟怨令狐楚矣。

考其史傳。受知於楚。辟爲幕官。又授以箋奏之學。而義山祭令狐

公文云。將軍樽旁。一人衣白。十年忽然。蠲宣甲化。則深感奏辟。

正與此首前四句合。豈有追思其不加栽培而敢怨於淪落失所者乎。

此詩蓋感其先世之舊德。而歎後人之不古若也。首以山公喻楚。正

謂其表奏辟請。有如山公之啓事薦賢。共把酒卮。又謂其門下曲宴。

不啻安昌之親厚門生也。此乃即景興懷。姑舉一時一事言之耳。無

端十年。又逢九日。於是感傷泉下。消息渺然。歎息樽前。有思時

事。思之者何。思郎君也。郎君之官。今已貴顯。使念世舊。何惜

栽培。無如屢啓陳情。竟不之省。轉謂無行。嗤謫排擠。是則不能

如張鷟之求天馬。首宿常培。但能爲上官之譖騷人。江離哀怨。未

則直據其情事。明點其指歸以結。有所思三字及腹聯二語。又暢言

其見絕之深。不但望斷於加恩。亦且禮絕於晉接。東閣者公孫丞相

見賢之地。以比楚之第宅。乃屬楚非屬絢也。其時言絢。但謂官貴。

則猶屬未相之先。不然韋平繼拜。則立言有不止於官貴者。詩當在

絢爲學士。或爲舍人時作。但絢爲學士。爲大中二年。義山從鄭亞

在嶺表。絢爲舍人。爲大中三年。義山乃自嶺表入朝。詩當作於其

時。

1 愚意當是山公誤爲山翁耳。山公。山濤也。晉書。濤所甄拔人物。

各爲題目。時稱山公啓事。以比令狐楚爲宜。朱意以山簡有習池之

醉。詩言把酒。遂爲謂簡。

紀昀

〔詩說上〕蒙泉（宋弼）評曰。一氣鼓盪（評本「蒙泉以爲一氣

鼓盪。信然。然後四句大評。非詩人之意）。○補香泉（汪存寬）

評曰。應璩與滿公琰書。外慕郎君謙讓之德。註云。應曾事其父。

故稱郎君（評本本條なし）。〔詩說下〕^補遺問九日詩第五句如何

解。曰。首蓓。外國草也。漢使者乃採歸。種之于離宮。令狐絢以

義山異己之故。而排擯不用。故曰不學漢臣栽首蓓（評本「首蓓

乃外國之草。張騫移種而歸。種之上苑。義山本彭陽弟子。絢以其

親於茂元。遂爲敵國。故曰不學漢臣栽首蓓。此種究是迂曲）。

馮浩

北夢瑣言。令狐楚沒。子絢繼有韋平之拜。疎義山未嘗展分。重陽

日。義山詣宅。於廳事留題云云。絢覩之慙恨。乃扁閉此廳。終身

不處。唐摭言。大和中。令狐趙公在內廷。重陽日。義山謁。不

見。因以一篇。紀於屏風而去。唐詩紀事。云云。絢乃補義山太學

博士。若溪漁隱曰。絢父名楚。商隱又受知於楚。更不避其家諱。

何耶。：徐（逢源）曰。楚沒於開成丁巳。至大中二年戊辰。已十

二年。尙可舉成數言。時絢官學士。亦已貴矣。若絢當國。則不得

云十年。且豈僅施行馬哉。○浩曰。義山於子直。旣怨之。猶不能

無望之。敢於其宅發狂犯諱哉。諸家之辨已明。余更定爲此時途次

所作。第六句。兼志客程也。蓋大中二年。絢已充內相。故異鄉把

盞。遠有所思。恐其官已漸貴。我還京師。尙未得窺舊時之東閣。

況敢望其援手哉。預爲疑揣。不作實事解。彌見其佳。觀一作許再

可悟矣。及三年入京。內實睽離。外猶聯絡。屢曾留宿。備見詩篇。何至不得窺東閣哉。本傳所云絢謝不與通。亦誤也。後人妄撰一宗公案。皆不足信。故詳引而駁之。○又曰。韻語陽秋（一一）曰。絢之忘商隱。是不能念親。商隱之望絢。是不能揆己也。論頗平允。

1 按晉書。山簡鎮襄陽。惟酒是耽。詳後河東公樂營置酒583。簡稱山公。亦稱山翁。後人每言嗜酒山翁。如李白詩。笑殺山翁醉似泥也。山濤。史亦言其飲酒至八斗方醉。然初不以酒名。余以太和七年令狐楚爲吏部尙書。而疑當作山公。非也。文集明言將軍樽旁矣。

2 令狐最愛白菊。

5 以樹物比樹人。歎其不承父志。

張采田

〔會箋〕北夢瑣言：又唐摭言：王定保孫光憲皆五代人。於唐耳目相接。所載似可信從。於東逢雪500在九月。則重陽日當已至京矣。詩意憾其子。追感其父。山翁。指令狐楚。楚最愛菊。故云。楚歿於開成丁巳。至大中二年戊辰。已十二年。云十年泉下無消息者。

舉成數也。苜蓿。祇取移種上苑之意。楚客江離。喻從鄭亞。兼屬望李回事。亦以放逐自況也。結即未嘗展分之恨。程氏云。東閣難窺。又何從題壁。：若韋平繼拜。又不止於官貴矣。詩當在絢爲學士或舍人時作。：說亦大通。孫王輩不免紀載小疏耳。至唐詩紀事又云。絢乃補義山太學博士。考博士一除。在（大中五年）徐幕罷後。且非九月。此則紀事者隨手贅及。不足據矣。又案荅溪漁隱云。

絢父名楚。商隱受知於楚。更不避其家諱。何耶。馮氏因云。義山：敢於其宅發狂犯諱也。蓋大中二年。絢已充內相。異鄉把盞。遠有所思。：此解亦可從。如此則此詩是入京道中作矣。今故備列於此。閱者擇之。

〔辨正〕苜蓿句。祇取移種上苑之義。言令狐不肯援手。使之沈淪使府。不得復官禁近也。晚唐用事。往往有此種。豈以敵國寓慨哉。紀氏誤會。乃以爲迂曲耳。後四句當作虛料解。意味乃佳。故別本再得窺有作許再窺者。譏以太訐。繆以千里矣。○此詩乃大中二年由桂幕歸後作。桂管在湘之南。故以楚客江離自寓。且暗切屬意李回湖南幕府事也。玉谿詩用典切合極精。無泛設者。非詳攷其本事。不能領其妙處耳。○令狐楚卒於開成二年十一月。至大中二年。約十年餘矣。故詩云十年泉下無消息也。李義山用事精切如此。則此詩確爲大中二年作矣。攷大中二年。義山罷桂州自巴蜀至洛。赴京候選。有九月於東逢雪詩。則重陽安得與子直相見。然北夢瑣言出五代人作。似亦可信。或途次賦此詩。至京後始書於令狐廳事耳。

胡以梅（傷感類）

義山先受知於令狐楚。楚卒。子絢以義山從王茂元辟且娶其女謝絕之。蓋令狐與李德裕相仇怨。各有其黨耳。是以義山于九日詣之。作是詩題于聽事。絢覩之慚恨。乃扁閉此廳。終身不處。首以山簡喻楚。以己比葛疆爲簡所籠。而嘗醉飲。正此霜菊繞堦之際。作已十年。正逢九日。無人問。虛引起郎君謝絕之意。人字。包生死言

妙。若別本易以消息。便無精神。所字。是有着落之字。儘可對人。若消息對所思。反不確當。五。比也。言首猶異域之種。漢臣尙且栽植于中國。何不效之而必令楚客之咏江離乎。對工切。江離。本乎楚騷。所以言楚客。但離騷云。覽椒蘭其若茲兮。又況揭車與江離。注言觀子椒子蘭。變節若此。豈況衆臣而不爲佞媚。則亦不便斥之如是。樂府。江離生幽渚。另有詞。皆言始愛終棄之意。今日咏。則非離騷而用樂府也。結則明言以刺之。

近代注釋

〔森槐南〕下卷二四四頁。〔安徽師大〕一〇五頁。〔陳永正〕九一頁。

* * *

0 九日と題する詩は陶淵明の二作〔九日閑居〕「己酉歲九月九日」以來、文字どおり枚擧にいとまがない。しかし、それらはずべて九日の詩題に忠實であり、主題が九日から外れることはない。たとえば、本作品に歌われた對象のひとりとされる令狐楚の作を見本としてあげてみれば、〔九日言懷〕二九即重陽。天清野菊黃。近來逢此日、多是在他鄉。晚色霞千片。秋聲雁一行。不能高處望。恐斷老人腸。

令狐楚の詩も義山の詩も、ひとしく九日言懷にはちがいないが、前者の行儀のよさに比べ、九日詩一般からの後者のはみ出しぶりはおよそ見當がつくであろう。本作品のばあいは、むろん純粹の借題ではないけれども、通常の詩題と同質の、正文との関連性が

見出しがたいのはたしかだ。

本作品にからむ有名な話柄をのせる各書のうち、既に引かれた北夢瑣言および苕溪漁隱叢話(三五〇頁)以外の二書を引いておく。

〔撫言一怨怒條〕李義山師令狐公文。大中中。趙公在內廷。重陽日。義山謁不見。因以一篇紀於屏風而去。詩曰。(正文略)

〔唐詩紀事五三〕商隱爲彭陽公從事。彭陽之子綯。繼有韋平之拜。惡商隱從鄭亞之辟。以爲忘家恩。疎之。重陽日。商隱留詩於其廳事曰。(正文略) 綯乃補太學博士。

なお義山にいま一篇同題の古詩があるが現行の各本未收なのでついでに掲げておく。

〔天廚禁燔下四平頭韻法條〕李商隱亦用此體作九日詩曰。羸(當作)童瘦馬行荒陬。正是龍山落帽皆。丹楓殞葉紛墮飛。黃花年年負歸期。此生半世走路岐。歸心自逐雙鴻飛。故園秋風黍離離。想見父老相逐隨。乞將問路知何時。功德未就鬢成絲。解鞍地坐長嗟咨。

1~4 〔文集六奠相國令狐公文〕戊午歲(馮注 開成三年)。
弟玉谿李商隱叩頭哭奠故相國贈司空彭陽公。嗚呼。昔夢飛塵。從公車輪。今夢山阿。送公哀歌。古有從死。今無奈何。天平之年。大刀長戟。將軍樽旁。一人衣白。十年忽然。蛻宣甲化。有泉者路。有夜者臺。昔之去者。宜其在哉。

1・2 〔補編五上令狐相公狀七首之一〕某才乏出羣。類非拔俗。

攻文當就傅之歲。識謝奇童。獻賦近加冠之年。號非才子。徒以四丈東平（錢注 舊唐書地理志。天平軍節度使。治鄆州。又。河南道鄆州。隋東平郡）。方將尊隗。是許依劉。每水榭花朝。菊亭雪夜。篇什率徵於繼和。盃觴曲賜其盡歡。委曲款言。綢繆願遇。

1 共 「與」と同義だがやや俗語的な色彩のあるこの助字を義山は愛用する。（無題（白道縈廻）73）注参照。七絶集釋稿（一）本學報五一册六〇四頁。

山翁 〔晉書四三山簡傳〕出爲征南將軍。都督荆湘交廣四州諸軍事。假節。鎮襄陽。：優游卒歲。惟酒是耽。諸習氏：有佳園池。簡每出嬉遊多之池上。置酒輒醉。名之曰高陽池。時有童兒。歌曰。山公出何許。往至高陽池。日夕倒載歸。茗芋無所知。時時能騎馬。倒著白接籬。舉鞭向葛疆。何如并州兒。疆家在并州。簡愛將也。

山翁 山簡のばあい。〔李白襄陽歌〕落日欲沒岷山西。倒著接籬花下迷。襄陽小兒齊拍手。攔街爭唱白銅鞮。傍人借問笑何事。笑殺山翁醉似泥。〔杜甫送田四弟將軍詩〕空醉山翁酒。遙憐似葛疆。

山公 山簡のばあい。〔李白襄陽曲四首之二〕山公醉酒時。酩酊高陽下。〔又之四〕山公欲上馬。笑殺襄陽兒。〔劉禹錫酬令狐相公親仁郭家花下即事見寄詩〕苟令園林好。山公遊賞頻。豈無花下侶。遠望眼中人。〔令狐楚三月晦日會李員外座中頻以老大不醉見譏因有此贈〕不辭便學山公醉。花下無人作主人。

翁公どちらでも山簡。〔王維漢江臨汎詩〕襄陽好風日。留醉與山翁（趙注 翁。文苑英華・瀛奎律髓俱作公。）なお義山詩では山翁、山公いづれも一例で、山公は山濤をさしている。〔贈宇文中丞213〕人間只有嵇延祖。最望山公啓事來。

把酒 〔孟浩然過故人莊詩〕開筵面場圃。把酒問桑麻。待到重陽日。還來就菊花。また李白に〔把酒問月詩〕あり。

2 〔劉禹錫和令狐相公玩白菊詩〕家家菊盡黃。梁國獨如霜。〔又和令狐相公九日對黃白二菊花見懷詩〕素萼迎寒秀。金英帶露香。：空想逢九日。何由陪一觴。〔又酬令狐相公庭前白菊花謝偶書所懷見寄詩〕數叢如霜色。一旦冒霜開。令狐楚の原詩はみな佚。卜孝萱〔劉禹錫與令狐楚〕（中華文史論叢總一三輯）參照。

霜天 〔庾信和裴儀同秋日詩〕霜天林木燥。秋氣風雲高。〔王昌齡李倉曹宅夜飲詩〕霜天留飲故情歡。銀燭金爐夜不寒。〔劉禹錫送李員外赴邠寧使幕詩〕鼎門爲別霜天曉。刺把離觴三五巡。

白菊 〔新修本草六菊花〕正月采根。三月采葉。五月采莖。九月采花。十一月采實（陶弘景集注 又有白菊。莖葉都相似。唯花白。五月取。亦主風眩。能令頭不白）〔尙志鈞輯校本〕。〔杜甫課伐木詩序〕夔人屋壁。列樹白菊。前揭劉禹錫の三詩のほか、白居易〔席上賦白菊詩〕があるが、唐詩類苑一八九花部菊花類に收める作もみな中唐以降で、白菊は唐末でもまだ珍しかった。〔許棠白菊詩〕人間稀有此。自古乃無詩。

がらうい黄菊が普通で、白菊は後發らしい。〔禮記月令〕季秋

之月。：鴻鴈來賓。爵入大水爲蛤。鞠有黃華。〔范成大菊譜〕菊以黃爲正。

壙 〔盧照鄰首春貽京邑文士詩〕梅花扶院吐。蘭葉繞階生。

壙 〔玉臺新詠五沈約六憶詩四首之一〕憶來時。的的上壙墀。

〔李德林天命論〕星精雲氣。共趨走于階墀。山神海靈。咸變理于臺閣。〔張子容樂城歲日贈孟浩然詩〕挿桃銷瘴癘。移竹近階墀。

3 泉下 〔阮瑀七哀詩〕冥冥九泉室。漫漫長夜臺。〔周書一一晉

蕩公護傳〕死若有知。冀奉見於泉下耳。〔李益野田行（一作于鵠詩）〕昔人未爲泉下客。行到此中會斷腸。〔北夢瑣言七李商隱草進劍表條（令狐楚）〕因口占云。前件劍。武軍神兵。先皇特賜。既不合將歸泉下。又不宜留在人間。

消息 ほば音沙汰に當る。相手の(a)たよりか、(b)動靜か、判別しにくいばあいもある。文選には見えないが、六朝以來尺牘の常語。〔陸雲與兄平原書〕近得洛消息。膝永適去。二十日書。彥先訪爲驃騎司馬。〔王獻之尺牘〕願餘上下安和。：適奉永嘉去月十一日動靜。故常患不寧。諸女無復消息。獻之（淳化閣帖九）。詩の用例については〔無題（鳳尾香羅）366〕無消息の注參照（集釋稿）本學報五三册六五三頁。

4 九日 〔魏文帝與鍾繇書〕歲往月來。忽復九月九日。九爲陽數。而日月並應。俗嘉其名。以爲宜于長久。故以享宴高會。：至於芳菊。紛然獨榮。非夫含乾坤之純和。體芬芳之淑氣。孰能如此。故屈平悲冉冉之將老。思殫秋菊之落英。輔體延年。莫斯之貴。〔檀

道鸞續晉陽秋〕陶潛九月九日無酒。於宅邊菊叢中。摘盃把坐其側。久望見白衣人。乃王弘送酒。即便就酌而後歸（初學記四）。〔荆楚歲時記〕九月九日。土人並藉野飲宴（初學記四）。

〔王勃九日詩〕九日重陽節。門門有菊花。不知來送酒。若箇是陶家。〔杜甫九日奉寄嚴大夫詩〕九日應愁思。經時冒險難。

樽前 〔杜甫送長孫侍御赴武威詩〕樽前失詩流。塞上得國寶。

〔白居易酬哥舒大見贈詩〕花下忘歸因美景。樽前勸酒是春風。

有所思 〔漢鏡歌有所思〕有所思。乃在大海南。：從今以往。

勿復相思。相思與君絕（樂府詩集一六）。〔何承天有所思〕有所思。思昔人。曾閱二子。善養親。和顏色。奉昏晨。至誠烝烝。通明神。：哀我生。遭凶旻。幼罹荼毒。備艱辛。慈顏絕。見無因。長懷永思。託丘墳（宋書二樂志）。〔王融有所思〕如何有所思。而無相見時。宿昔夢顏色。階庭尋履綦。

5 〔漢書九六上西域大宛國傳〕漢：又發使十餘輩。抵宛西諸國求奇物。：漢使采蒲陶目宿種歸。天子以天馬多。又外國使來衆。益種蒲陶目宿離宮館旁。極望焉。

漢臣 〔漢書四〇張良傳〕良曰。此難以口舌爭也。願上有所不能致者四人。四人年老矣。皆以上媿媿士。故逃匿山中。義不爲漢臣。然上高此四人。〔杜牧河湟詩〕牧羊驅馬雖戎服。白髮丹心盡漢臣。

首宿 既出。茂陵の注參照。三三五頁。

6 楚客 〔左傳襄公二十六年〕秋。楚客聘於晉。過宋。大子知之。

請野享之。：(伊戾)曰。天子將爲亂。既與楚客盟矣。〔文選三〇江淹休上人別怨〕西北秋風至。楚客心悠哉。〔李白贈范金卿詩〕遼東慙白豕。楚客羞山雞。ただし義山の本文では屈原をさす。

江蘿 〔楚辭離騷〕紛吾既有此內美兮。又重之以脩能。扈江離與辟芷兮。(王逸注)扈。被也。楚人名被爲扈。江離芷。皆香草名。辟。幽也。芷幽而香。初秋蘭以爲佩(王逸注)初。索也。

蘭。香草也。秋而芳。佩。飾也。所以象德。：言己脩身清潔。乃取江離辟芷。以爲衣被。初索秋蘭。以爲佩飾。博采衆善。以自約束也。

〔又〕固時俗之流從兮。又孰能無變化。覽椒蘭其若茲兮。又況揭車與江離(王逸注)言觀子椒子蘭。變志若此。況朝廷衆臣而不爲佞媚。以容其身邪。

〔新修本草七蘿蕪〕一名江蘿。芎藭苗也。生雍州川澤及宛胸。四月五月采葉(集注)人家多種之。葉似蛇床而香。騷人借以爲譬(尙志鈞輯校本)。

7 郎君 〔文選四二應璩與滿公琰書〕璩白。昨者不遺。猥見照臨。：外嘉郎君謙下之德。內幸頑才見誠知己。歡欣踴躍。情有無量(張銑曰。滿炳父寵爲太尉。璩嘗事之。故呼其子曰郎君)。〔後漢書西南夷列傳七六〕(邛都夷)後太守巴郡張翕。：在那十七年。卒。夷人愛慕。如喪父母。：其子滿爲太守。夷人歡喜。奉迎道路。曰。郎君儀貌。類我府君。

〔文集四上兵部相公(令狐綯)啓〕況惟菲陋。早預生徒。仰夫

子之文章。曾無具體。辱郎君之謙下。尙遣瀟翰。〔摭言四師友〕李義山師令狐文公。呼小趙公爲郎君。於文公處稱門生。

行馬 〔周禮天官〕掌舍。掌王之會同之舍。設棧桓再重(鄭注)棧桓。謂行馬。玄謂行馬再重者。以周衛有外內列。〔漢官儀〕光祿大夫。秩比二千石。不言屬光祿。光祿勳門外特施行馬。以旌別之(藝文類聚四九)。

8 東閣 〔漢書五八公孫弘傳〕時上方興功業。婁舉賢良。弘自見爲舉首。起徒步。數年至宰相封侯。於是起客館。開東閣。以延賢人(師古曰。閣者。小門也。東向開之。避當庭門而引賓客。以別於掾史官屬也)。與參謀議。〔後漢書班固傳三〇上〕東平王蒼以至戚爲驃騎將軍輔政。開東閣。延英雄。〔孟浩然題長安主人壁詩〕久廢南山田。叨陪東閣賢。〔劉禹錫和令狐相公初歸京國賦詩言懷詩〕相印昔辭東閣去。將星還拱北辰來。

無因 〔古詩十九首之十四〕思還故里間。欲歸道無因。〔玉臺新詠一秦嘉妻徐淑答詩〕悠悠兮離別。無因兮敘懷。〔又五沈約少年新婚爲之詠〕無因達往意。欲寄雙飛鳧。

令狐綯(八〇二—七九)をそしつたとする點で諸説一致するが、作詩の状況については、小説詩話の記載どおり題壁とみとめるか否かで分れる。

A 題壁肯定 吳喬・胡以梅

B 題壁否定 程夢星・馮浩・張采田(會箋)

そのほか胡震亨・陸鳴泉・姚培謙は北夢瑣言のみを注に引用するので、一應A説、錢龍惕・朱鶴齡・屈復は瑣言などに加え漁隱叢話をも引くので一應B説、とみるべきかもしれない。「辨正」における張采田は態度未定。また近代注釋でも、森槐南と陳永正はA、安徽師大はB、と分かれる。係年は、絢の翰林學士在職の時期を基準に、馮・張は大中二年、安徽師大は大中三年とする。

開成二年（八三七）令狐楚沒。

大中二年（八四八）令狐絢翰林學士となる。

三年（八四九）令狐絢中書舍人となる。

四年（八五〇）令狐絢宰相となる。

詩にまつわるいわゆる本事は、ほとんどが眞偽の判定きわめて困難で、このばあいとて例外ではない。題壁否定説の根據とされる令狐楚の諱使用の問題だが、意識して諱を犯したのだという吳喬の見方にはたしかに一理があり、そもそも撫言以來こうして語り傳えられてきた事實自體、より古く（漁隱叢話以前）には、不自然でありえぬ話だと受けとられなかったのを示すのではないか。さらに「宿晉昌亭驚禽279」の6句に「楚猿」の語があるが、馮浩・張采田によれば晉昌亭は長安の令狐絢の屋敷内であって、題壁の作ではないとしても、ここでも楚の諱が犯されたことにな（馮はこの詩を大中六年、張は大中五年に係ける）。要するに諱の一件だけで題壁の可能性は否定されるなど、そう簡単には行かぬのである。

1 かつて山（簡）翁にも比ぶべき風雅の酒豪（たる元宰相の節度使閣下）と酒をくみ交させていただいた忘れがたい、あの時。

「時」を「卮」とすれば、詩の緊張度が弱まる。

2 霜の氣のみちる秋空のもと、こよなく愛された白菊が、きざはしあたりをぐるりと取り巻いて咲いておりました。「正離披」よりも「選堵墀」の方がイメージが一層具體的になる。

3・4 あれから十年、よみじからの晋沙汰とてなく、今年もめぐりきた九月九日、菊と登高の重陽の日、酒樽を前にしては、ひたすらに、亡き人への思慕あるのみ。程の説は考えすぎで、4句の對象はやはりまず故人であろうが、ただし程のいうほど二つの解釋は全く相容れぬものではあるまい。「人間」とせずとも、「所思」と「消息」で十分まともな對と考えられる。

5 （ところで）むかし漢の天子が遣わされた使臣は遙かな西域の地で手に入れたムラサキウマガヤシを都の近郊に繁殖させました——その態度を見習って人材を育てようとなさらぬお方がおられます。

6 おかげで、かの楚の國を追われた流浪の人とおなじく、空しく江籬のなげきを歌わされる——破目にこのわたくしも陥っているのです。胡以梅は、「江籬」の語は樂府をふまえるとし、安徽師大は離騷に二個所見える「江籬」のうち後の個所を踏まえて佞臣すなわち令狐絢をさすとするが、いずれもとらない。舊説どおり

離騷における正人屈原自身をさすと考える。従って本詩がふまえる「江籬」は當然離騷冒頭の「紛吾」云々の個所でなければならぬ。舊注みな引用をあやまる。

7 といってみてもそれは詮なき繰り言、若様はいまやとても手のとどかぬ官位の貴さ、御門前には厳めしく行馬こまひをめぐらせ、寄りつきもできません、

8 廣く人材を集めるため、かの公孫弘にならって（故宰相が）開放されておりました、お館の東の小門は二度とのぞいて見る術もなくりました。

題壁の話は、あるいは面白すぎるかもしれないが、話のすじの兩唐書李商隱傳などとの照應、さらに語彙が令狐氏關係の他作品と辻褃の合いすぎるほど合うなどからみて、舊説がすべて対象を令狐父子に同定するのは、自然のなりゆきだ。結果として、諷された相手が反省したか立腹したか知らないが、こんなほとんど罵倒に近い皮肉を投げつけてよいとすれば、何をいっても安心な、よほど親密な間柄か、さもなれば縁切り覺悟で喧嘩を賣ったかだろう。では、その相手とされる令狐絢と義山の關係は、當時どのようなのであったのか。義山が絢に與えた——詩題に絢の官名があるなどして確實な——作品は、十一首を數える。そのうち本詩と同時期とされる、大中二年ないし四年の三首、「寄令狐學士66」「夢令狐學士232」「令狐舍人說翫月戲贈4」さらに加えて文一篇「上兵部相公啓」（文集四）、これら一連の詩文が、絢に對して敬愛と

いうよりは鄭重をきわめる姿勢に終始するのを「九日」と比較すれば、内容の共通性が見事に皆無なこと、異様に感じられるほどだ。だからこそわざと借題のかたちにしたのだ、とはいえようが、しかしそれにしても、全く同じ相手にこれほど違った顔をして見せられるものなのか。常識では理解できず、義山の人格が分裂しているとも考えるほかない。

馮浩はひろく同定説支持者だが、そのかれにして、詩題の校注（三四九頁参照）で、間接的に疑念を表明している。一應通説に従って解釋してみたが、一抹以上の不安がのこるのである。

（荒井 健）

附録甲 七律集釋稿(一)校補

無題四首之三116 補注

（六三八頁）

夜闌干 「鮑照冬至詩」長河夜闌干。層冰如玉岸（御覽二八）。なお類聚三、古詩紀六二および集本は「長河結珊瑚」に、また古今歲時雜詠三九は「長河結蘭楫」に作る。

附録乙 七律集釋稿(二)校補

(i) 碧城三首之一151 補釋

（三九八頁）

王清臣・陸貽典

此懷人而不可即。故以比之神人。言碧城之中。塵埃不染。時物皆春。已極清夷華美之象。而且閨苑有書。惟多附鶴。女床有樹。無不棲鸞。亦迥異於常境已。於是思其人。如星之沈於海底。不可見而當臆則猶可見。如雨之過於河源。雖可見而隔座則不可親。所以比之碧城之難至也。末二句未詳。或亦覬望之意。謂若得相親。當百年相守耳。

4 女牆。宋版作女床。…如作女牆。則與棲鸞無及。

(集釋稿(二)では唐詩鼓吹の王・陸の釋を削ったので補う)

(ii)碧城三首之二 152 補釋

(四〇四頁)

馮班 (二馮評閱才調集)

5 鈍云。蘭。

(iii)促漏 195 補釋

(四二七頁)

程湘衡 (才調集補註引)

此與深宮詩 280 同意。故用向月爲雲事。謂止宜向月。更不得爲雲也。落句。似暗用甄后蒲生我池中詩語。

王清臣・陸貽典

此言宮女之怨。當漏促鐘遙之際。動靜皆聞。君起視朝。奏章重疊。不暇來幸矣。前此收殘黛而加新飾。換夕薰而炷新香。皆望君王之幸也。至此則歸去不如羿妻之奔月。夢來難同巫女之行雲。而且南塘漸暖。兩兩鴛鴦。行宮戲水。我曾不如此鳥之得偶也。其能免深宮之怨耶。○此詩之爲深宮怨女。本於郝註。郝之此論。則以首句百官志之條耳。不知促漏遙鐘。何處不聞而必深宮。亦何人不聞而

必宮女。且報章重疊。儘可比之私書欲報之列。而舞鸞睡鴨。亦猶之雲髻罷梳還對鏡。羅衣欲換更添香。深致其寂寞之思也。至向月爲雲。郝謂不能如羿妻巫娥者。亦正以深宮之中。不能遠去。君王之夢。不能相接。所見無非官怨。故拘拘此解。不知此亦可以泛說也。歸去豈知。集作歸去定知。反郝之意。縱如姮娥奔月。終是獨居。神女爲雲。亦成夢幻。不如南塘之鴛鴦。長匹不離耳。二說竝列。以俟知者擇焉。

(iv)井絡 391 補釋

(四四三頁)

王清臣・陸貽典

此攬二山之勝而弔古也。首言井絡天彭。二山在蜀郡。如在一掌之中。蜀倚以爲固而劍閣不如。古謂劍閣天設之險。乃謾語耳。觀夫諸葛之陣圖。松維之邊柝。煙江雪嶺。皆形勝之地。而蜀帝云徂。杜宇之魂欲斷。霸圖既去。真龍之語空傳。今者形勝依然。而廢興則已異矣。將來奸雄輩。亦何事以金牛故智窺圖此地也哉。此正所以折其氣也。